

# メレクザーラ<sup>(1)</sup>



ater Gregor, des Namens der Neunte, auf St. Peters Stuhl, hatte in einer schlaflosen Nacht eine Inspiration, nicht vom Geiste der Weissagungen, sondern der politischen Schikane, dem deutschen Adler die Schwungfedern

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著

鈴木満訳・注・解題

—

聖ペテロの御座<sup>みくら</sup>に就いたグレゴリウス九世<sup>(2)</sup>はある眠れぬ夜はたと靈感を得たが、これは予知の聖霊に導かれてではなく、ドイツの鷲<sup>(3)</sup>が誇り高いローマを眼下に見ることがないよう、その風切羽<sup>きりば</sup>を切り詰めてしまえ、との政治的策謀<sup>さくぼう</sup>から発したやつ。朝日が神聖なるヴァティカン宮殿<sup>(4)</sup>を照らすやいなや、早くも教皇<sup>けいこう</sup>殿下<sup>てんか</sup>は鈴を鳴らして控えている近侍<sup>きんせう</sup>を呼び、高位聖職者会議を招

集するよう命じた。この席でグレゴリウスは祭服イェン・ボンテイファイカリフスニ威儀ヲ正シテ嚴かなミサを執り行い、これが終わると十字軍編成を發議ほつぎ。並み居る枢機卿すうききやう一同は、教皇の賢明な意図を容易に類推、神の栄光と尊いキリスト教の共通の繁榮のため、の遠征がいかなる目的によるものかよく呑み込めたので、喜び勇んで賛成した。

さてそれから一人の老獯ろうかいな教皇大使スンテイウスが、皇帝シユヴァーベンラントのフリードリヒフが当時宮廷を開いていたナポリに慌あわただしく下向。大使は旅行囊の中に二つの箱を携えていた。一つは説得の甘い蜂蜜で一杯、もう一つには火口と火打ち金と燧石ひうちいしが入っていて、これは聞き分けの無い息子が聖なる父にしかるべく服従しないようなら、破門という火を点火するため。遣外使節レガトは宮廷に到着すると、甘い方の箱を開き、服用し易い舐なめ菓製作に惜しげもなく使った。しかし皇帝フリードリヒは繊細な舌の持ち主だったから、甘味の中に隠されている苦い丸菓の味がすぐに厭いやになったし、そのせいで腸がよじれてひどく痛くなつた。それゆえ彼はこのまやかし菓子菓子を拒み、一向食べたがらなかつた。そこで遣外使節レガトはもう片方の箱を開け、幾つかの火花を飛び散らかしたが、この火花、皇帝の髭を焦がし、蕁麻いらぐまみたいに肌を焼いた。そこで皇帝は、「でんと居座つた」遣外使節レガトの臀しりより聖なる父の指の方がどうやら重そうだと、と思ひ知らされ、目的に注意を向け、東洋オリエントの不信者どもに対する主の御戦みいくさを遂行することをおとなしく承諾、聖地へ出征するよう諸侯に通牒つうたうを發した。諸侯は皇帝の命令を伯爵たちに伝達、伯爵たちはその封臣、騎士、貴族たちに指令。騎士たちは盾持ちや兵卒を武装させ、馬にまたがり、おのおのその軍旗の下に集合したものだ。

サン・バルテルミーの夜⑩に次いで、神の代理人「教皇」が眠れずに過こしたあの夜ほど多くの嘆きと苦悩を地上に齎もたらしたものは無い。ああ、騎士や兵卒たちが恋人を抱き締めて別れを告げた時、なんとまあ熱い涙が流れたことか。外地に赴く父たちの腰の中でドイツの勇ましい息子の丸丸一世代が死滅したのだ。灼熱アフリカの風⑪がシリアの沙漠に吹き荒ぶすぶ時、繁茂する草木の芽が枯れ凋しぼむように。何千もの幸せな夫婦の絆きずなが荒荒しく引き裂かれた。エルサレ



ム娘たちがバビロンの柳の木に「豎琴を」<sup>(たてこ)</sup>掛け、座って泣いた<sup>(な)</sup>ように、何万もの許嫁が悲しく十字架を掛けた。そして何十万もの魅惑的な乙女たちが許婚を待つ<sup>(いひなげ)</sup>て成長したが無駄だった。花咲きはしたが、もの寂しい修道院のため、薔薇の花園<sup>(ばら)</sup>でのよう。だって、摘む手とて無く、楽しめられずに萎<sup>(しお)</sup>れてしまったのだから。聖なる父の眠れぬ夜のために、いとしい背の君を傍らから連れ去られ、溜め息をつく妻たちの中には、テューリンゲン方伯夫人聖女エリーザベトもいたし、グライヒェン伯爵夫人オッテリーリアもいた。なるほどこちらの方には、聖女だ、との名声こそ立たた<sup>(た)</sup>なかつたが、容姿でも徳高い品行でも同時代の女性方のいずれにもやわか後れを取りはせぬ。

皇帝の忠義な封臣ルートヴィヒ方伯は、家臣たちが彼の許に集まり、その指揮下で陣営へ赴くよう、動員令を發布した。しかし大多数が、外国遠征をうまく免れようと何か口実を探した。足痛風に苦しんでいるの<sup>(そく)</sup>もあれば、結石で我慢できぬ、と言う者。落馬した、とか、武器庫が燃えてしまった、なんどとも。グライヒェン伯爵エルンストだけが、大胆不敵で独り身、かつ遠い土地で冒険をやつてのけようと志す少数の強壯な勇士とともに、乗馬兵・歩卒を武装させ、方伯の下知に従い、軍勢を集合地に率いて来た。伯爵は二年前から結婚して、この間に彼の愛らしい妻は二人の子どもを与えてくれた。若君と姫御前で、この子たちはいかにもあの

頑健な時代らしく医術の助けも借りず、さながら曙から露が生まれ出るように、安安と短時間で誕生。三番目の愛の担保「子ども」はまだ胎内にあり、これは教皇が夜眠らなかつたせい、この世にお目見えする際パパに抱っこしてもらえない羽目になった。エルンスト伯爵は男らしく気丈にふるまいはしたものの、自然がその権利を主張したので、別離に当って涙を流す妻の腕から無理に体を挽ぎ離したとき、愛の強い気持ちを感じることができなかった。彼は懊悩を口に出さずに彼女に背を向けようとしたが、奥方は急に子どもたちのちいちゃな寝台に向き直り、すやすや眠っている坊やをさっと抱き上げ、優しくママの胸に押し付けると、泣き濡れた眼差して父親に差し出した。伯はパパの別れの接吻を清浄潔白な頬つぺにした。奥方は同じことを姫君でもした。これはエルンストの心をぎゅっと掴んだので、唇はわななき始め、口ははつきりへの字に歪み、大声で啜り泣きながら子どもたちを、その下でとても柔らかな感じ易い心臓が鼓動している鋼鉄の胸甲に押し付け、接吻をしてちびちゃんたちの目んめを覚まし、いとしくて堪らぬ奥方とこの子たちを神とあらゆる聖人方の保護に委ねた。さてそれから彼が騎馬の手勢もろとも屹立するグライヒエンの城塞から曲がりくねった大手の道を下って行くのを、伯爵夫人は愁いに沈んで見送った。彼女が細い真紅の絹糸で赤十字を縫い取りした夫の軍旗が目路に靡いている限り。

ルートヴィヒ方伯は堂堂とした封臣が騎士と従士を率い、十字の軍旗を先頭に駆けつけたのを見て、並並ならず喜んだが、よくよく注視すると伯の滅入った様子に気づいたので腹を立てた。伯が遠征に気乗りがせず、厭厭参戦したのだ、と思ったからである。そこで額に皺を寄せ、鼻を不興気に鳴らした。エルンスト伯爵の方は微妙な情念学的視



線を目にして、主君は何がおもしろくないのかすぐに悟ったので、つかつかと歩み寄るなり、自分が憂鬱な訳をあからさまに打ち明けた。これには不興という酔に混ざった油の効果があり、方伯は誠実な親しみを籠めて封臣の手を握り、こう言った。「そなたの言われる通りなら、我ら兩人の悩みの理由は同じだのう。我が妻リースベト「エリーザベトの愛称」は別れの折おいおい泣いて余の胸を痛めた。したが、元気を出されい。我らが戦っている間、我らが妻たちは家で、我らが栄光と名誉とともに帰還するよう祈ってくれるだろう」。さよう、夫が出征する時、家を守る妻はその小部屋にひっそりと独り籠もり、断食と祈祷に専念、夫が無事に凱旋することを念じて絶えず誓願を立てるのが、当時の国の風儀だった。こうした古俗はもはや我が国のどこでも行われているというわけではない。最近ドイツの戦士たちが遠い西の土地に十字軍として出掛けた折、旅の空にある亭主連の留守中、家族の人数がたつぷり増えてしまつて、少なからずこういう現状の証になつていふようにね。

敬虔な方伯夫人は背の君との別離の苦しみを、運命をとにもする仲間であるグライヒェン伯爵夫人と全く同様、痛感していた。旦那様の方伯はいささか荒っぽい性分だったが、それでも彼女は至極伸睦まじく暮らしていた。それに彼を形成している捏ね土は敬虔な伴侶の聖性に徐徐に浸透されたので、幾人かの寛大な史家は聖方伯なんて添え名を付けたたりしたくらい。もつともこれは彼にあつては事実というより単なる敬称と考えたほうがよからう。今日のドイツでも「偉大なる」とか「いとも尊き」とか「老練極まりなき」とか「学識豊かなる」とかといった形容詞が得て上つ面だけの縁黄金鍍金というやつに過ぎないように。あらゆる状況から明らかなのだが、この高貴な夫妻は聖なる行為を実施するという点では必ずしも琴瑟相和していたわけではない。そうして生じた夫婦の確執に天界の諸力がしばしば介入して家庭平和を維持したのは、次のような例からもはつきりしている。敬虔な伯爵夫人は、美味しい物がいかにもたつぷり盛られた鉢を幾つも方伯の食卓から持ち出して、居城の周りにしょっちゅう屯している飢えた

物乞いたちに回してしまったり、宮廷の食事が終わるたびに、本来役得になるはずの残り物を手ずから貧民に頒かち与えたりして、宮廷の従僕たちや食いしん坊の小姓どもの大憤激を買っていた。大膳職ご一同は宮廷流儀——こいつのお蔭でささやかな儉約と多大な浪費がいつもとんとんにされてしまふのだが——に従い、まるで全テューリンゲン方伯領がああしたがつがつした客人連にそっくり喰らい尽くされるかのように、この件で時時強く苦情を言上。そこで無駄を省きたがる方伯はこうした施しが由由しい額に上ると考えたので、もともと奥方の信心深い道楽であるこのキリスト教的慈善を、大真面目に禁止したもの。ある日のこと彼女は、善行をしたい、という衝動と、それによつて妻としての従順さを破りたい、という誘惑に抗えなくなつた。食卓の後片付けをしている女たちに合図をして、手が付けられていない幾つかの鉢と幾塊かの小麦粉のパンを横流しさせると、これらを全部一つの小籠に集め、それを携えて岩壁に開いている小さい潜り戸を通つて、そつと城塞から抜け出した。

しかし手ぐすねひいていた連中はもうこのことを調べ出して方伯に密告したので、方伯は館のあらゆる出口をせつと見張らせた。奥方様が荷物を抱えて脇門からこつそり忍び出されました、とご注進があると、方伯は城の中庭をずつかずつかと横切り、外の空気を吸おうとでもいう様子で跳ね橋を渡つた。ああ、敬虔な方伯夫人は夫の黄金の拍車がりりんと鳴るのを耳にした。すぐさま恐れと驚きに襲われた彼女は、膝ががくがくして先へ進めなくなつてしまった。食料の入つた小籠はできるだけうまく前垂れの下に隠した。これは女性の魅惑と悪業を慎ましやかに被う物。しかしこうして確立されたこの不可侵の隠れ場所の特権は税関吏や徴税人にこそ効力があるが、夫に対しては金城鉄壁ではない。どうも訝しい、と思つた方伯は急いで歩み寄る。褐色の頬は怒りに紅潮、額に青い痲癢筋が立つた。「奥」と彼は短気な口調で言つた。「さようにしてわしに隠している籠の中に何を持つておる。わしの食卓の残り物ではあるまいな。それを浮浪人や物乞いどもといった役立たずの下人に食わせてやろうというのか。」「決してさようで

は。御前様ごぜん様と柔らかな方伯夫人は淑やかに、しかし胸が締め付けられるような思いで答えた。彼女は目下の窮境にあつては切羽詰せつぱつまつての嘘も、聖性を傷つけることなく、許して戴けよう、と考えたのである。「これは私がお城の内庭で摘みました薔薇の花に過ぎませぬ」。方伯が我らと同時代の人間だったら、奥方の誓言を信じて、それ以上あれこれ追求するのを止めたに違いない。しかし厳しい往時はそのように洗練されてはいなかった。「持っている物を見せなさい」と関白亭主はのたもつて、びくびくしている相手から乱暴に前垂れをひたつた。かやわい妻はこうした無法にただ後ずさりして身を守るしかなかった。「御前様、どうかお気をお鎮めあそばして」と言葉を返したものの、彼女は自分の宮廷の使用人たちの前で嘘を暴かれるのが恥ずかしくて堪らず、顔を染めた。——けれども、おお、なんたる奇跡、なんたる奇跡ぞ。罪コルプス・デ・クリスチ体20はこの上もなく美しい咲き誇る薔薇に変わっていた。丸パンゼンメルは白薔薇21に、直腸詰シュラッペルグリュスト腸詰22は真紅の薔薇に、卵菓子シユラッペルグリュストは黄色い薔薇になったのだ。聖なる夫人はこの不思議な変容を目の当たりにして驚喜し、我が目を信じてよいのかどうか分からなかった。なにしろ彼女自身だつて自分の守護聖人がこんなに慇懃いんけん鄭重にふるまってくれるとは信じられなかったのだからね。峻厳な夫を欺き、切羽詰まつた嘘の体面を保つということになった時、女性の肩を持つて奇跡を起こすなんて。

かかる明白な無実の証拠を示されて怒れる獅子は軟化し、今度は慌てふためいているおべっか使いの家来ども——方伯の意見によれば、温順な方伯夫人を故無くして中傷した——の方に恐ろしい目つきを向け、激しくののり、淑徳高い奥を余の許もとへ誹謗ひぼうしに参るような密告屋めがまた出たら、そやつを即刻城の地下牢に叩き込み、そこで悶え死またにさせてくれるわ、と厳かな誓いを立てた。それから薔薇を一本手に取ると、無辜むこの勝利をことほいでそれを帽子に挿した。もつとも、次の日彼が帽子の上に見たのが萎れた薔薇だつたか直腸詰腸詰だつたかについては、物語は言及していない。しかしながら、御前様が和解の接吻をしていなくなり、先ほどの驚愕から立ち直るやいなや、聖女エ



リーザベトは心安らかに自分の被庇護者たちである蹇者、瞽人、身に纏うものとして無い者、飢えに苦しむ人人が待ち設けられている村の共有牧草地指して山を下って行き、そこでいつもの施物を頒け与えた、と語られてはいる。この奇跡のまやかしがそこまで行けば再び消え失せる、とよく分かっていたし、実際そうなったのだから。つまり彼女が食料籠を開けると、中にあつたのは薔薇の花ではなく、宮廷の寄食者どもの口から掠め取つて来た滋味豊かな残り物だったのである。

さて、旦那様が聖地へ出征したため、その厳しい監視から解放され、こっそりとても公然とでも好きな遣り方で、好きな時に慈善事業ができる意のままの権力を手に入れた彼女であつたが、専制的な夫を貞節に真心籠めて愛していたので、彼と別れてこの上もなく悲嘆に昏れた。ああ、現世で再びお目に掛かれないのでは、と予感がしてならなかつた。では来世では楽しく暮らせるかという、これも全く不確か。彼岸では聖徒に列せられた女性には高い位が約束されるが、他の亡魂どもは彼女に較べれば下賤な死者に過ぎない。

方伯はこの下界でこそ高位にあるけれども、天国の前庭でも、聖女の玉座の絨毯に跪き、かつての伴侶の顔を上げて見る資格がある、と看做されるかどうか、こいつはどうも依然として疑問。エリーザベトがどんなに誓いを立てても、どんなに善行を積んでも、普通だつたら彼女の代願があらゆる聖者様方にどんなに効験があるうとも、背の君の寿命を僅か一指尺延ばせるほどの貸しが天国にあるわけではない。方伯はこの征旅の途次、人生の花の盛りには悪性の熱病に罹つてヒュドウルントウムで死去。サラセン人を鞍頭もろとも一刀両断唐竹割りにする、という





騎士の武功を立てぬうちに。死出の旅路に赴く折、いまはのきわに彼は、周囲に立ち並ぶ従者や封臣の中からエルンスト伯を臨終の枕辺に呼び寄せ、己が代理として麾下の十字軍士の一隊の統領に任命、更に、不信者どもに三度剣を閃かさぬうちは帰還しない、と誓言させた。そして従軍司祭から聖餐を受け、自分と家士全員が打ち揃って威風堂々天国のエルサレムに入城できるよう、たっぷり死者追悼ミサを挙げるよう指示してから身罷った。エルンスト伯爵は主君の蒼褪めた亡骸に防腐処置を施させ、銀の柩に収めると、寡婦となった方伯夫人の許に送った。夫人は背の君のためにさるローマの皇后のように喪に服した。つまり生涯喪服を脱ごうとしなかつたのである。

グライヒェン伯爵エルンストはできる限り巡礼行を急がせ、部下たちともども無事にプトレマイス近郊の陣営に到着した。ここで彼が見出したのはもちろん、本気の遠征ではなく大仰な戦争劇とでもいったようなもの。と申すのはかかる次第だったからで。当世ドイツの舞台では、陣営あるいは会戦の場というと、前景にはただ僅かの天幕が張られ、小人数の役者たちが小競り合いをやっている。遠景にはたくさんの天幕群や密集した軍勢が描かれ、想像を刺激

したり、目をごまかしたりする。全ては五官を人工的に錯覚させることを狙ったもの。こういう具合に十字軍も虚構と実際の混合だった。郷国から旅をして来た夥しい戦士の群のうち、征服しようと鹿島立ちした先方の国の境にまで到達したのはとにかくそのほんの一部。してまたサラセン人の剣の餌食になったのはごく少数だった。この不信の輩には強大な同盟者があって、彼らはこれらを敵勢に向かって国境の遙か先まで送り出し、同盟者はそうこうするうち勇猛果敢に掃討

作戦をやつてのけたのである。この功績に対し報酬も感謝も受け取りはしないのに。これすなわち飢え、窮乏、陸路と海路の危難。それから厭うべきやつらの中には、嚴寒、酷暑、黒死病、悪性の腫瘍なんてのもある。なんとも辛い郷愁が時折鋼鉄の胸甲の上に重い夢魔アルプフみたいのしかかり、それをべなべなの厚紙しよみたいに折り曲げるので、故郷を指して一目散とばかり馬に拍車を掛けることすら。こうしていたらくなのでエルンスト伯爵には、祖国へ引き上げてもよいかな、と思う前に、願ひ通り迅速に確約を果たし、騎士の大剣を三度サラセン人に閃かせる望みは薄かった。陣営の周囲三日路みっかぢというもの、アラビア人の射手一人見つからぬ。無気力なキリスト教徒軍は稜堡りやうほと砦のうしろに隠れ込み、遠方の敵を探そうとそこからあえて出陣することはなく、十字軍結成を企んだあの眠れなかつた夜以来うとうととまどろんで、妨げられた安息を楽しみ、聖戦の成功などろくに気に掛けていない教皇が約束した、のびのびになつてゐる救援軍をひたすら待ち望んでゐる始末。

昔むかしのその昔、英雄アキレウス(28)がさる遊女あそびめをめぐつて盟友とぎやあつく喧嘩したあそこ、血に飢えてはいたが勇猛なあのトロヤを攻囲したギリシアの軍勢もそうだったが、キリスト教徒の軍勢にとつて不面目なこの無為無策状態にあつて、陣営のキリスト教徒の騎士の面々は逸楽と気晴らしに耽り、暇を潰し、憂さを払つてゐた。南国のイタリア人が唄と弦楽に夢中になれば、身の軽いフランス人はこれに合せてびよんぴよこ踊る。謹嚴なイスパニア人は将棋チェス。英国人は鬪鶏。ドイツ人は飲むは喰はるはの宴会騒ぎ。こうした慰みごとはあまり好きではなかつたエルンスト伯爵は狩りに興じ、乾酒ひからびた曠野あれので狐どもを攻め立て、焼けつく山並みに狡賢い嚴羚羊いんわかしやを追つた。彼の配下の騎士たちは昼間の灼熱の太陽とこの異国の空の下のじめじめした夜気に辟易し、主君が馬に鞍置かせると、そつと逃げ出すのだった。そこで彼に随つき従つて狩獵に赴くのはいつも、手早のクルトと綽名あだなされた忠実な盾持ちとたつた一騎の乗馬兵だけ。ある時なんととしても羚羊を仕留めようと巖山を攀よじ登つていた彼は遠走とつぱしりし過ぎてしまい、帰ろうと思

い立つ前にもう地中海に日が沈んでいた。陣営に戻ろうと大いに急いだが、辿り着かぬうちに夜。人騙しの鬼火<sup>(20)</sup>が現れ、それを陣営の篝火<sup>かがりび</sup>と思い違いしたので、更に遠く逸<sup>そ</sup>れてしまった。迷った、と分かると、彼はとある野の樹の下で明け方まで憩うことに決めた。忠実な従士は疲れ果てた殿のために柔らかな苔で寢床をしつらえた。主人は、日中の暑さにぐったりしていたので、慣わし通り十字を切るため手を上げる暇<sup>いとま</sup>もなく、ぐっすりと寝入った。しかし手早のクルトの目には眠りは訪れなかった。彼は生まれつき夜鳥のように油断の無い性分だった。仮にこうした用心深い才能を授かっていたとしても、ご主人様大事と思っ心のお蔭で目ざとくなっていたことだろう。アジアの気象では普通のことだが、明るく晴れた夜で、星星が切り子磨きの金剛石<sup>ダイヤモンド</sup>のように清らかな輝きできらめき、死の谷のような厳かな静けさがこの人里離れた僻地を支配していた。そよとの風も無かったが、夜の冷気が植物や動物に命と活力を注いでいた。しかし暁の明星が夜明けを告げる第三夜警時<sup>(21)</sup>の頃、遠くの暗闇に険しい断崖を流れ落ちる轟轟と鳴る森の川のような物音が起こった。油断の無い従士は耳を敬<sup>そむ</sup>て、その鋭い目も夜の帳<sup>とま</sup>を見通すことができなかつたので、残りの感覚も全て情報収集に送り出した。彼はじつと聴き、また、獵犬のように臭いを嗅<sup>か</sup>いだ。というのも、芳香を放つ葉草や踏み躪<sup>じ</sup>られた草の茎のような香りが吹きつけられて来たからである。異様な物音はますますこちらへ近づくように思われた。クルトは地面に耳を押し付けた。すると馬の蹄のかっかっという響きが聞こえた。彼は魔王の軍勢<sup>(22)</sup>が通過しようとしているのではないかと推量したので、全身ぞつと戦慄し、ひどい恐怖に襲われた。そこで主人を揺さぶり起こすと、こちらは目覚めるなり、これは妖怪変化とは違うものを相手にしなければなるまいと気づく。乗馬兵が馬たちに馬勒<sup>ばく</sup>を付けている間に、エルンストは従士に手伝わせ、大急ぎで物の具を身に纏<sup>まと</sup>った。

周囲の黒い影はだんだんに消え失せ、近づく黎明<sup>れいめい</sup>が東の地平線の縁を真紅で染めた。その時伯爵は自分が予想したもの、つまりサラセン人の一隊が、いずれも充分に戦支度をし、キリスト教徒から何か獲物を手に入れようと、進軍



と、敵の騎馬隊の真つ只中に入り入れた。敵勢はこの奇襲がたった一人の騎士によるものとは思ひもかけなかった。不信者どもは風に舞う粗穀もみぢのように散り散りになった。しかし、相手方が武者むし三人以上ではない、と気づくと、勇気を盛り返したので、恐れを知らぬ大胆さも人数には屈する不釣合いな闘いが始まった。伯爵はそれでも勇ましく馬を駆り立てて戦場を駆せ巡りめぐ、槍の穂先を閃かせて敵勢に死と破滅を齎した。槍が相手突き留めると、抗いようのない勢いで鞍から放り出したもの。伯爵目掛けて激しく馬を寄せて来たサラセン人部隊の首領すら彼の雄雄しい腕は打ち倒し、虫のように砂の中を転げ回るのを、騎士聖ゲオルギウス31がおぞましい龍を退治したように、常勝のその槍で刺し貫いた。手早のクルトも負けず劣らずばしこく立ち働いた。なるほど彼は突撃には役立たずだったが、後ろ

してくるのを見た。彼らの手から逃れるのは不可能だった。一夜の宿りとなった樹は広広とした平野にあって人馬を隠す保護を与えてはくれなかった。不幸なことに凶体の大きな馬はヒツボグリフ32ではなく、ずっしり重たいフリースラント産33であって、その体格のため、主人を風の翼に乗せて運び去るとい願わしい能力は与えられていない。そこで雄雄しい戦士は靈魂を神と聖処女の庇護に委ね、騎士らしく死のう、と覚悟した。家来たちに、我に続け、できる限り高価に命を売りつけてやろうではないか、と命じ、フリースラント産の軍馬にしたたかに拍車を入れる

巻きとなる堂に入ったもので、抵抗できない者は皆殺しにした。これから文学界という馬上槍試合場(35)に自信たつぷり撃つて出ようとすする不具者や蹇者(あじなえ)といった無力な人士(じんし)を縊り殺してのける芸術評論家みたいな調子でね。時折弱弱しい怪我人が、憤慨した中傷屋追求者かなんぞのように激怒して、萎えた手から彼に石を投げつけることがあっても、とんと気に掛けなかった。自分の鉄の胃と胸甲は並みの投擲(とうてき)には充分耐えられると承知していたので。乗馬兵も身の回りのあらゆる障害を除こうと全力を尽くし、主人の背後の安全を確保した。しかし九つの馬車制動機(ブレーキ)がこの上なく強い挽馬(ばんば)に、四頭の牡のアフリカ水牛(36)がアフリカの獅子に、そして周知の伝説によれば、二十日鼠(マウス)の群が大司教に——ヒュブナーによればライン河の鼠の塔(モイゼツトゥルム)がこの物語の確かな証拠となつている——打ち勝ち、思いのままにすることができるので、騎士の闘いの習いで、グライヒェン伯爵は衆寡敵せず打ち負かされた。彼の腕は疲れ、槍は折れ、剣は鈍り、馬は敵の血の流れる合戦の場で脚を踏み滑らした。騎士の落馬で勝利はふい。何百もの手が、剣を奪おうと掴み掛かったが、こちらには抗う力のあらばこそ。騎士が倒れるのを目撃したとたん、手早のクルトは勇気を、同時に、今まであれほど上手にサラセン人の頭蓋を叩き潰していた戦鎚(せんづい)もどこかへ失くしてしまった。彼は無条件降伏をし、しきりに助命を嘆願。乗馬兵は茫然と立ちすくみ、なるようになれ、と諦め、戦棍(せんこん)の一撃を胃に喰らって大地にくずおれるのをなげやりな態度で待ち受けた。

しかしながら、敗者たちには思いも掛けないことだったが、サラセンは人道的な勝利者で、戦争捕虜を武装解除するだけで満足し、体には何の危害も加えなかった。こうした穏やかな手加減は別段博愛心の発露ではなくて、斥候兵の慈悲に過ぎなかったのだが。敵を殺してしまえば何一つ訊き出せないし、この巡察部隊の使命はもともとプロレマイスに布陣したキリスト教徒軍の状況について確実な情報を得ることだったのである。捕虜たちの訊問が終わると、アジアの戦の慣わしに従い、彼らは奴隷の鎖を掛けられた。折しもアレクサンドリア(4)行きの船が出帆準備を完了して

いたので、アシドドの領主は彼らをエジプトの王の許に送った。宮廷でキリスト教徒軍の状況をその供述により実証させるためである。この健気なフランク人「ヨロツパ人」の大胆不敵ぶりについての噂は彼の到着前に既に大いなるカイロの城門にまで広まっていた。そこで本来ならこれほど勇敢な戦争捕虜はこの敵国の首都で、四月十二日ガリア「ゴール＝フランス」の海の英雄（一）がロンドンで得たのと同様の素晴らしい歓迎を受けたことだろう。この日陽気な王都は、敗者にブリタニアの勝利の栄光を感じてもらおう、と競って努力した。しかしイスラム教徒の自負心が異国人の手柄を公平に扱うわけではない。エルンスト伯爵は徒刑囚の列に入れられ、重い鎖を負わされて、王の奴隸たちがいつも寝泊りする格子の嵌まった塔に幽閉された。ここで彼は長い苦しい夜毎、孤独な哀しい日日、今後の自分の人生の過酷な宿命をつらつら思いやる時間を与えられた。こうした物思いに屈服せぬようにするには、巡察するアラビア兵の全部隊を相手に戦場で立ち回りをすると全く同じ英気と果断を必要とした。しばしばかつての家庭の至福の団欒の光景が目の前に揺曳し、愛らしい奥方と貞潔な愛のいとけない芽生えたちを追憶するのだった。ああ、聖なる教会と東洋のゴグとマゴグとの不幸な確執をどんなに彼は呪ったことか。これこそ現世の生活の幸せな運勢を彼から奪い、解かれることのない奴隸の鎖に彼を縛りつけたもの。この頃彼は今にも絶望しそうになり、すんでのところ彼の敬虔さも「自殺の」誘惑という暗礁に乗り上げそうだった。

グライヒェン伯爵エルンストの在世中、逸話好きな連中の間に変わこりんなある物語が広まった。これはハインリヒ獅子公を巡るもので、本当にあったできごととしてドイツ全土で大いに信じられた。公爵は——とこの民間伝承は物語る——海を渡って聖地へ巡礼をした折、ひどい嵐に見舞われてとある人の住まぬアフリカの海岸に漂着した。ここで彼は災厄をともした者たちのうちただひとり難破から命助かり、あるもてなしの良い獅子の洞窟に宿と避難先を見出した。もつともこの洞窟の怖らしい住人の温良さは生来心にあったのではなく、その左後足のためだったので

ある。獅子はリビア砂漠で狩りをしていた時、棘を踏み抜いてしまい、おっそろしく痛いので身動きもできないでいた。そこで天然自然の食欲をすっかり忘れていたわけ。知り合いになり、お互いに信頼しあうようになる、公爵は百獣の王に対しアスケレピオスの代役を演じ、骨を折って足から棘を抜いてやった。獅子は元氣になり、客人に示された親切を忘れず、取って来た獲物で至れり尽くせりのもてなしをし、愛玩犬のように愛想よく人懐こくふるまった。

しかし公爵は四足の宿の亭主の冷たいお膳立てにすぐ、うんざりしてしまい、かつての自分の宮廷の厨房の大家ご馳走を憧れて止まなかった。なにしろ提供してもらった獵獸肉を、以前彼の大膳職が腕を振るったように美味しく調理することができなかつたもので。そこで公爵はひどい郷愁に襲われ、いつか世襲の領地に帰れるという見込みは無いから、心底暗然として、傷ついた牡の角鹿のように目に見えて窶れた。すると誘惑者が周知の、こうした荒地ではこやつに付き物の厚顔無恥な態度で、ハインリヒに近づいた。ちっぽけな黒い侏儒に化けたから、公爵は最初見た時、黒猩猩か何かだ、と思った。しかし我が主なる神の猿公であるサタンだったのであって、肉体を具え、にたにた笑い掛けて、こう言ったもの。「ハインリヒ公爵、何をくよくよしとる。おいらに任せてくれるなら、あんたの悩みに悉皆けりを付けて、奥方とこへ帰らせて進ぜよう。そうすりゃあんた今晚のうちにブラウンシュヴァイクのお城で奥方の隣に座って飯が食えるがな。だつてあすこにやすんばらしい晩餐が支度されてるだでよ。奥方は、あんたが死んじまった、と諦めたんで、他の男と婚礼するもんだからなあ」。

この報らせは公爵の耳に雷鳴のように轟き、両刃の剣のように心臓に突き刺さった。怒りに目は爛爛と燃え、胸には絶望が荒れ狂った。天に助ける気が無いなら、地獄に助けてもらおう、と進退ここに窮まった彼は考えた。これこそかの老練の哲学者の手品師「悪魔」が、欲しくて堪らない魂をまんまと調達しようとする時、まこと名人芸で利用する危機的狀況の一つ。公爵はぐずぐず思案せず、黄金の拍車を付け、剣を腰に帯び、出発準備を調えた。「おい、は



しっこいの」と彼は言った。「余とこの忠義な獅子をブラウンシュヴァイクへ連れて行けい。そのあつかましい色男が余の寝台に上がらんうちにな」。「ようがす」と黒髯の返辞。「だけんど、この運搬をやってやる代わり、おいらがどんな報酬をもらうことになってるか、先刻ご承知だよな」。「何でも欲しいものを要求せい」とハインリヒ公。「誓って貴様にくれてやるわ」。「一覽払いであの世までのあなたの魂をな」と悪魔。「いいとも、手打ちだ」荒れ狂う嫉妬に突き動かされてハインリヒはど

なった。

かくして二人の「靈魂の」協同所有者間の契約は法にきちんと則つて締結された。地獄の沢鷺はすぐさま怪鳥グ  
リフィン(55)に変身、一方の鉤爪かぎめで公爵を、もう一方の鉤爪で忠義な獅子を掴むと、一夜にして両者をリビア砂漠からハ  
ルツの堅固な山塊——ツエラーフェルトの見霊者の嘘八百の予言(56)ですら震駭させることができなかつた——の上に屹  
立する町ブラウンシュヴァイクへと連れて行き、重荷をつつがなく市の立つ広場に降ろすなり消え失せた。丁度その  
時夜警が真夜中の刻限を知らせるため角笛を吹き鳴らし、囁れた麦酒焼けの咽喉のどから昔ながらの祝婚歌を朗唱し終  
わつたところ。公爵の御殿と全市はまだ星空さながら華燭の典の灯火できらめいており、街路はどこもかしこも、装  
いを凝らした花嫁御寮と婚禮の締め括りとなる華やかな炬火たいまつ舞踏を眺めようとどどと繰り出した、歓呼する民衆が押  
し合いへしあい大騒ぎ。遙かな空の旅路にも一向疲れを感じなかつた飛行家は、拍車をりんりんと響かせ、忠義な獅  
子にお供され、雑踏の真つ只中を押し通つて宮殿の入り口を抜け、宴席に入ると、剣をすらりと引き抜き、こう言つ



た。「ハインリヒ公爵に忠義な者はこれへ参れ、して、裏切り者どもには呪いと匕首を」。同時に獅子が、七つの雷鳴の響きのような声で吠え、恐ろしい鬣を振り、怒りに燃えて攻撃の徴に尻尾をもたげた。円錐管楽器と喇叭は静まりかえり、ごったがえす婚礼の広間からゴシツク様式の穹窿まで慄然たる闘いの騒音が響き渡り、ために四壁は鳴りどよもし、敷居もびりびり震撼した。

黄金の巻き毛の新郎とその廷臣たちである彩り華やかな蝶の群は公爵の剣の下に斃れた。そのさまはさながらマアの子の逞しい手に握られた驢馬の頸骨で千ものペリシテ人が撃ち伏せられたよう。そして剣を免れた者は獅子の口に走り込む羽目となり、無力な仔羊のように圧殺された。あつかましい求婚者が家臣の貴族・従者を道連れにして根絶され、ハインリヒ公爵がその家法を、昔むかし賢いオデュッセウス(2)が貞潔なベネロペイアの求婚者の一団に施したのと全く同様峻厳に行使し終わると、彼は奥方と並んで朗らかに食膳に向かった。奥方は夫に与えられた死の恐怖から丁度気を取り直し始めたところ。公爵は、自分のために作られたわけではなかったが、己が大膽職でも調製のご馳走を美味しく味わいながら、新たに征服した獲物「奥方」に勝ち誇った目を向けると、公妃が面妖なことによよと泣き崩れているのを見た。これすなわち、勝ったというより負けたんだ、と解釈され得る。しかしながら公爵は奥方に、生き方を心得ている男として、ただただ自分に有利になるよう説明、愛情の籠もった言葉で奥方に、そなたはちと気が急ぎ過ぎたのだよ、と諭した。そしてこの時以降元元通りなべての権利を取り戻した次第。

エルンスト伯爵はこの妙ちきりんな物語を乳母の膝の上で何度と無く聞かされた。あとで大きくなってからは賢い人間としてその真実性を疑わしく思ったもの。しかし格子の塔の悲しい幽閉生活にあつては、こうしたこともありうるのでは、と思われてならず、頼りない荒唐無稽な考えがほとんど確信にまで成長。もしかの悪霊がおぞましい真夜中にその蝙蝠の翼を提供してくれるなら、大気を飛び抜けるなんてことは世の中で一番簡単なような気がした。彼は

自らの教義に従い、毎夜胸の前で大きく十字を切ることをゆるがせにできなかったけれども、それでも同じ冒険をやってみたいというひそやかな衝動が心に蠢く<sup>うごめ</sup>のだった。この願望を是認<sup>うごめ</sup>こそしなかったが。しかしながら夜うろつき回る鼠が壁の鏡板の間でかさこそ音を立てるたびに、地獄のプロテウス<sup>(1)</sup>「何にでも化ける悪魔」が、お役に立とうと参上つかまつた、と合図しているのではないかと、とすぐに妄想、しばしば頭の中でまずさしあたってそやつと運搬契約を締結することを逸早く思い巡らす始末。しかし祖国ドイツへの目眩<sup>くらめ</sup>く空中旅行を演出してくれる夢を除くと、この荒唐無稽な考えがエルンスト伯爵にありがたく思えるのは、そうした物思いに耽<sup>ひた</sup>つていけば、登場する主人公に成り代わってしまう小説の読者みたいに、なすことの無い数時間がすぐに経つことくらい。靈魂略取が肝心の問題で、諸般の状況から推<sup>お</sup>してこの取り引きがうまく行くこと間違い無しだったのに、アバドン先生<sup>(2)</sup>が何だつて手出しをせずじまいだったのかについてはれつきとした理由が一つならず挙げられよう。ハインリヒ公爵がかねてその魂の世話をお願いしていた守護聖人より、伯爵の守護聖人の方がおさおさ油断<sup>おぼた</sup>怠りなく、強力に防御を固めたので、  
 邪<sup>よこしま</sup>な敵はその身にちよつかいを出せなかったからか、契約貨物の件でかの大気を支配する霊は結局のところハインリヒ公爵に騙<sup>だま</sup>されたので、この元素を通過する輸送稼業に嫌気が差したのか。と言うのも、いざ借金取り立てとなった時、公爵の靈魂はそれまでに多大な善行を積んでおり、地獄の帳簿に記入されていた売り掛け代金は、お蔭でそっくり帳消しになつちまつたのである。

エルンスト伯爵が幻想的な物思いに耽<sup>ひた</sup>りながら、この格子の嵌まつた陰鬱な塔から解放されまいかと、微かな望みを夢見、ほんの片時ながら苦悩と憤懣<sup>かんまゑ</sup>を忘れていたりしている間、帰国した従者たちは待ち焦がれている伯爵夫人に、どんな椿事<sup>ちんじ</sup>に遭遇なさつたものやら、てまえどもに何一つ仰せられぬまま、ご主君が陣営からお姿を消されてござ、と復命した。伯爵は有翼龍<sup>ドラッグヘ(3)</sup>か、無翼龍<sup>リントウラム(4)</sup>の餌食になつたのでは、と憶測する連中もいれば、シリアの曠野<sup>しょうぎ</sup>で瘴気

に侵されて亡くなったのだ、とする者も。また、アラビア人の追剥ぎの一味徒党に襲われて殺されたか、捕虜として連れ去られたのだろう、と言う輩もあった。だれでも一致したのは、伯爵は死去プロ・モルトツォで看做セシモノされ得るのであって、伯爵夫人は結婚の誓いから自由になった、ということ。奥方の方も背の君が本当に死んだと思つて悼いたみ嘆なげいたのだつた。孤児になったちびちゃんたちがママが拵こしらへてくれた黒い小さな頭巾を被かぶつて、もう帰つて来ないとは実感しないまま、優しいパパの喪に服すのを無邪気に嬉しがる、オッティーリアは切なくて堪たげなくなり、その双眸からは憂いに満ちた悲嘆のあまりどつと涙が流れた。しかし、それにも関わらず、何かの虫の知らせが彼女に、伯爵はまだ存命だ、と告げるのだつた。こうしたありがたい考えを彼女は決して胸から消し去ろうとはしなかつた。なにせ希望こそ悩める者の最も強い支えであり、人生の最も甘美な夢なのだから。この望みを持ち続けるために夫人は一人の忠実な家来の支度をこつそり調べ、情報を集めるために海を渡つて聖地に遣わした。この男は方舟はこぶねから飛び出した鴉カラスのように水の上をあちこち彷徨さまよい、新事実は何も報告できなかつた。次いで彼女が派遣した別の使者は、海陸を遍歴して七年後戻つたが、嬉しい見込みという橄欖オリシブの葉はつばを嘴くちばしにくわえてはいなかつた。だが毅然とした奥方は、夫にまだ生者の国で会える、ということつゆを露つゆ疑うわなかつた。あれほど優しく誠実な背の君が、こうした破局に際して故郷の妻と幼な子たちを思い起こし、この世との告別の徴を送ること無しに身罷るなんてあり得ない、と堅く信じていたからである。それなのに、伯爵が出征してこのかた、城中ではこれに符節を合わせるようなことは何も起こつてい  
なかつた。武器庫で物の具の響なきがした、とか、物見台の張り出して梁はりがぎしぎし軋きんだ、とか、臥所ふしどで低いあしおと登音あしおとが長靴ながぐつでずしりずしりと歩く音がした、とかね。宮殿の高い鋸型屋根から夜の泣き叫なげびが挽歌ばんかを歌い上げることもせず、悪名高いまっしろ白鳥しろとりが戦慄せんりつすべき死の叫なげびを聞かせることも無し。悪い前兆が一切示されなかつたため、伯爵夫人は女性論理学(3)の諸原則に従い、いとしい旦那様はまだ生きておいでだ、と結論した次第。この女性論理学とい

うやつはご婦人方の間では当世でもまだまだ廢れちゃいませぬ。アリストテレス爺さんの『オルガノン』<sup>(70)</sup>が男どもに用いられているように。で、この断定が正しかったことを我我は知ってるわけです。さて彼女は最初の二回の捜索旅行——これは彼女にとって南極大陸発見より大事だった——が不首尾に終わったのに些かも怯まず、三人目の使徒を広い世の中に送り出した。この男、不精な性分で、待てば海路の日和かな、という金言をよおく心得ていた。そこで旅籠屋があれば必ず泊まって骨休めをしたもの。それから伯爵のことであれこれ問ひ質さなければならぬ人たを広い世間へ追って行って、探し当てるより、自分のところへ来るのを待つ方が遙かに快適だ、と確信していたので、東洋からの旅人を全て、都市の門の遮断棒に控えた税関吏のようにづけずけと詮索して、訊問できる持ち場に陣取った。これすなわち水の都ヴェネツィアの港である。ここは当時聖地を後にした巡礼や十字軍士が故郷に帰る時必ず通る共通の門みたいなものだった。この狡猾い男が課された任務を果たすのに選んだ手段が最上のものだったか、最悪のものだったか、いずれお分かりになるう。

## 二

大いなるカイロの格子が嵌まった塔という狭苦しい牢の中で七年もの間禁錮——これは伯爵にとってローマの地下墓地<sup>(71)</sup>での七年間が七人の眠れる聖者<sup>(72)</sup>にとってそうだったより遙かに長く思われたが——された伯爵は、天国からも地獄からもすっかり見捨てられた、と考へ、お天道様を拜むことなんてことはついぞ無く、衰えた日差しだつて狭い、鉄棒で守られた窓から辛うじて差し込むだけのこの陰鬱な鳥籠からの解放を諦め切った。悪魔<sup>(73)</sup>はとうの昔におしまいになっていて、守護聖人が奇跡的に助け出してくださるだろう、という期待は今や芥子種一粒の重さしか。彼はもはや生きていけるといふより植物のよう。この境遇でもまだ生み出せる希望は、死にたいなあ、くらいなもの。



nach einer siebenjährigen Kustodie, in dem engen Gewahrsam des verwitterten Turms zu Großkairo, die dem Grafen ungleich länger dächte, als den heiligen Siebenschläfern ihr siebenzigjähriger Schlaf in den römischen Katakomben, vermeinte er von Himmel und Hölle verlassen zu sein, und verzich sich gänzlich

そうした無気力な昏迷状態から突然彼を呼び起こしたのは、独房の扉の前でがちゃがちゃ鳴った鍵束の響き。ここへ入れられてからというもの、牢番は二度と鍵を使わずじまい。というのも囚人の用足しは全て獄房の跳ね上げ戸を通して行われたので。だから錆びついた鍵は、橄欖油という餌をもらうまで長いこと抵抗してなかなか言うことを聞かなかつた。しかし開き出した扉の、軸の周りをのろのろと動く鉄の蝶番のぎいぎい軋む音は、伯爵にとって丁度フランクリンの口風琴（ハーモニカ）の発明者のそれみたい、とろけるような和声（ハーモニ）のなんと甘美な音楽だつた。これから何が

起こるか胸がどきどき。凝固していた血液が循環し始め、彼は運命がどう変わるのかの知らせを今や遅しと待ち受けた。ちなみに生死いずれを告げられようと、それはどうでもよかつたのである。二人の黒人奴隷が牢番とともに入つて来、牢番の合図で囚人の鎖を外した。もつたいぶつた白髯はまた黙つて身振りをし、鎖を外された男に随いて来るよう命じた。こちらはがくがくした足取りで従つた。足が言うことを聞かなかつたので、彼は二人の奴隷に支えられて、石の廻り階段をよろめき降りた。囚獄の長（おき）の前に連れて来られると、相手は厳しい顔を向けてこう語り掛けた。「強情なフランク人（フ）、きさま、どんな技を心得ているのか、格子の塔に押し込められる時、なぜ隠しておつた。きさまと一緒に捉（つか）まつた者どもの中の一人が、きさまが園芸に巧みだ、と洩らしおつたわ。王様（スルタン）の御旨を恐れ畏（かしこ）み、フランク人の流儀で庭を作れ。そして、そこで世界の花の君が東洋の飾りとして晴れやかに咲き匂われるよう、きさまの目の玉そのけにお世話申し上げるのだ」。

仮に伯爵がバリのソルボンヌ大学の総長に選ばれたとしたって、その職はエジプト

の王スウェーデンの林苑を宰領するというこの任命ほど彼をびつくりさせはしなかつたろう。園芸については俗人が教会の秘密について心得ているほどにしか知らなかつたので。なるほど南国イタリアとニルンベルク(77)でたくさんの庭園を見した。ニルンベルク人の庭道楽は当時、九柱きゅうちゆうぎ劇場やローマ高苜栽培(78)より遙かに盛んと言うほどでは無かつたけれども、ドイツで真つ先に造園術が曙あけぼの初めたのはこの都市だから。しかし伯爵は、庭園の設計、植物学、育樹について、身分柄関心を持ったことは皆無だつたし、世界の花なるものに気を留めるほど植物学的造詣を深めたこともありはせぬ。また、それがどういふ遣り方で取り扱われたがるものやら知らなかつた。蘆薈アロエのよう(80)に栽培技術が要るのか、金盞花きんせんかのよう(81)に活発な自然に任せて置けばすくすく伸びるのかも。さりながら彼はあえて自分の無知を白状したり、任命する、と言われた顕職を謝絶したりはしなかつた。足の裏に棒打ちの刑を喰らつて職務に熟達していることを無理やり得心させられるのではないか、ともつともながら懸念けんねんしたからである。

彼がヨーロッパ風の林苑に造り変えるよう指定されたのはとある快適な庭園だつた。この場所は気前の良い母なる自然によつてか、過去の文化の手によつてか、きわめて適切に設計・裝飾されていたので、二代目アドロニユムス(83)が鶉たかの目鷹たかの目で調べても、改良が必要な短所・欠陥を発見することはできなかつた。その上、この七年間というものの陰鬱な独房の中で無しで済まざるを得なかつた生き生きと活発な自然を見た彼は、鈍麻どんましていた感性を突然強く覚醒されたものだから、どんな野草の花にもうっとりとし、身の周りのものを天にも昇る心地で眺めた。神のお庭のことで何か咎め立てしようとの批判がましい考えなんて念頭に浮かんだこともない楽園パラダイスの人間(84)の始祖「アダム」のように。それゆえ伯爵は、命じられた仕事をどうかして無事に果たしたい、と思いつつ、少なからず当惑した。どう変更を加えてもこの庭園の麗しさを奪うことになる、そして、自分が能無しであることがばれたら、多分また格子の塔へ逆戻りしなければならぬだろう、と心配で堪らない。

さて、もろもろの庭園の総目付にして王スルタンの寵臣たる長老キアメルが、作業に取り掛かるようせわしなく急ぎ立てたので、計画を実現するにはこれだけ要り用、と五十人の奴隷を請求。次の日の早朝彼らは提供され、一人一人をどう働かせたらよいやらまだ見当も付かないでいる新しいお頭かしらの査閲を受けた。が、このお頭、奴隷の群の中に災厄に遭った時の二人の仲間、手早のクルトと鈍重な乗馬兵の顔を目に留めた時、なんとまあ嬉しかったことだろう。お蔭で百貫目の重石おもしが胸から転がり落ち、憂鬱の小皺が額から消え去り、棒を生の蜂蜜きに浸してそれを味わったみたい、目つきは浮き浮きと晴れやかになった。忠実な従士を傍へ呼び寄せると、泳ぎも浸つかりもできない異質な元素の中へむら気な運命によつて投げ込まれてしまった、と隠し立てせず打ち明けた。それから、謎めいた誤解のために生得しやうていの持ち物である騎士の大剣を鋤すきと取り替えさせられたが、これがまたなんとも訳が分からぬ、とも。そう語り終えた彼の足元に手早のクルトが涙を流しながら跪き、声を張り上げてこう言った。「殿、なにとぞお許しを。殿のご心配、それから殿が長いこと囚とらわれの身でいらした汚らわしい格子の塔からのご出獄、いずれもてまえが原因でござりまする。この下僕の罪の無い嘘のせいでそこから自由になられたことをお怒りにならず、お天道様をまたお頭つむじりの上にご覧になれるのをお喜びになつて下さいまし。王スルタンがフランク人流の庭が欲しくなりまして、公設市場パザールにおりますキリスト教徒の捕虜全員に触れを出したのです。かような庭を造れる者は名乗り出よ、この企てがうまく行けば、莫大な恩賞を取らず、となあ。だれも引き受けようとはいたしませんだが、てまえは殿が重禁錮のお身の上なのを考えました。天使がてまえに、あなた様が造園の名人だ、と偽りを吹聴ふいちょうすることを思いつかせてくれたのでございます。これはまことにもつてうまく運びました。さてこれからです、どうすれば無事にやつてのけられるか、などのご心労なさいませぬよう。王スルタンは、世のお偉方の例に洩れず、今あるのより優れたものが欲しいのではなく、新奇で違ったものが欲しいのです。ですから、お好きなようにこの素晴らしい園を荒らし、ほじくり返すとよろしゅうご

ざいます。殿がなさることは何でも王の目には、けつこう、もつとも、と映る、と思われます」。

この話は、疲労困憊した砂漠の旅人の耳に聞こえた滾滾と湧く泉のせせらぎだった。伯爵はお蔭で心爽やかとなり、この難しい仕事を敢然と始める勇気を得た。彼は運を天にまかせて、何の計画も立てずに労働者たちを仕事に掛からせ、心地よくしつらえられた、木陰の豊かな園を改造し始めた。さながら、大天才が己が創造の鉤爪に捉えた昔の作家の著述にやらかすように。こちらはありがたくもないし、その気もないのに

当世風に、つまり、また読めるよう、おもしろがられるようにされちまうのである。あるいは、古い学校教授法と新進の教育学者、という比喻でもいいかな。目に触れるものはことごとくごったまぜにし、全ては改変したけれど、改善は皆無。有用な果樹は根こそぎ引っこ抜き、その代わりに迷迭香と繻草、それからさまざまの外国種の樹樹、あるいはまた、香りの無い葉鶏頭や千手菊を植えた。肥えた土壌は掘り取らせ、剥き出しになった地面には色とりどりの砂利を敷き詰め、入念に踏み固めて、脱穀場のように平坦にさせたので、草一本生えなくなつた。敷地全体をたくさん階段状に分割、それを芝生の縁取りで囲つた。真ん中には変てこりに曲がりくねつた花壇が蛇のようにうねくねと横たわつて、色色奇怪な形を作り、果ては臭い黄楊の樹の渦巻き模様で終わつていた。また伯爵は植物学にはとんと無知で、いつ種を播くとか植樹するとかなんぞには気にも留めなかつたから、庭園は長いこと生死の間を彷徨い、朽ち葉風襟飾りといつたていたらくだった。

長老キアメルは、そして王その人すら西洋の造園家のなすがままに任せ切りで、口出しや頭ごなしの鑑定で構想





を妨害したり、早まった批評を下して天才庭師の仕事の進行を中断したりしなかった。この点二人は当今ドイツの差し出がましい世間様より賢明にふるまったのである。なにせ後者と来たら、あの有名な博愛主義的教育を受けた樅の実が二、三年も経つたらすぐに高い樅の樹に成長、それから帆柱が切り出せる、と期待する始末だもの。植樹された若木はとても繊細でかよわいので、たった一晚寒い夜に見舞われただけで参ってしまうこともあるんだけどね。それなのに植えてやつとこ十五年目くらいで、初生りの果実はもう熟し過ぎなんじゃないか、とばかり、だれかドイツのキアメルといった御仁がしゃしゃり出て、こう詮索する潮時とあいなるだろう。「おい、庭師、何しとる。深溝を掘つたり、土砂運び車やら二輪箱車でやかましい騒音を立てとつたが、どんな果物ができたんじや」。それで植栽が大いなるカイロのこの同類の庭園にあるのみに葉っぱをぐんにやり萎らせていると、事態を妥当に評価して、かの長老のように黙りこくって頭を振り、齒の間から髯に唾を吐き、これなら元のままの方が良かったわい、と心中ひそかに考えるのも無理からぬこと。すなわち、ある日のこと、我が造園家が彼の新しい創作をご満悦で眺め、自身自身に芸術批評を下し——名人は仕事で分かる「諺」——大体のところ最初考えたよりなにもかもうまく行つた、と判断、自分の理想像を目の当たりにして、そこにあるものだけでなく、将来そうなるはずの景色も見ていると、総目付けにして 王の寵臣なるお方が庭園にやつて来て「フランク人、何しとる。おまえの仕事はどれほど捗つた」と言つたのである。伯爵は自分の芸術作品がこれから厳しい検閲を受けねばならないことを知つたが、しかしながらとつくにこうした場合に備え、手を打って置いたのだった。彼は冷静沈着さを総動員、自作を信頼してこう応えた。「さあ、ご主人様、ご覧下さい。以前の荒唐は技芸に身を屈し、楽園を模範といたしまして愉悅の地に造り変えられました。天女たち(4)もここに降臨することを否みはいたしませんすまい」。自称芸術家がこのように熱情と節度を面に表して、才能を發揮したことを語るのを聞き、この大家がその縄張りではなんとと言っても自分より高い見識を持ってい

る、と看做さざるを得なかつた長老は、無知を見抜かれぬよう、造物物全体に感じた不快な気持ちを吐露するのを差し控えた。彼は謙虚な人間だったので、不満を覚えたのは自分が異国の好みに不案内なせいだと考え、価値があるうとあるまいと問題自体にはそつと触れないでおこうとした。しかしながら参考のためこの庭園の親玉に幾つか質問の矢を放たぬわけにはいかない。相手はこれを受けてちゃんと返答。

「あの素晴らしい果樹をどこへやってしまったのじゃ。あれはこの砂地に生えておつて、紅い桃の実や甘い檸檬をたわわに付け、目の悦びとなり、召し上がつてお元氣におなりあそばせ、と逍遥する人を誘うてくれたのに」。

「あれらはことごとく根元から伐つて捨てましたので、その場所は見当たりませぬ」。

「して何ゆえにな」。

「あのように賤しい樹樹は王様の林苑には相応しくないからでございます。かような樹木はカイロのごくありきりの町人たちが庭で育て、その実は驢馬に満載されて売りに出されるではありませぬか」。

「どうしてまあ、あの心地よい棗椰子やタマリンドの林を荒廢させてしまう氣になつたのじゃ。あれは蒸し暑い日中の炎熱から旅人を庇つてくれ、葉の生い茂つた枝の天蓋の下で陰を与え、氣分を爽やかにしてくれたのに」。

「太陽が燃えるような日差しを浴びせている間は荒涼として物寂しく、漸く涼しい夕べの風が冷氣を送り、香膏の芳香が漂う、そうしたお庭に何をもって木陰など」。

「したがこの林は見通しの利かぬ面紗で愛の秘密を覆うていたではないか。王様がシルカシアの奴隷女の魅力に陶然となられ、女の朋輩たちの嫉妬の目からご寵愛ぶりをお隠しになりたかつた時になあ」。

「愛の秘密を覆う見通しの利かない面紗の役は、忍冬と木葛の蔓に絡まれたかしの園亭が果たします。あるいはこの涼しい人工の洞窟が。この中では水晶のような泉が巧みを凝らした岩から大理石の水盤へとさらさらと流れ込ん

でおります。あるいは葡萄の格子棚に沿った葡萄の樹の拱廊アーケードが。あるいはまた、柔らかい苔を詰め物にした安楽椅子でございましょうか。これは養魚池の畔ほとりの田舎風の葦の小屋にあります。この内密のご寵愛の神殿は、あのおとしいタマリンドの林のように、そよそよと吹く風を遮ったり、開けた眺望を娛しむこともできぬおぞましい地虫どもやぶんぶんいう羽虫どもの棲家ではございませぬ」。

「そちは何ゆえ扉に生えるような緋衣草サルヴィアや柳薄荷ヒソップを、前にはメツカ産メの貴重な愛らしい香膏バルサムの樹樹が開いていた場所へ植えおったのじゃ」。

「王様スルタンがご所望あそばされたのはアラビアの庭園ではなくヨーロッパ風のものだったからでございませぬ。さりながら、イタリアの地やドイツなるニュルンベルクの庭園では棗椰子も熟しませぬし、メツカ産バルサムの香膏バルサムの小さな樹もかここでは生育いたしませぬ」。

こういう論拠に対してこれ以上異議を唱えるわけには行かなかつた。長老シェイクにしてもその他だれかカイロ生まれの異端の輩ともがら（5）にしてもニュルンベルクに行ったことは無かつたので、庭園なるもののアラビア語からドイツ語への翻訳を、相手を信用して受け入れざるを得なかつた次第。ただし彼とてこの庭園改革は預言者「ムハンマド」が敬虔なイスラム教徒スの男性ムに約束した楽園を模範として遂行された、などという言い種ぐさには承服できず、この申し立てに關しては自分の方が正しい、と考へ、来世の歓びとしてかような妙ちきりんな慰藉いしやを必ずしも期待しなかつた。そういうわけで、長老シェイクキアメルは上述のごとく頭を振り、瞑想的に齒の間から髯に唾を吐き、元来たところへ戻つたのである。



Der Soldan, welcher damals über Ägypten herrschte, war der wackere Malek al Aziz Othmann, ein Sohn des berühmten Saladins. Den Beinamen des Wakkern hatte er mehr den Talenten für seinen Harem, als den Eigenschaften des Gemüts zu verdanken: er hatte sich in der Propagation seines Geschlechtes so tätig und wacker bewiesen, daß, wenn jeder seiner Prinzen eine Krone hätte tragen sollen, die Königreiche aller

三

その頃エジプトを支配していた王スルタンはかの有名なサラディン(16)の息子、勇者アル・アージズ・オトマンマリク王(17)だった。勇者なる添え名は、その性格の特性に負うより、閨房ハレム(18)での能力によるもの。すなわち彼は己おのが血統の増殖に勤勉かつ勇敢に尽瘁じんすいしたので、王子の一人一人にどこぞの王冠をあてがわねばならないとしたら、当時知られていた三つの大陸「アジア・アフリカ・ヨーロッパ」全ての王国を合わせても供給は充分では無かったであろう。しかし十七年前のある暑い夏にこの肥沃な源泉は干上がった。王スルタンの後裔こうえいの長い系列の締め括りはメレクザーラ姫で、姫こそこの夥しい花綵はなづな(19)の要となる宝玉であることは、宮廷中が一致して証言するところ。そして一番末に生まれた子どもの特権をたっぷり享受

すなわち、上の子たちいずれにも増して鍾愛スルタンされていた。その上王スルタンの全ての息女のうち生き残ったのは彼女だけだったし、自然は父親の目さえうっとりさせるほどたくさんスルタンの魅力を嫁入り支度として授けてくれた。そもそも東洋の王侯が女性美学において我が西洋の王侯より遙かに進歩していることは認めなければならない。後者はこの点に関してはその審美眼が信頼できないことをしばしば暴露する(6)。姫君は王スルタンの一族の誉れであり、彼女の兄たちすら魅惑的な妹に対する心遣いづかやら、敬意と愛情を示す努力やらで他を凌スルタンごうと競い合った。真面目な枢密院ディワーン(20)も政策討議

の場でしばしば、愛の絆きずなの力を借り、彼女を使つてどの王子をエジプト国の利害と結び付けようか、考慮するのだ。さりながら父君である王スルタンはさようなことはろくすつぽ気に掛けず、しょっちゅう頭にあるのはただもう掌中の珠たる最愛の息女の望みを叶え、その心を晴れやかにし続けることだけ。姫の清らかな額の地平線にちっぽけな愁いの雲も掛からぬように、と。

子ども時代の最初の何年かを姫君はある乳母に世話されて過ごした。彼女はキリスト教徒でイタリア生まれだった。この女奴隷はバルバリア海岸(10)からやつて来た海賊のため若い頃生まれ故郷の町の海岸から攫さらわれ、アレクサンドリアで売り飛ばされ、そこで人手から人手へと売り買いされてとうとうエジプトの王スルタンの宮殿に行き着いたのだが、豊満な体つきのお蔭で乳母という職を与えられ、これを立派に果たしたのである。綺麗な声で「マルブルーマルブルー・サン・ヴァタン・ゲール<sup>(11)</sup>」の歌い出しを口ずさんで、ヴェルサイユ宮殿全体が合唱するきっかけを作るほどのガリア「ゴール＝フランス」の王位継承者の乳人めのと殿(12)みために歌謡の才に長たけていたわけではないが、彼女はそれだけ一層話上手な舌を振るって十二分にその天分の埋め合わせをした。このご婦人、『千一夜物語』の美女シェヘラザード(13)のようにとてもたくさんの物語やお伽噺とぎばなしを知つていて、王スルタンの一族は嚴重な後宮暮セライル<sup>(14)</sup>らしにあつて好んでそれを聞き、なにがしかの娯しみとした。少なくとも姫君は千一夜ではなく千週間もそれをおもしろがった。さて乙女というのは、千週間の歳に達するともう他人の物語では満足せず、今度は自分が主題のお話を作る素材を自分自身の中に見つけるもの。そこで利口な乳母はこれまで聞かせて来た子どもたちのためのお伽噺をヨーロッパの風俗習慣談義に換えた。そして彼女自身まだまだ豊かに祖国愛を持っていたし、故郷を追憶すると心楽しかつたので、姫君にイタリアの教数の良い点を絵のように描写し、お世話する愛らしい乙女の空想を育はぐみ、お蔭で姫は快い印象を後になつても忘れ去ることは無かつた。メレクザーラ姫が成長するにつれて、異国とくにの装飾品や、当時は奢侈しゃしの程度もまだごく慎ましか



なものだったヨーロッパの調度類への憧れはますます膨らんで行き、彼女の立ち居ふるまいは祖国の習慣よりヨーロッパの風俗に似つかわしいものになった。

彼女はいとけない頃から大の花好き。アラビアの慣わしに従って意味深長な花束や花冠を拵えるのがその仕事の一部で、これらによつて心の思いを犀利に明らかにしたものだ。いや、それどころではない。極めて発明の才に富んでいたから、

金言をも含めて『コーラン』の全文章を、さまざまな特性を持つ花を配列することによつて、しばしばとても見事に表現することができた。これができるとお付きの少女たちとその意味を当てさせるのだったが、侍女たちが間違うことはめつたに無かった。ある日矢車仙翁で心臓の形を作り、その周りを白薔薇と白百合で囲み、その下に伸び上がるうとして二本の天鷲絨毛蕊花をしつかり結んだ。毛蕊花は素晴らしく美しい模様の秋牡丹を抱いているのである。この花飾りを見せられた腰元たちは異口同音にこう言ったもの。「心の純潔は生まれや美しさを超える」と。お付きの奴隷女らにできたての花束を与えることがあったが、こうした花の贈り物は、大抵受け取り手に対するお褒めの言葉かお小言だった。徒心花の花輪は、軽はずみを恥じなさい、だし、はちきれそうな罌粟の花は白惚れと見栄張りの戒め。芳香を放つ火繩喇叭とうなだれる鈴蘭で作った花束は慎ましきの、日没に夢を閉じる黄金百合は賢い用心の賞賛。海昼顔ははおべっかに対する、そして、その根に毒を持つ犬泊夫藍を添えた朝鮮朝顔の花は意地悪な中傷とひそやかな妬みに対する罰、といった具合。

父君のオトマンは魅惑溢れる愛娘の想像力の明敏な戯れに心中満足していた。もつとも彼はこの機知に富んだ

神聖文字を解説する才能はろくすっぽ持ち合わせていなかったし、その意味を考え当てるには枢密院（ドイツ）全員の力を借りねばならなかったが。王女の異国的な趣味（ドイツ）の方ははっきり分かつており、単純素朴なイスラム教徒としてこの点ではどうも共感できなかった。しかしそれでも寛大で優しい父親のこと、姫のこうしたお道楽を禁止するより、それにつきあつてやろうとした。思いついたのは娘の花好きと西洋風の事物への入れ込みぶりを結び付け、西洋人好みの庭園を造営することだった。この着想はうまい案だと思えたので、片時もなおざりにせず、できるだけ迅速に実現するよう、これをお気に入りの長老キアメルに伝えたのである。主君の望みは自分にとつて四の五の言わずに従わねばならぬ命令であることをよくよく心得ていた長老は、この件に色色困難がある、とは感じたものの、それをあえて言上しはしなかった。自身も王同様ヨーロッパ様式の庭園設計についてろくに意見は持ち合わせておらず、頼れそうな人物はカイロ広しといえども心当たりが無い。そこでキリスト教徒の奴隸たちの中で造園に通じている者を探させ、こうしてよりによって不適切な男に遭遇、これに自分の難儀を救わせようと思つた次第。だから長老が例の庭園改革の遣り口を検分した時、何とも憂わしげに頭を振つたのは無理からぬこと。これが自分と同じく王にも気に入られなかつたら、おそらく重大な責任を負わなければならないだろうし、少なくとも寵遇には翳が差すだろうから。

この造園作業はこれまで宮廷人に見ることのできない秘密事項とされ、後宮に仕える者たちは立ち入りを禁じられていた。王は姫君の誕生の祝祭の折にこの贈り物で不意打ちを喰わせ、綺羅を飾つた彼女をそこへ連れて行き、庭園を所有物として譲渡するつもりだった。さてこの日が近づいたので、陛下におかせられてはあらかじめ全てを实地に見て、さまざまに新しい設備について報告を受け、自身満足を味わうとともに麗しのメレクザーラに庭の風変わりな美しさを説明できるように、と考え、長老に伝えた。これを聞いて不安になつた長老は、万が一王が庭の風致に不悦の趣をお示しになられたら、これで窮地から逃れようと思ひ、逃げ口上を一つ用意しておいた。彼はこう言うつ



もりだった。信仰篤き者の大君様、お指図はやつがれの進退の規範にござりま  
 する。行け、と仰せの方角にこの足は歩み、お託しになられる物はこの手がし  
 っかりと守ります。大君様はフランク人流儀のお庭をご所望になられました。  
 御眼の前にありますのがそれでござります。あの無様な野蛮人どもは惨め  
 たらしい砂漠以外のものはよう作れませぬ。棗椰子も檸檬も実らず、カラフ  
 (9) もバオバブ (10) も無いきやつらの貧寒たる故郷ではそういう土地にな  
 にやら草を植えております。なせ、預言者の呪いが、永久に不毛になるよ  
 うに、とあの不信の輩の耕牧地を咎打たれ、メッカ産の小さな香膏の樹の芳  
 香を嗅いだり、風味豊かな果物を賞味したりして、楽園の至福を前もって楽し  
 めるようにはなりませんのでな、とね。

王が長老ただ一人を供とし、どんな不思議を目にするのか、とわくわくし  
 ながら庭に足を踏み入れた時、太陽は既に傾き始めていた。遙かに展望が開け  
 ている、市街の一部とムシエルン、シャームベッケン、シェオメオン (11) が  
 行き交うナイル河の鏡のような水面、それから背景には天を摩すばかりの  
 露台に立った彼の目にあからさまになった。もはや見通しの利かない椰  
 子の林に遮られなかつたからである。同時に爽やかな涼風がさあっと吹きつけて心地よかつた。たくさんの新奇な  
 事物が四方八方からどっと迫って来た。もちろん庭園は今や全く未知の様相を呈しており、王が子どもの頃から遣  
 遥し、永久不変だったので五官はとくに飽き飽きしていた元の林苑は影も形も無かつた。狡猾なクルトは、新奇な



魅力が効果を挙げないわけではない、とまことにもつて賢明に判断したもの。王スルタンはこの道の目利きの見識ではなく、五官への第一印象に従つて庭園の吟味を行なつた。物珍しさはいとも容易におもしろいと思わせる撒き餌まきえになるから目にする物はことごとく結構で、当を得ている、と思える。曲がりくねつた左右対象の、砂利を突き固めた遊歩道ですら、足に弾力を与え、軽快にしっかりと歩けた。王スルタンが普段慣れているのは柔らかなペルシア絨緞じゅうたんか、緑なす草地だったので。彼は飽きもせず迷路のような遊歩道を縦横に歩き回り、極めて入念に栽培され手入れされている多種多様な草花の花園にとりわけ満足の意を示した。これらは壁の外でだつてひとりで、同じ様に美しく、そしてもつとどつさり花開いていたのだけだ。

休息用の長椅子に腰を下ろした王スルタンは朗らかな顔つきでこう言つた。「キアメル、そちは余の期待を裏切らなんだぞ。そちは元の庭園を国ぶりとは異なつた新奇な物に造り変えるだろう、としかと承知しておつた。それゆえ余の満足は押し隠せぬ。メレクザーラはそちの仕事をフランク人流の庭園と考えるであろう」。長老シエイクは主君が思いも寄らぬことをのたまうのを耳にして、何もかもこんなうまく運んだのをすこぶるいぶかしみ、舌を慎んで、早まつた訴えをせずに置いたのを喜んだ。そしてすぐに、王スルタンが悉皆しつぱい自分の工夫だと信じているようなのに気づき、弁舌の舵を急いで己が帆に吹き込んで来た順風の方向に取つて、このように応えた。「信仰篤き者の権勢高き大君様、申し上げねばなりませぬが、陛下の従順しんべんな下僕しもべは陛下の御意ごいに沿ひ、前代未聞の物、エジプトの地にはいまだかつて目にされておらぬ物を、この古い棗椰子の林から作り出そう、と明け暮れ思い煩うておりました。疑いもなく預言者のご啓示でござりまする。信仰篤き者の楽園を規範として計画を立案いたすのを思ひつきましたのは。と申しますのは、かようなれば陛下のご意向をよもゆるがせにすることはあるまい、と確信つかまつりましたので」。善良な王スルタンは、自然の成り行きによればそこへ到達するのもそう先のことではない、と思われる楽園がどんなところか、我がドイツの

これから物故する人人が天なるエルサレムの様子、ただずまいに關して混乱しているのと同じで、前前からどうもよく分からなかった。あるいは、もともと彼はこの下界で充足した暮らしを送っている全ての幸運児のように、ありがたい来世の景色には一向興味が無かった、というか。そこで、導師とか托鉢僧、あるいは他の聖職にある御仁が楽園に言及すると、いつでもあの古い林苑が脳裡に浮かぶのだったが、そこは別段お気に入りの滞在場所では無かった。さてしかし、このたび彼の想像力は全く別の觀念に方向転換された。あの世の楽しみこの新たな光景に恍惚となつた彼は、今や少なくとも、楽園はこれまで思い描いて来たよりもどうやら快適なところらしい、と推量した。そして、その雛形が手に入った、と思つたので、この庭園を大いに尊重したわけだが、そのことを明らかに示すため、ただちに長老を領主に昇進させ、榮譽の衣装である長上着を纏わせた。どの大陸でだつてそうだけれど、老練な宮廷人といふのは、位を下しおかれたら、それを拒んだりはしないもの。そこでキアメル殿はためらうことなく、当然代理人に帰すべき勲功の報酬をあつさり独り占めにしてしまい、代理人のことはこれっぽかりも王に言上せず、その日給をアスベル銀貨数枚増やしはしたけれど、それでも遣り過ぎだ、と考へたのであつた。

太陽が磨羯宮——この黄道十二宮は北国人には冬の合図だが、もつと温和なエジプトの氣候では最も素晴らしい季節の到来を告げる——に入った頃、世界の花は彼女のためにしつらえられた庭園に足を踏み入れ、これを自分の異國趣味に完全にびつたり、と御意あそばす。もちろんこの庭の最大の飾りは彼女自身。姫が逍遙するところならどこもかしこも、石ころだらけのアラビアの砂漠だろうと、グリーンランドの氷原だろうと、乙女鑑定家の目には、彼女の姿に接するだけで至福の野に化したことだろう。見渡す限り何列も何列も行き当たりばつたりで混ぜ植えされた多種多様の花花は、姫の目と心に同じ効果を与えた。彼女はこうした混乱ぶりさえ、花花のさまざまな特性を含蓄豊かに仄めかすことによつて、系統だつた秩序に同化することができた。土地の風習に従い、姫君が林苑を訪れる折は

いつも、労働者、園丁、水運び人夫といったありとあらゆる男つ気は、番人の宦官たちによってそこから遠ざけられた。だからかの芸術家は、そのためにせつせと働いた典雅の女神を見ることはできずじまい。自分の植物学上の無知のせいでかくも長いこと謎だった世界の花を目撃したい、と随分憧れたのだけでも。さて、姫はこれまでにも祖国の習慣を少なからずないがしろにしていたのだが、庭がますます魅力を増して来たので、日に何回も訪れるようになった。そこで、王がバイラムの祭にイスラム教寺院に赴くために、行列を作っついても厳かに前を練り歩いて行く宦官たちのお供が次第に煩わしくならなくなり、しばしば独りで、しばしば腹心の侍女の腕に凭れて現れた。けれどもいつも薄い面紗で顔を隠し、蘭草で編んだ小籠を手に提げ、遊歩道をあちこち歩き回って花を摘み、いつもの慣わし通り寓意的な花束にこしらえ、考えていることの女通辞に仕立て、お付きの女たちに分け与えるのだった。ある朝、まだ暑くならないうちに、そして草の露が虹の七色をきらめかせているうちに、芳しい春の大気を満喫しようと、彼女は自分の理想郷に出かけた。折しも彼女の庭師は萎れた植物を引き抜いて、他の咲きほころびている花と取り替えるのに没頭していた。これらは注意深く鉢で育て上げたもので、あとで上手に土に埋め、魔術のような成長ぶりで一夜にして大地の胎内から生え出たように見せ掛けるのである。姫君はこうした雅やかな感覚のごまかしに気づいて満足した。そして、足りなくならないよう萎れた花が他のと置き換えられる秘密を発見したので、この発見を利用して、この庭師に、どこにいつ、これこれ、あるいははしかかの花を咲かせなさい、と指示してやりたくなつた。庭師が目を上げると、天使のような姿の女性を見たのだが、これこそこの林苑の所有者であることが分かつた。なぜならこの女性には、聖人の光輪で包まれているみたいに、この世のものとは思えない数数の魅力が備わつていたのである。この顕現にびびり仰天した彼は、見事なコロカシアの植わつた鉢を手から落としてしまい、かくしてそのあえかなる植物生命はピラストル・ド・ロジェ殿と同じく悲劇的な最期を遂げた。つまり両者とも母なる大地の

胎内に戻ったわけ。

伯爵は彫像のように凝然と立ちすくんだ。生氣も動きも見せなかったので、トルコ人が神殿や庭園の石像相手によくやらかすように、その鼻をぶんぐられたとしても、ぴくりともしなかつたことだろう。しかし朱唇を突いて出た姫の甘美な声が彼を我に返らせた。「キリスト教徒よ」と彼女は言った。「恐れることは無い。わらわと同時にそこがここにいやるのは、この方の咎じゃ。急いで日課を果たし、それから、わらわの言いつけ通り、草花を並べてくりやれ」。「いと華やける世界の花の君」と庭師が応えて「御輝きの前ではこれらの花花の彩りは全て褪せてしまいます。この蒼穹は天界の饗宴の星の女王さながらあなた様がしろしめすまま。どうかお指図下さいまして、仰せ畏む奴隷のうちで最も幸せなこの者の手を動かして下さいませよう。ご命令を遂行するのに相応しい下僕とお思い下さる限り、この奴隷は己が鎖に接吻いたしまする」。王女は一介の奴隷が自分に向かって口を開くとは予期しなかつたし、まして慇懃な言葉を述べるなんて思いも寄らず、視線は園丁などより花の方に向けていたのだが、この者の方もちらと見やると、これまでに目撃した、あるいは夢で見た美男子全てを凌ぐ、いやが上にもめでたい形姿の男性が相手なので、はっと驚いた。

グライヒェン伯爵はその優雅な男ぶりでドイツ中に名高かつた。ヴェルツブルクの馬上槍試合において彼は既に入場方の寵児となつた。新鮮な空気を吸おうと彼が、最も大胆な戦士が駒を駆つていても、ご婦人たちはことごとくそっぽを向き、皆彼だけを注視する始末。そして試合を始めるため兜を閉ざすと、こよなく純潔な乙女の胸も高く波立ち、心臓は見事な武者ぶりの騎士を氣遣つて轟いた。バイエルン公の恋に獲れた姫御の想いを寄せる手が勝利騎士の栄冠を彼の頭に載せ、青年は顔赤らめてこれを受けたのである。なるほど、格子の嵌まつた塔内での七年の禁獄は若やかだつた頬を青白くし、隆隆としていた筋肉を弛緩させ、きらめく眼差しを空るなもの

としていた。しかし自由の空気を満喫、健康の友である活動と仕事にいそしんだので、失ったものはたつぷり償われた。彼は長い冬の間ずっと温室に囲われていて、春の再来とともに若葉を茂らせ、美しい樹冠を戴いた月桂樹のように生氣澁刺はげらとしていた。

外国風のものなら何でも殊ことの外ほか好きなため、王女はこのすてきな余所者よせの魅惑的な容姿をつい喜んで眺めざるを得なかった。エンデュミオン(11)のような美青年を見るのは、流行小間物売りの女が歳の市の屋台(12)で陳列する品物なんぞとは全く違った影響を乙女心に及ぼすものだ、なんて考えてもみななかったけれど。草花の植栽をどう配列するか、愛らしい口で上品な庭師に指図した彼女は、時時くろうと玄人としての判定を質し、庭の構想が更に自分の思い通りになるように、相手と会話を交わした。それからやつとのもので、すこぶるお気に召した庭師さんを解放したが、でも、五歩と歩かぬうちにまた取って返し、いくつか新しい注文をした。そして、遊歩道をうねくねと歩いて行きながらもまだ改めて再三呼び寄せて、ちよつと質問したり、あるいは何か改善を提案したものの。夕暮れになって涼しくなり始めると、彼女はまたしても新鮮な大気を吸う必要を感じたし、増水し出しているナイル河の水面みなもに太陽がきらめくやいなや、すくすく伸びている草花が花開くのが見たくて堪らず庭に引き寄せられるのだった。その際彼女は必ず庭師さんが働いている辺りを先ず訪れ、幾つも新規の指図をし、それをこちららに精確かつ迅速にせつせと実行した。

ある時ポスタンジ(12)を探したが見当たらなかったことがあった。彼に対する愛顧は日に日に増す一方だった。こんぐらかった小路をあちこち彷徨さまよったが、見て見て、とばかり咲き誇り、高雅な色合いや芳しい香りで彼女の注意を惹こうとする花なんぞには目もくれない。どの藪陰も、どの高く枝を伸ばした茂みも、あそこかここか、と探した洞窟あふまにいるのかな、と思った。でも姿を現さなかったから、林苑の全ての園亭を一つ一つお参りし、どこかでまどろんでいるのを不意打ちして目を覚まさせたら、彼がさぞ慌てふためくだろう、と思つて嬉しくなつた。けれどもどこ

にも見当たらず。たまたま姫に出くわしたのは伯爵の乗馬兵だった、物事に動じないファイト。まことにもって融通ゆつとゆうの利かない人物なので、伯爵としては水運び人夫に使う以外どうしようも無かったのである。

王女の姿を目にした彼は、行く手を妨げないよう、水桶を持って回れ右をしたが、王女の方は相手を呼び寄せ、ボスタンジにはどこで会えるか、と訊ねた。「他のどこだってんで」とこやつ、その無骨な口ぶりで返答。「ユダヤのいかさま医者(16)の手中でさ。手っ取り早くあの方の魂を追ん出しちまうこつてしよう」。王スルタンの魅力溢れる息女はこゝう聞かされて驚愕し、いたく心を悩ませた。だって、お気に入り



丁が病気になったので、庭仕事ができなくなった、としか思えなかったのも。彼女はすぐさま宮殿に還御したが、侍女たちはいつもは晴れやかな女主人の額が悲しみにかき曇っているのに気づいて周章狼狽。まるでじっとりした南風の息吹が鏡のように清らかな水平線に吹き付けたので、たなびいていた靄がもくもくと雲の塊になったよう。後宮セウコンへ戻る途中彼女はどっさり花を摘みだけでも、皆悲しい花ばかり。これらは糸杉(17)と迷迭香(18)と一緒に花束にされて、彼女の気持ちをはっきり表現した。何日も何日もこんな風に過ごしたので、侍女たちはそれが辛くて堪らず、お姫様ひよさまの胸のお悩みは何が原因なのでしょう、とお互い同士相談したけれども、女性の協議というものが大抵そうないように、結論には至らなかつた。なにせ投票を行なう段になると意見の不協和音が生まれて、和音は発見できずじまいだったので。実際のところ伯爵は、王女にいちいち指図されずともそれに先んじて意図を実現しよう、一言微かな声で触れただけでもその仕事を全て果たそう、と熱意を燃やしたために、労働に慣れていない体を痛めつけてしまい、健康を

蝕むしばまれて熱病かかに罹かかつたのだった。しかしガレノスの弟子たるユダヤ人(10)の治療が甲斐あつたのか、それともむしろ伯爵の頑強な体質のお蔭でか、病気が打ち負かされたので、数日後彼は元元通り仕事に復帰することができた。その姿に気づくやいなや、王女は朗らかさを取り戻した。そこで、姫君が減入へいっている理由がとんと分からなかったご婦人方の会議は、幾日か前に何かの花株のことを、ちゃんと伸びるかしたら、とお姫様ひびさまが心配なさつて、それがうまく根付いたんだわ、と衆議一決したが、これは寓意的には当たつていなくもなかつたのである。

メレクザーラ姫はまだ、自然の手から生まれ出たままの天真爛漫な氣立ての持ち主で、愛神アモールがいつも初心うぶな美女たち(11)に働く悪戯わるざについて何一つ知らず、警告も受けたことは無い。そもそも昔から乙女たちや王女方向けの恋の道に関する助言が欠乏しているのである。この種のお作法についての学説があれば、『諸侯家並びに公家傳ふいく育官への助言』(12)なんぞよりよっぽど役に立つのだけどね。この本と来たら、咳をされたり、口をすばめられたり、目配せされたりなんかをろくすっぽに掛けていない。その癖時折それをひどく悪く取つたりしているのに。さて、乙女たちはどのような合図でも理解するし、これに注意を払いもする。なぜなら彼女らの感覚の方が繊細だし、人目を忍ぶ合図というのはまさしく彼女らの本領なので。姫君は恋愛道の最初の修練期に入つたところで、新発意しんぼちの修道女が宗団おうぎの奥儀おくぎについて知らないのと同様、これについてはほとんどご存じなかつた。そこで彼女はあつげらかんと感情に身を任せるままで、三人の腹心の友である理性、叡智、熟考から成る枢密會議しゅみつぎに何ら諮問しもんしなかつたのである。というのは、もし相談していたら、ボスタングの病状に強い関心を抱いたのは、これまで知らなかつた情熱が既に勢い良く胸の中にはびこり始めたからだ、と示唆・警告が与えられたらうし、そうしたら、理性と熟考は、この情熱はつまり愛なのです、と彼女に囁き掛けたことだろう。伯爵の心中に何か類似の物が潜むようになったかについては、典拠となる古文書は見当たらない。姫君の言いつけを遂行しようとするなんとも過剰な熱心さが、そうした推測を裏書きしうるかも知れ

ない。だとすれば、一本の萎れた瑠璃草〔男の真心〕<sup>(10)</sup>で括られた当 帰<sup>リーフシネテッセル</sup> 〔愛の根株〕<sup>(11)</sup>の花束が彼にびつたりの寓意を表したところだろう。もつとも、何も恋が関与しなくなつて、純真な騎士の礼節だけでこうした卓抜な精励さの動機となるには充分だったが。なにしろ、上臈方のご意向とあればどんなことでもひたすら従うのが、当時の騎士たちの犯すべからざる掟だつたから。王女が彼女のボスタンジと親しく言葉を交わさない日は一日も無かつた。柔らかなその声音は伯爵の耳を魅惑し、一言一言がこよなく心地よく感じられた。彼より確信に満ちた戦士<sup>チャレジオン</sup>だつたら、こうした願つても無い状況を利用して、更に前進したことだろう。一方姫君は媚態を作るといふ習慣にはまるきり未経験で、内気な羊飼<sup>(12)</sup>いを元気づけて、心の窃盗を敢行させることなどできなかつたから、この恋愛沙汰は双方の想いという軸の廻りを回転するばかり。皆様方よおくご存知のように、物事の転変の原動力となるのが常であるあの偶然というやつが局面を一新しなかつたら、疑いも無くまだまだ当分変わった動きは出なかつたことだろう。

とても好い天気のある日の夕暮れ刻<sup>トキ</sup>、王女は庭園を訪れた。心はその日の地平線のように晴れやかだつた彼女は、忠実なボスタンジと種種のよしなしごとをいともんびりと打ち語らつたが、それもひとえに彼と言葉を交わしたいがため。そしてボスタンジが自分の可愛い花籠を一杯にし終わると、園亭<sup>おやまや</sup>の一つに腰を下ろして花束を拵え、それを相手に与えた。伯爵はこれを麗しい女主人のご愛顧の徴として狼狽した歓喜の表情で胴着の胸にひしと押し付けたが、これらの花がひそかな意味を持つているかも知れない、とは思ひも掛けなかつた。こうした神聖文字<sup>ヒエログリフ</sup>は、あの名高い木製の将棋指し人形<sup>(13)</sup>の秘密のからくり仕掛けが詮索する見物人の目から隠されているように、彼の目には隠されていたからである。そしてその後でも姫君は隠された意味を解き明かしはしなかつたので、伯爵は後世界<sup>ウチウ</sup>「形而上学の世界」の知識を獲得せぬまま、彼も花も萎れてしまった。一方王女の方は、花言葉というものは母国語同様だれにだって分かる、と思ひ込んでいたので、お気に入り<sup>つゆ</sup>の園丁が何もかもちゃんと理解した、と露疑<sup>つゆ</sup>わなかつた。そして受け



取った時彼がいとも恭しげに自分を見つめたから、このふるまいを、彼女が花束に籠めた、良く働き、懸命に奉仕してくれてありがとうね、との褒辞に対する謙虚なお礼と解釈したのである。また彼女は、同じように寓意を用いて感謝を示し、何かこう雅やかなことを述べるとか、胸の想いをまざまざと吐露している今現在の表情を一言で花言葉に翻訳できるかどうか、相手の繊細さを試してみたい、と思つて、相手なりの組み合わせで花束を所望した。伯爵は、下しおかれたご厚情に感動、庭園の端にある離れた花畑に飛ぶように急いだ。ここは花卉の貯蔵所で、ここから花盛りになった植物を鉢に植えて庭園に移し変えるのだった。折しもある香高い草花が満開になっていた。アラブ人がムシルミー（13）と呼び、これまでこの庭園には見られなかったもの。伯爵は、この新種なら自分を待っている麗しい花の愛好家が無邪気に満足してくれる、と考え、盆の代わりに幅広い無花果の葉の上に花を載せ、へりくだった、けれどもいくらか自負した物腰で、跪いて姫君に差し出し、これではささか褒めて戴けよう、と思つた。ところが、ひどくびつくりしたことに、姫君は顔を背け、薄い面纱に窺える限りでは、恥じらつて目を伏せ、一言も口にしないで、ほんやりしてしまつた。ためらいながら花を受け取るには受け取つたが、当惑した様子で、ちらりとも花を見ず、それを傍らの芝生の腰掛の上に置いた。朗らかな気分はどこへやら、威厳のある態度を取り繕い、きつと真剣な風情を漂わせ、ものの数



瞬と経たぬうちに、お気に入りにもくれず、園亭をあとにした。けれども立ち去る時にかのムシルーミーを忘れはせず、注意深く面紗フェールの下に隠したのである。

伯爵はこうした訳の分からない破局に動転し、奇妙なふるまいの原因は何なのか突き止めることもできず、姫君に置き去りにされてからまだ長い間、さながら悔悛者よろしく跪いたままで、下しおかれたご厚情のゆえに天国の聖女のように崇めている優美の女神の感情を害し、不興を招いたことを心底嘆き悲しんでいた。それから、最初の衝撃から気を取り直すと、ひどい悪業を犯したと自覚しているかのように、おすおす、そして愁いに沈んで住処へ引き上げた。手早のクルトはとつくに夕食の用意を済ませていたが、ご主人は食べようとせず、一口も口に運ばずにただ鉢の中を肉叉フォークでつつき回すばかり。そこで忠実な内膳頭だいぜんのかみは伯爵の不機嫌に気づき、素早く外へ忍び出ると一瓶のヒエラ産葡萄酒の栓を抜いたのだが、このギリシアの愁いを払う玉箒たまはらきは効果を發揮した。伯爵は能弁になり、腹心の家来に庭園での椿事を打ち明けたのである。このことは夜遅くまであれやこれやと詮索されたが、どうして姫君がご不興におなりになったのか推測できぬまま、主人と従者は床に就いた。後者は造作なく安眠したが、前者はどうしても眠れず、まんじりともしないで辛い一夜を過ごし、とうとう黎明れいめいを迎えてまた仕事に出かけた。

メレクザーラがいつも庭園を訪れる時刻になると、伯爵は熱心に入り口を注視した。けれども、後宮ごうの扉は開かれなかった。次の日も一日中、三日目も同じく待ちぼうけ。後宮の扉はさながら内側から壁で塞がれたかのよう。エルンスト伯爵が花言葉についてこうもことん物知らずでなかったら、姫君の奇妙なふるまいを解き明かす鍵を見つけただことだろうに。彼は麗しの女主人にあの花を捧げることによって、皆目気が付かぬまま明明白白たる愛の告白を行ったのである。それも全く非精神的な遣り口で、恋するアラビアの男は、だれか信頼できるご婦人の手を借りて、愛する女ひとにムシルーミーを一本渡してもらい、相手がちゃんと察して、アラビア語で唯一韻を踏んでいる言葉を探し

てくれるだろう、と期待する。この言葉はイツケルミー(10)。適切に訳せば、愛の報酬ほどの意味となる(14)。この工夫、これよりも簡潔な恋の表明はありはしないし、ヨーロッパ人が真似するだけの価値は充分、と認めなくてはならない。こいつを採り入れれば、あの恋文(10)といううんざりする駄文からすっかり解放されるだろう。往往にして、あれは書くのに大骨折って、頭を悩まさねばならず、往往にして、測らざる者の手に落ちると、哀れ、こてんこてんに嘲弄されるし、往往にして、受け取った当のご婦人方からささえ酷いあしらいを受けたり、誤解を蒙ったりする。もつとも、ムシルミーないし肉豆蔻風信子(10)は当地の庭園には僅か、そして短期間しか咲かないから、パリの、あるいは我がドイツの造花作りの女性連が何か似た品を作成、四季を通じて恋する男たちの需要に应运してくれたら、この工芸品のヨーロッパ内交易は、北アメリカ向けの怪しげな思惑貿易(10)より遙かにたやすく儲かるだろうに。なにしろヨーロッパの恋の騎士はどっちみち、こうした物言う花を贈っても、重罪とはされないのだし、東洋ではよくさういう顛末(10)になるのだが、肉体と生命でその行為を償わずに済むのでも。メレクザーラ姫があのように優しい穏やかな氣質でなかったら、もしくは、全能の愛が王(10)の息女の誇りを宥める(10)ことがなかったら、花を用いての慇懃典雅(10)な挨拶の報いに伯爵は、彼としては何一つ知らなかったのは申せ、容赦なくその首を差し出さなければならなかったところ。しかし王女はもともとこの含蓄ある花を受け取るのが厭だったわけではなく、求愛と思ひ込んだこの行為は心の琴線に触れ、これはもう長いこと知音に震えたのである。さりながら彼女のいかにも乙女らしい淑やかさは苛酷な試練に曝された。お気に入りが入りが不遜にも恋の悦楽を我が身に懇願した——と彼女は解釈したのだが——ので。これが、愛の供物を捧げられた時、彼女が顔を背けた理由。面纱(10)で伯爵は気づかなかつたが、姫のあえかな両の頬は真紅に染まり、百合のような胸は常にも増して盛り上がり、その胸の内では心臓が高鳴った。恥じらいと恋の情けが心中でひどく闘(10)ぎ合い、狼狽があまりにも大きかったので、口を開くこともできなかつた。しばらくの間彼女はこの剣呑なム

シルミーの花をどうしたらよいか途方に暮れた。斥ければ、愛してくれる男を絶望のどん底に突き落としてしま  
うし、受け取れば、相手の望みを叶えてあげよう、と告白することになる。それゆえ天秤の指針はあちらに揺れたり、  
こちらに揺れたりしたが、とうとう愛の方が重いと決まり、彼女は花を持ち去ったのである。これで少なくとも当座  
は伯爵の首が保障されたわけ。しかし自室で独りになってみると、この決心が齎すことになりそうな結果についてさ  
まざまの重大な思案が湧き出して来る。そこで姫の立場は一層由由しいものとなった。なにしろ、彼女は恋愛沙汰に  
はまるで初心なので、どうしたものかまるきり分からなかったし、そうかといって、だれか腹心の侍女に思い切つて  
打ち明けるわけにも行かない。恋人の命と自分自身の運命を第三者の思いのままに任せようという気なら別だが。

この物語の書き手が後宮の寢室にいる東洋の王女の様子を窺うより、死すべき定めの人の子が沐浴中の女神を覗き  
見する方が容易と申すもの。従つてメレクザーラ姫が受け取つたムシルミーを鏡置きの台の上で萎れるに任せたり、  
はたまた、目の保養としてできるだけ長く保たせようと、汲み立ての水に活けたか、いづれかなのか定かではない。  
同じく、彼女が楽しい夢の数々に耽つたか、それともたちの悪い恋の悩みに苦しめられて、その夜をとるところまどろ  
むばかりで、あるいは寝もやらずに過ぎしたか、これについてもよく分からない。けれども後の方を信ずべきかも知  
れない。なにしろ、王女が蒼褪めた頬、どんよりとした目で姿を現し、宮殿中大変な悲鳴、嘆声が翌早朝湧き起こつ  
たからである。腰元たちは、ご主人様が重い病に冒された、と思ひ込んだ。ご典医が呼び寄せられて、やんごとな  
い患者の脈を診ることになったが、これなん伯爵の熱病を蒸し風呂で一掃した例の髻のユダヤ人に他ならぬ。姫君はお  
国の慣わしで、小さい穴が開いている大きな衝立の後ろに置かれた長椅子に横たわり、その穴から愛らしく丸丸とし  
た腕を差し出したが、この腕も男の不浄な視線に曝されまいよう薄い綿紗が二三重三重に巻かれていた。「これはした  
り」と医師は腰元頭に囁いた。「あやに畏こき御方様におかせられてましてはただごとならぬご容態。お脈が二十日



鼠の尻尾のようにびくびく打ってござる」。そう言いながら、老獺ろうかいな医者たちのいつもの手だが、巧妙な術策を弄しても思わし気に頭を振り、カラフとその他数種の強心剤を処方、肩をすくめて、消耗性の熱病を予告した。

ところが、慎重な医者殿が、悪性の疾病の先触れだ、と看做した徴候はどれもこれも夜の安息が妨げられた結果に過ぎなかつたらしい。なにしろ病人は正午頃お昼寝シユエスタをあそばすと、イスラエル人がびっくりしたことには、夕方にはもう危険を脱し、葉は要らなくなつたからである。このアスクレピオス(16)の指示に基づき、まだ何日か安静にしていなければならなかつたが。彼女は自らの恋の道を十二分に思案し、ムシルーミーを受け取つたのが正しいことを実現する計画をあれやこれやと考え出すのにこの時間を使つた。せつせと立案、吟味、選択。とどのつまり、これじゃだめ、と投げ捨てる。想像をほしいままにすると、ある時はなんともしりごみせざるを得ない、最も大胆な空想力でもあえて路を切り拓ひらこうとはしない深淵、断崖しか見えぬ。さはさりながら彼女はこうした全ての躓つまずきの石(17)「怒りの原因、癩の種」の上に、どんな犠牲を払つても、胸の想いに従おう、という堅固な決意を築いた。げに英雄的精神である。これは母なるエヴァの娘たち「女性たち」には稀ではない。かれこれするうち彼女らはしばしば人生の幸福と満足を代価としてこれを購あがう。

しっかりと鎖とされていた後宮セシルの扉がやつこのことで開き、そこから麗しのメレクザーラが暁の門を通り抜ける輝く太陽のように庭

園にやって来た。伯爵は木蔭の絡まった園亭の後ろで彼女のお出ましに気づいた。彼の心臓は水車小屋の中みたくにかたなかたん、ごんごんと轟き始めた。さながら山坂越えて走ったかのよう。歓びのためか、気後れのせいか、それとも、この庭園へのお成りが自分に告げることは、ご赦免か、はたまたご不興か、という不安な物思いによるものか。この感じ易い筋肉の収縮の一つ一つの原因・理由をちゃんと挙げられるほど、人間の心臓を精確に分析することなどだれにできよう。要するにエルンスト伯爵は庭園に降臨した典雅の女神の姿を遠くから目にするやいなや、どうしてだか、なぜなんだか、自分でも訳が分からぬまま、胸が高鳴るのを感じたのである。彼女はすぐさま扈従の者たちに暇を出したが、今回は詩的な花の採集が用件ではないことが、あらゆる状況からまざまざと見て取れた。姫は園亭目指して足を運び、伯爵は別にわざと隠れん坊遊びをするつもりは無かったから、見つかるに違いなかった。彼女がまだ数歩離れているうちに、彼は意味深長な沈黙のうちに彼女の前に跪き、あえて目を挙げず、まさに裁判官が判決を下そうとしている被告人のように、痛痛しい風情でいた。けれども姫君は穏やかな声音、親しげなそぶりであらう語り掛けた。「立ちやれ、ポスタンジ。わらわに随いてこの園亭に入るがよい」。ポスタンジは黙ったまま言いつけに従った。さて、腰を下ろすと、姫はこう言った。「預言者の御心が行なわれますように。わらわは三日三夜というもの、あのお方に嘆願したのです。わらわの品行が愚かさで迷いの間に揺れているなら、何か御徴を示して、そう告げてくださいますように、とね。あのお方はお黙りになったまま。そうすることで奴隷の身の花鶏を、それに繋がれてやつと生きている鎖から解き放ち、ともに菓作りをしようとの森鳩の決意をお認めになられたのです。王の娘は奴隷であるそなたの手から捧げられたムシルミーを否みませんでした。わらわの運命は決まったのです。すぐに導師を探し、イースラム教寺院に連れて行ってもらい、信徒の徴を授かりなさい。さすれば父上はわらわの執り成しで、狭い岸を越え、谷間に流れ込む時のナイル河のようにそなたの位を高めてくれましょうぞ。そなたが領主として

「一地方を治めるようになれば、王冠を望むことも叶いましょう。王は、偉大なる預言者がその息女に与えたもうた女婿を拒絶なさりますまい。」

こう言われた伯爵は、強大な妖精に呪文を掛けられたように、またまた石の柱かなんぞのように凝然と立ちすくみ、生気も見せず、動きもせず、王女を驚いて見つめた。頬は色蒼褪め、口も利けない。なるほど、姫の言葉の意味は大體分かった。が、どうしてエジプトの王の女婿になるといふ思いも掛けぬ榮譽を授かることになるのか、それがさっぱり理解できない。こうした次第で彼は、念願成就した恋人に相応しいやがうえにも堂堂たる様子には見えなかつた。けれども目覚めた愛は、昇る朝日同様全てを黄金色にする。姫君は相手がびっくり仰天しているのを、欲びに感極まつたのだ、と受け取り、ありありと心乱れているのは、恋の幸福に圧倒されているせい、と思つた。しかしながらそのうち胸裡に、返辞を通告するのにせつかちにことを運び過ぎたのでは、恋人が予期したのより急ぎ過ぎたのでは、という乙女らしい疑念が萌したので、再び口を切つて、こう言つた。「黙つておいでだね、ボスタンジ。そなたのムシルーミーの好い香のお蔭で、そなたへのわらわの想いを匂い豊かにお返ししたのをいぶかしむことはありません。取り繕つてわらわの本心を隠したりはしませんでした。それとも、あれかこれかと希望をぐらつかせて、新婚の部屋の扉が開くまで、そなたが攀じ登らねばならない険しい路を、さなきだに苦しいものにした方がよかつたのであろうか。」

こうした口説の間に伯爵は冷静さを取り戻すことができ、陣営に非常喇叭が吹き鳴らされてはっと目覚めた戦士のように勇気を奮い起こした。「光輝満てる東洋の花の御方様」と彼。「茨の中に生い育ついじけた灌木ごときにあなただ様の陰の下で花開くような真似が許されましようか。さようなことをいたせば園丁の油断無い手が不都合な雑草として引き抜いて投げ捨て、踏み潰されてしまふか、灼熱の太陽の下、枯れ萎びてしまいますのでは。もし微風がその

塵を吹き上げ、やんごとなき飾り巻頭巾カクシケンを汚しまいらせれば、すぐさま何百もの手がいそいそとこれを清めようといたしましょう。王侯が召し上がるために、王スルタンのお庭に熟した麝香葡萄ジャウブの実実を奴隸風情が欲しがってよろしいものでございましょうか。お言いつけに従い、私は愛らしい花を探しましてございます。そしてムシルーミーを見つけました。が、その折はその名は存じませんでしたし、その神秘玄妙な意味はいまだに存じませぬ。私は、ひたすらあなた様の御旨みむねを奉じるためにそれを用いましてございます。さようではなかった、とお考えあそばしませぬよう」。

思ひも掛けないこうした答に姫の素晴らしい計画ははつきり狂ってしまった。ムシルーミーが女性に捧げられる場合、旧世界の残りの二つの部分「アジアとアフリカ」が常にそのことと結び付ける考えを、ヨーロッパ人は別段持っていないなんてことがあり得ようとは、彼女は思い設けもしなかった。誤解があつたのは今や明明白白。しかしながら一度心に根差した愛は、お針子が裁断をうっかり間違えた仕事をおつくり返しひよっくり返ししているうちに、結局は全てがまあなんとかうまく縫い合わされてしまうように、巧妙に工夫を施した。王女は面紗ヴェールの縁へりを美しい両手で弄んで困惑を押し隠し、暫くの間黙りこくっていたが、やがて優しい典雅な口調でこう述べた。「そなたの慎ましさは、鮮やかな色を見せつけるためにお日様の光は欲しがりはしないのに、その薫蕙と高い香のために愛される夜董よるすぢれに似ておりやる。それゆえ親切な巡り合わせがそなたの心の通辞となつて、わらわの心の感性を誘い出したのじゃ。そしてそれはそなたにあからさまになりました。預言者の教えに従いなさい。さすればそなたは望みを成就できましよう」。

伯爵はことの経緯がかなり飲み込め始め、夜の闇が曙光とともに消え失せるように、いくつもの謎が頭から晴れて行った。格子の嵌まった塔の牢獄にいた時、角の生えたサテュロスサテュロスか、真つ黒な地の精グノームに化けて出現するのじゃないかと待ち受けたあの誘惑者が、今やなんと翼を生やした愛神アモールの姿で近づき、信仰を否定し、優しい妻を裏切り、貞



潔な愛の担保「子ども」たちを忘れ去るよう説得しようと、誘惑のあらゆる手管を尽くしたのである。曰く、おまえはほしいままに奴隷の鉄鎖を優美な愛の絆と取り替えることができるのだ。一大陸きつての美女がおまえに微笑みかけている。さあ、彼女とともにこの世の幸せを満喫するがよい。彼女の胸にはウエスタの聖火のように清浄な炎がおまえのために燃え盛っているのだ。愚かしさ、強情さがおまえの心を混迷させ、姫の愛顧を拒む限り、その炎は彼女を焼き尽くしてしまうだろう。ちよつとの間おまえの信仰を巻頭巾の下に隠せ。教皇グレゴリウスはその免罪符の水溜めに、おまえの罪を洗い清めるお聖水をたつぷり貯えているさ。もしかするとおまえは、姫の清純な天使の魂を手に入れて、これに相応しい天国へ導く、という貢献をするのかも知れない、と。

もし守護の善天使が伯爵の耳許で誘惑の声にもう耳を貸さないよう咎め、戒めなかったら、彼はこうした人惑わしの語りかけにまだまだ長いこと心地よく聴き入っていたことだろう。そこで彼は、これ以上肉と血「肉体」と言葉を交わしてはならない、早急に克己心を振るい起こさなければ、と思った。何度か口籠ったが、とうとう彼は勇気を出して、こう応えた。「リビア砂漠で迷った旅人が、ナイルの水源で乾いた舌を潤したい、と願っても、渴き死にしなければならぬとしましたら、水を求める肝臓の苦しみを増すだけでございます。ですから、おお、女性のうちでこの上なく魅惑的な御方様、私の心臓を木喰い虫のように蝕むかような願いがこの魂に目覚めた、などとお考えになりませぬよう。私はこの虫に希望という餌を与えてはやれないのです。お聴きください。私は既に故郷で、断つことのあるあなたと婚姻の絆によって、淑徳高きさる女性と結ばれている身。そして三人ものいとけない子どもが回らぬ舌で可愛らしく、お父様、と呼んでくれるのです。苦惱と憧れに千千に引き裂かれているこの心が、どうして美の至宝に思いを懸け、全きものではない愛を捧げることなどできましよう」。この告白ははっきりしたもので、伯爵もまた、まこと騎士らしく、かつ、いわば一撃で、愛の闘いに決着を付けた、と思ひ違ひした。彼は、これで王女が早合点を悟

り、その計画を諦めるだろう、と考えたのだ。しかし、この点で彼は大誤算をしていた。姫君は、花も盛りの青年である伯爵が自分に目もくれないなどということがあろう、とは納得が行かなかった。彼女は自分が愛らしいことを心得ていた。そこで伯爵の心情についてのこの率直な明言もいよいよもって何も感銘を与えなかった。彼女は、祖国の習俗に倣い、夫の心を独り占めにするなんて思ってもみなかったし、男性たちの情愛は分割可能な財産だ、と考えていた。なにしろ、後宮セライルのさまざまな含蓄に富んだ遊びの中でよく聞いたことがあるのだ。殿方の情愛は一本の絹糸のようなもの。これは切つて分けることができるが、その各部分はそれ自体完全なのだ、と。実際の話、これ、意味深長な比喩ですよ。こういうのは、我がドイツのご婦人方の西洋的機知がまだ一度も思いついたことはない。姫の父の閨房ハレムは彼女に幼い頃から愛の共有例を夥しく教えてくれた。王スルタンの寵妃たちはそこでお互い気の置けないお友だちとして一緒に暮らしていたのである。

「そなたはわらわを、世界の花、と呼びましたね」と姫は返す。「でも、ご覧。このお庭にはわらわの傍にまだまだたくさん花がありますよ。これらは美しさも優雅さもまちまちで、目と心を悦ばせてくれます。して、わらわはこれらの花をそなたがわらわと分けて楽しむのを厭いととは言いません。そなた自身のお庭にたった一本の花だけ育てて、とわらわが要求するだけでも。始終それしか観ていなければ、そなたの目は飽きてしまうでしょう。そなたの妻はわらわがそなたに用意する幸せをわらわと頷うなづかち合えばよいのです。彼女をそなたの閨房ハレムにお入れなさい。喜んでお迎えますよ。そなたの妻はわらわの最愛のお友だちになるでしょう。そなたのためにのう。そして、そなたのために彼女もまたわらわを好いてくれるでしょう。彼女のお子たちもわらわの子にいたしましょう。わらわの進ぜる陰の下で、お子たちが楽しく花開き、異国とくにの大地に根を生やすようにね」。愛の寛容に関しては、啓蒙されたこの十八世紀でも、教会の寛容ほどにはまだまだ進んではいけない。でなければ、我がドイツのご婦人の読者方は王女のこうした言葉をさ



ほど奇つ怪にはお感じにはならないだろうが、おそらく十中八九はご不快でしょうな。けれどもメレクザーラ姫は東洋の女人。こちらの温和な空の下ではメガイラの嫉妬が振るう力は、人類の美しい半分「女性」に対しては、鉄の笏しやくを構かまえて彼女らに君臨しんしている人類の強い半分「男性」に対してより遥かに弱いのである。

エルンスト伯爵は王女の穏やかな物の考え方に心動かされた。だから、もし故郷にいたいというオッティリアがこれと同じような考え方ができる、と思えたら、その上信仰を捨てるといふ躓つまずきの石が行く手を阻んでいなかったら、そう決心したかも知れない。こうも率直に自分に求婚してくれなかった優美の女神にかかる良心の咎めを隠しておくことは彼には到底できなかった。そして他の厄介ごとを解決するのは容易でも、姫はこれには打ち勝てなかった。気の置けない会合ではあったが、この争点に關しては何も決着を見ないままひとまず散会とあいなつた。両者物別れで、条約は、自分の権利を少しも譲る氣の無い二つの隣国同士の国境策定会議と同様。懸案の調停は他日に持ち越すことになって、双方の全権委員はその時にまた愉快に楽しくやりましよう、と合意。

周知の如く伯爵の枢密会議には手早のクルトも議席と発言権を持っていた。宵になると主人は心配事を逐一彼に語って聞かせた。なにせ伯爵は非常に落ち着いた氣分になっていたからである。彼の合法的な愛の熾おき火ひからはもう出ようとはしなくなっていた愛の火花が、姫の心から彼の心へ飛び込んできた、といったことも十分あり得る。七年間もの留守、愛する昔の女むすめと再

会できる望みが無いこと、心の赴くままにしてよい、という降って湧いた機会、これらは、愛のような精神的材料が醜酔し易くなり、実態を変質させる三つの臨界状態なのだ。利口な盾持ちは、この興味津津のできごとに聴き入りながら耳を敬て、伯爵の物語を十分速く頭の中に通しきれない聴神経の狭い戸口であるかのように、一緒に広い口の門道もぼかんと開き、聞きほれると同時にこの思いがけない新情報を大層熱心に味わった。万事万端とつくり考え終わると、彼のあまり先を考えない判断は、どうやら解放されそうだと、その希望を一所懸命に掴み、王女の計画を實現し、一切それを変更せず、その他の点では神の摂理にお任せする、ということに落ち着いた。「殿は」とクルト。「お国じや生者の帳簿から抹殺されてしまっておられる。愛の綱に絶つて引き上げてもらわねえ限り、殿が奴隷というこのどん底の境涯から救われることありません。七年の間に殿を失くしたというご心痛に打ち負かされて、すっかり参つてらっしゃるのでなげりや、時間がご心痛を和ませてるこつてしよ。そんならあなた様のことなんぞお忘れで、だれか他の男の寢床の中で暖まっておられませう。けんども、ご信仰を否定するつてこたあ、こりや確かに固い胡桃「大変な問題」で。多分噛み割ることはおできにやなりますまい。もつともそれにだつてなんとか手立てがありません。この世界のどの民族だつて、天国に行くのにどの道を選ばにやならないかを、女房が亭主に教えるなんてこたあござんせん。女房は亭主に随き従い、雲が風に動かされるように亭主の行く方へ行き、右も左も、それからあの塩の柱になつちまったロトの女房みたいに後ろを見たりもしないもんでさ。てのも、亭主の行く先が、女房の居場所ですからね。わしも故郷に女房を持つとります。したが、まっこと、殿、わしが煉獄に置かれたら、あれはわしの後を追つて来ずにはいますまい。そいでもつて団扇で煽いでわしの哀れな魂に涼しい風を送つてくれますさあ。ですから、姫様こそ偽預言者なんぞお捨てになつてくれ、としつかりおっしゃいます。姫様があなた様に清い愛を捧げてらっしゃる



限り、きつとあのお方の天国をキリスト教の天国と喜んで取つ替えつこなさるでしようよ」。

手早のクルトはまだまだ延延と熱弁を振るい、やんごとなき恋を拒まず、鎖を断ち切るために他のあらゆる絆を忘れるよう、主人を説得しようとした。けれども、自分自身の女房の貞節さを信じていることを表明したせいで、伯爵に愛情深い奥方の貞節さを思い出させてしまったことには考え及ばなかった。伯爵はこれをさらりと振り捨てるように唆されたのであるが、彼の心は葡萄压榨機あつてに入れられたようにぎゅつと締め付けられた。夜の臥所ふしどでひっきりなしに輾転反側てんてんはんてん、さまざまな物思いやら決意やらが世にも奇妙な具合に錯綜した。そこですっかり疲労困憊したので、明け方になって漸くところとまどろんだ。すると夢を見た。彼の象牙のような歯列から一番見事な門歯が抜け落ちたので、彼は大層胸を痛め、ひどく懊惱した。ところが、残りの歯と同様綺麗で真っ白な新しい歯がちゃんと生え

ており、失くなったことなど分からなかったのである。目覚めるやいなや彼は、どうしてもこの夢の意味を知りたい、と思った。そこで手早のクルトはただちに占いをする漂泊ジプシの民の女を探し出した。このご婦人は料金と引き換えに手相、人相から上手に運勢を予言し、夢解きの天分も持っていた。伯爵は自分の見た夢を逐一彼女に物語った。するとこの皺だらけの黒褐色の肌をした巫女ヒュテプは長いこと考えを廻らした挙句、ぼつてり厚く反った唇を開いて、こう告げた。「あんたの一番大切なものが、死神に奪られちゃったのさ。だけど、失くしたものはすぐ運命が取り返してくれるよ」。

これではつきりしたのは、賢い従士の推量が空想ではなく、善良な伯爵夫人オツ

テーリアはいとしい背の君が喪われたことを嘆き悲しむあまり身罷ったということ。黒卒の死亡通告によつて確実に保証されたかのように、この凶報を露疑わず、寡夫やもめになったと思ひ込んだ伯爵はすっかり意気消沈、齒を一本失くした時、健やかな齒列がどんなに大事なものがよく分かつた男が感じることを悉く肝に銘じた。そして、慈悲深い自然が他の齒でそれを補つてくれようとしているのである。彼は蒙つたこの損失を、周知の慰藉に富んだ寡夫の格言、これぞ天命、是非も無し、というやつで諦めることにした。さてこれで自分は自由で絆を解かれた身と考えたので、満帆を張り、燕尾旗と四角旗を翻ひん翻と風に靡かせ、恋の幸せの港目指して舵を取ることにした。次の出逢いでは王女がいや増して美しく思われ、遣る瀬無くじつと見つめたもの。相手のほっそりした体つきに彼の目は恍惚とした。姫の軽やかで静かな歩き方は女神のそれにも似ていた。それはまあ、人間のこと、交互に足を前に出すのだったし、彩り豊かな砂の路を下肢を動かさずすうと漂い進むわけではなく、女神たちのお召し物を纏っているわけでもなかったけれど。「ボスタンジ」と彼女は音律美しい声音こゑで言った。「そなた、導師イマームに会いやったかな」。伯爵は一瞬黙っていたが、きらきら輝く目を伏せ、慎ましやかに胸に片手を当て、姫の前に跪いた。この恭しい姿勢で彼は決然とこう答えた。「王スルタンの貴き姫君様。私の命はなんなりと仰せのまま。されど私の信仰はさようではありませぬ。命はいつでも喜んでお捧げつかまつります。ただ信仰は取り上げないでくださいまし。これは私の魂と固く絡み合っておりますので、魂が肉体と離れる方が、信仰と分かれるより易しいのです」。かくして王女は自分の素晴らしい企てが挫折しそうなのを知ったので、あの名高い動物磁磁より明らかに間違いない効果を發揮するある勇ましい手段に訴え、計画を維持しようとした。つまり、面纱ヴェールを上げて容顔かんばんせを露わにしたのである。暗い大地を照らそうと、混沌カオスの中から姿を現した蒼穹の太陽さながら、燦然たる麗しさだった。両の頬はほんのりとした紅くれなゐに染まり、唇は真紅に燃え、虹の橋を渡る多彩な虹イリスの女神のように愛神アモールがその上で戯れている美しく弧を描いた双の眉の下には情をたっぷり含ん

だ目。そして二房の黄金色の巻き毛はそつと百合のような胸に接吻くちづけしている。伯爵は愕然として黙りこくっていたが、彼女の方が口を切って、こう言った。「ご覧、ボスタンジ。そなたの目にこの姿が気に入るかどうか、そしてわらわがそなたに要求する犠牲だけの値打ちがあるかどうか。「天使の御姿みまでございます」と、伯爵はこの上なく陶然とした面持ちで返辞した。「聖なる光輪に囲まれていらつしやれば、キリスト教の天国の前庭で輝くのに対応しゅうございます。この天国に較べればかの預言者の説く楽園の心地良さなど空しい影に過ぎませぬ」。

熱意と明白な確信を籠めて言われたこの言葉は、姫君の開けっ放しな心にすんなり受け入れられた。とりわけ聖なる光輪は、顔にとつても似合うに違いない飾りと思われた。彼女の活き活きとした空想力はこの考えに執着。そこで姫君はその意味の解説を所望した。伯爵は提供された機会をもつて双手で受け止め、できるだけ魅力的にキリスト教の天国を描写した。これには自分の想像力が生み出した最も典雅な景観を選び、相手に神の教えを説くため、今の今、至福の浄土の懐から遣わされたかのような確信をもつて語つたのである。かの預言者は、美しい性「女性」に対してはあの世での暮らしでの楽しさをろくすっぽ請け合いたがらなかった。そこでこちらの伝道師はそれだけ一層目的の到達に失敗せずに済んだ次第。使徒としての務めに殊の外適任だった、とは申せはせなんだが。天界そのものがこの教化の仕事にお恵みを垂れたもうたためか、王女の異国趣味が外国人の宗教的概念にまで拡大されたためか、あるいは、改宗を説く説教者の



人柄も加えて勘定に入っていたためか、要するに、彼女は全身これ耳と化し、夕方の薄闇が増して授業を打ち切らなかつたら、まだまだ何時間も喜んで先生の言葉に聴き入っていたことだろうが、今回のところは急いで面纱ヴェールを下ろし、後宮セライルへ向かつた。

王侯の子女が極めて利発で、知るべき価値のあることなら何事にまれ長足の進歩を遂げることは周知の事実。我がドイツの日記の数がこれを公に証明している。残余の人間たちは遅遅たる進捗ぶりに甘んじなければならぬのだ。それゆえエジプトの王スルタンの息女がちよつとの間に、先生が教えることのできた程度には西洋の教会の当時の教義に通暁したのは、何の不思議も無いこと。そこここにいくらか些細な異端邪説が混じっていたが、これはまあ別として。これらは故意には無く伯爵の知識の欠如のせいで信仰問題に流入してしまったのである。こうした認識は虚辞空文のままではおらず、キリスト教に帰依したい、との熱烈な欲求を彼女の心に目覚めさせた。そういう次第で王侯の考えは一部変更された。つまり、もはや伯爵を改宗させるつもりはなく、相手に自分を改宗させてもらう、との点で。しかしこうしたことは信仰の合一に關してばかりでなく、目的である結婚の問題でもそうだった。さて今や大事なのはどうすればこのもくろみを実行に移すかである。この重大案件について彼女は伯爵に諮問しもん、伯爵は夜毎の談合で手早のクルトと相談。そしてクルトは、鉄は熱いうちに打て、と主張。つまり、麗しき改宗者に伯爵の身分・家柄を打ち明け、自分と駆け落ちし、急いで海を渡ってヨーロッパの岸边に辿り着き、テューリンゲンの地でキリスト教徒の夫婦としても暮らすよう提案すべきだ、というわけ。

伯爵は彼の賢い従士が立てたこの入念な計画に大いに賛同。まるでクルトは主人の目からこれを読み取ったかのようだった。遂行するのにさまざまな困難が伴うかどうかは、熱狂的な立案にかつかつた当初は考慮されなかつた。愛は全ての山岳を平らかにし、城壁も堀もびよんびよこびよん、断崖絶壁もなんのその、市門で阻はばむ遮断棒(脚)など麦藁むぎわら



のように易易と飛び越える。次の授業の折、伯爵はいとしい教理学習者に立案した謀り（註）ごとを打ち明けた。「そなたは聖処女マリアの生き写しです。マリアという方は永劫の罰を下された民から天によつて選び出され、迷妄と偏見を克服、至上の歓びの住処でお恵みを受け継がれた。そなたはこの祖国を捨てての覚悟をなさらねば。そして急いで逃れるご準備を。私はそなたをローマにともなつてまいります。かしこには聖ペトルスの代理人たる天国の門番が住まい、天国に入る鍵を預かつておられる。この方に、そなたを教会の懐に迎え入れ、我らが愛の絆を祝福してくださるよう、お願いいたす所存。お父上の強力な腕が我らに追いつくのでは、とご心配あそばすな。我らが頭上の雲はどれもこれも、金剛石の盾と炎の剣（註）で身を固めた天使の軍勢が乗り組んだ船になります。天使たちの御姿は、死すべき定めの人の子の目にこそ見えね、厳しく戦支度を調べ、そなたを護り、庇うよう神の命を受けているのです。してまた、そなたに隠し立てはいたしません。私は、ご当地なら王（註）のこの上ないご寵遇を蒙つて漸く成れるほどの身の上、素性は伯爵（註）なのです。これは領地・領民を支配する生まれながらの領主（註）に等しき位。我が封土の境の内には幾つもの都市と町、それから数数の宮殿と要害堅固な山城が含まれております。我が身に従う騎士輩や盾持ちたち、それから馬も車も、いつでも私に勤仕（註）いたしましょう。私の祖国にまいりましたら、そなたは後宮（註）の壁に囲まれず、女王のごとく気ままに支配・統治なさつて戴きます」。

こうした伯爵の口上は王女には天のお告げのように思われた。彼女は彼の言葉が当てになるかどうかについては露疑わなかつたし、美しい森鳩が、花鶏（註）の巢ではなく、鶯の一族なる猛禽（註）の許で巢作りできるのは、悪い気持ちでは無かつた。彼女の熱烈な空想はとても甘美な期待に満たされたので、さながら新たなカナンの地（註）が海の彼方の他の大陸で自分を待ち設けているかのように、エジプトから出るイスラエルの子（註）らよろしくいそいと従つた。だから、もし彼女の随伴者から、この大変な企てがうまく成功するだろう、との見込みで実行に移されるまで、まだ色色用意しな





後宮<sup>セライル</sup>をことごとく滅ぼす、と誓った。マムルーク<sup>マムルーク</sup>の親衛隊は馬にまたがり、カイロの街路で四方八方に散って、逃亡者たちを急追しなければならなかった。そしてもし水路を選んだ場合彼らを捉えようと、何千もの櫂<sup>カヌー</sup>がナイルの水面<sup>みなも</sup>を激しく打った。

伯爵が旅の伴侶ともども身を隠す秘法を心得ていなければ、あるいはエジプト全土に目潰しを喰わせる奇跡の才を持つていなければ、かかる配備を廻らされては、王<sup>スルタン</sup>の長く延びる腕から逃れ切ることは不可能だった。けれども彼はこの能力を授かつてはいなかった。手早のクルトだけがかねて幾つかの方策を立てており、これらは効果という点ではどこでもかしこでも奇跡の代わりが務まるやつ。彼は逃亡者の一団を、偉大なる発汗療法師アドラムの家の暗い穴蔵の闇を用いて、人目に見えなくした。このユダヤのヘルメス<sup>ヘルメス</sup>は、その治療の技術を上手に駆使するだけで満足せず、父祖から受け継いだ才幹を用いて大いに利殖に励み、

医者、商人、泥棒の守護者なる役柄のメルクリウス<sup>メルクリウス</sup>を崇めていた。彼はヴェネツィア人と大規模な香辛料・葉草の交易を営んでおり、これで莫大な富を得ていたが、それでいくばくかの利益が得られればどんな商談でも軽んじなかった。

忠実な従士は、この、金子<sup>きんす</sup>および金子に替えられる物をもらえばどんなことでも喜んでしてくれる頼みになるイスラエル人<sup>びと</sup>を、王女の装身具入れの小箱から出た宝玉一個で味方にし、伯爵——彼の身分と計画は相手には隠したままで——をその従者三人ともども、アレクサンドリアに停泊中のあるヴ



無事終わらせるのに、ありったけの知恵を絞らねばならなかった。何はさておき、地下室の同居人たちに厳しい検疫隔離<sup>⑩</sup>を課し、最初の探索が一段落し、王女を見つける、という見込みが無くなり、探し出そうとする意気込みが冷めると、この一団を四柵<sup>⑪</sup>の葉草の貨物として荷造りし、一艘のナイルの河舟に載せ、送り状を添えて、神のご加護の下つつがなくアレクサンドリアへ発送。この地でヴェネツィア船が沖に出ると、すぐさま一行は窮屈な葉草袋（15）の中から一人残らず解放されたわけ。

炎の剣と盾で武装した天界の護衛が壮麗な雲の軍勢となって、波に揺れるこの船に随き従ったかどうか、これは目に見えないわけだから、公に証明することはできない。ではあるけれども、そのことを真実らしく思わせる確かな徴

エネツィアの船に運び込むことを引き受けてもらった。もつとも賢明にも、実はこの御仁、主君の息女を密輸出<sup>⑫</sup>し、こっそりこの国から逃がしてくれ、と頼まれたことになるのだ、とは内緒にしておいた。これから運搬する品物を一見に及んだ時、なるほど綺麗な少年の姿が彼の目に留まった。が、不吉なことは何も考えず、騎士のお小姓だろう、と思ったわけ。その後間もなく、メレクザーラ姫様が行方不明、との噂が街中に流れると、真相を思い知らされ、死ぬほどの驚愕が彼の五官を支配。

ために、白髯は戦<sup>おの</sup>き始め、こんな危険な取り引きに巻き込まれるんじゃないかと、と悔いた。しかし、こうなつては時既に遅し。自分自身の身の安全のためにも、この命懸けの仕事

がある。天の四つの風は船旅を上首尾に終わらせるために気を合わせたようだった。逆風はその息吹いぶきを差し控え、順風は大層朗らかに帆に吹き込んだので、船は穏やかに戯れる波に矢のように速く航跡を残した。親切な月が大きくなつて行くその二本の白銀しろがねの角を雲間から二度目に突き出した時、ヴェネツィア船は上上のご機嫌で祖国の港に滑り込んだ。

オッテイーリア伯爵夫人の油断無い見張り人は相変わらず同地に滞在し、問い合わせが無駄に終わる実りの無い骨折りに怯おそめず臆おそさず、配下の者を増やし、近レヴァント東から来た全ての乗客をせつせと吟味しており、伯爵が麗しのメレクザーラとともに上陸した時、丁度うまいこと自ら持ち場に居合わせた。彼は、ご主人様の人相はよくよく心得ているので、何千もの見知らぬ顔のうちからでもちゃんと見届けられるだろう、と思っていたものの、異国の服装と七年の間には少なからず顔立ちに変化を齎す歳月の指のせいで暫くはつきりしない。この問題を確かめるため、彼は異国からの到着者の供の方に近づき、例の忠実な従士に歩み寄るとこう訊ねた。

「よう、どこからおいでかね」。

手早のクルトは、母国語で話し掛けて来た同国人に出くわして喜んだが、見知らぬ者とおしゃべりするのにはよろしくない、と

考え、ぶつきらぼうに「海からさね」と答えた。

「お供なすつとるあの立派な御方はどなたかな」。

「わしのご主人」。

「あんたがたはどのあたりから来なすつた」

「日の出(西)の方角から」。



「どちらへ行くおつもりだな」。

「日の入りの方角へ」。

「どこの土地へかの」。

「わしらの故郷へ」。

「そりやまたどこだな」。

「内陸へ何百哩も入ったところよ」。

「あなたの名前は」。

「野原へ飛び込め、と世間じやわしに挨拶する。榮えある、てのがわしの劍。女房の名は暇潰し。

朝が遅い、とあれは女中を呼ぶ。下男の名乗りは、善かれ悪しかれ。風よ吹け、とわしは子どもに名を付けた。

怠け骨め、とわしや馬を叱る。拍車りんりん、があいつの歩調。飼い犬を呼ぶにやあ、おい、地獄の入り口。わ

しの雄鶏は、お天気男、と啼きおるて。藁にびよいしな、ちゅうのがわしの蚤。これで、わしの女房子と眷属一同を

おまえさんにご紹介申し上げたつてわけさな」。

「どうやらあなたはちよくな「気軽な」衆だの」

「わしは職人衆なんぞじゃねえ。手仕事はやつとらんで」。

「一つ質問に答えてくださらんか」。

「言ってみなせえ」。

「あなた、グライヒエン伯爵エルンスト様について何か変わった話を東洋で聞かなんだかの」。

「なぜそれを訊く」。

「なぜでも」。

「これじゃあ堂堂廻りだ。なぜと言やあ、なぜでも、と来た」。

「あたしが伯爵の奥方のオッティーリア様に世の中へ送り出された者だからだよ。旦那様をご存命か、この世のどこへ行けば見つかるか、ご報告するためにな」。

この返辞に手早のクルトはいささか狼狽、そこで調子を全く切り替えた。「待ちなよ、国の衆」と彼。「あの御方が消息をご存じかもな」。すぐさま伯爵の許に行き、この新情報を耳打ちすると、伯爵の胸には歡喜と狼狽が相半ばする複雑至極な感情が沸き起こった。彼は、自分が夢ないし夢判断に欺かれたのであって、美しい旅の道連れと結婚しようという目算が簡単に狂ってしまったことに気づいた。こう話が紛糾ぶんきょうするとどう身を処したらよいか急には分らなかったが、故郷の自宅の様子を知りたいという欲求が狐疑しゆんぎん逡巡しゆんじゆんに打ち勝った。で、密使を手招きすると、これが昔の宮廷の従僕であることを認めた。こちらは、再会した殿様の手を嬉し涙で濡らし、伯爵夫人が愛する背の君の聖地からの帰還という吉報を耳にしたら、どんなに歡呼することか、と述べ立てた。伯爵はこの郎党に宿へ案内してもらい、そこで自分の心が置かれた奇妙な立場をとくと思案、美しいサラセン女性との間に始まった恋愛沙汰がどうなるか、落ち着いて考えを廻らした。それからじつと待ち続けていた密偵は急報デスシエを携えて伯爵夫人の許へ送り出された。この急報には、奴隷にされていた伯爵の色色な巡り合わせと、エジプトの王スルタンの息女の援けによる解放について、ありのままの知らせが記されていた。すなわち、王女が伯爵を愛するあまり、自分と結婚して欲しい、との条件で、王冠も祖国も捨てたこと、伯爵の方も、ある夢に騙されて、結婚を彼女に約束したことを。これにより伯爵は奥方に、夫婦の寢床を分かち合う第二の女性の存在をあらかじめ告げただけでなく、さまざまのしかるべき理由を挙げて、これに同意して欲しい旨、懇願した次第である。

オッテイーリア夫人が寡婦かふの面紗ヴェールを垂らし、窓辺に佇たなずんでいた折しも、かの使者がこれが最後と息を切らした駒に拍車を入れ、城の大手への険しい路を跑足ぱくそくで登って来た。鋭い目の彼女はもう遠くからそれがだれだか分かっており、使者の方もそもそも十字軍の時代にはごく僅かしかいなかった近目ちかめ男では無かったから、これまた伯爵夫人に気づき、書状ふくろう囊を頭上高く掲げ、吉報である徴としてそれを軍旗のように振り回した。そこでハーナウの通信者ジュンテトラフが一役買ったかのように奥方もこの合図をはっきり了解。「そちら見つけたのですか、わらわのいとしい旦那様を」と彼女は近づく男に訊く。「殿はいずこにおられる。わらわはそこへ参り、お額から汗を拭い、わらわの貞節な腕の中で、難儀な旅のお疲れを癒いやして差し上げようものを」。「おめでとうございます、奥方様」と飛脚ひきやくは答える。「背の君様はご息災。てまえはヴェネツィア人の水の都でお目に掛かりました。その地からご主君は、ご自筆で認め、封印なさったこのお手紙をてまえに託して送られました。ご安着をあなた様にお知らせするためになあ」。伯爵夫人は急に急いで手紙の封印を破り、旦那様の筆跡を目の当たりにすると、ほっと生気を取り戻した。高鳴る胸に三度それを押し付け、焦がれる唇で三度それに触れる。それからそれを読み始めると、拡げた羊皮紙やうひしの上にとっと嬉し涙が注がれた。しかし先を読み進むにつれて、涙は次第に出なくなり、やがてはまだ結びまで行かないうちに、涙の泉は枯渴した。

もちろんこの善良な女性にじよは、手紙の内容全部に等しく夢中になったわけでは無い。夫から提案を受けた彼の心の分割協定バルター・トラウターは彼女には賛同してもらえなかった。今のご時勢では分割熱が大いに蔓延。愛の分けっこ、領土の折半は当代の特色だが、愛の共有なんてことは、どの心にもそれでしか開かない固有の鍵があり、幾つもの心にも使える鍵は怪しからぬ泥棒の合鍵と蔑まれた往時の好みでは無かった。この点伯爵夫人が寛容になれなかったのは少なくとも彼女のありのままの愛を雄弁に証拠立てるものだった。「ああ、あの呪わしい十字軍こそこのあらゆる不幸の唯一





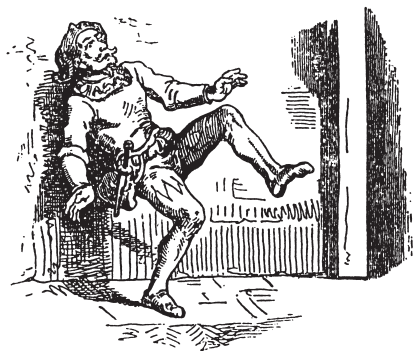
の元凶。わらわは聖なる教会にパンを一塊捧げた。不信の輩がそれを平らげ、返してもらったのはパンのかけらが一片じゃ」と彼女は叫んだもの。しかしながら夜夢で見たものが彼女の心を和らげ、それによって考えがすっかり変わったのである。眠りの中で示された幻影はこうだった。聖墓から戻った二人の巡礼者が城の大手へと通じる曲がりくねった路を登って来て、一夜の宿を求め、夫人は親切にそれを聞き届けた。一人が目深頭巾ネーベルカッペを上げると、なんと、これが旦那様の伯爵だったのだ。彼女は優しく抱き締めて、帰還を大層喜んだ。ちびちゃんたちが入って来ると、伯爵は子どもたちを父親の腕の中に抱擁、愛撫し、すくすく元気に育っていることを嬉しがった。そのうち彼の道連れが旅囊りよのうを開き、そこから黄金の鎖と素晴らしい宝石の装身具を取り出し、それらを子供たちの頸に掛けた。彼らはこのきらきら輝く贈り物をとても気に入った。伯爵夫人はこうした鷹揚おちようさにびっくりし、頭巾で顔が隠れている見知らぬ人に、どなたか、と訊いた。答え。「私は天使ラファエルラファエル、愛する人たちの護り手です。旦那様を異国からそなたの許に連れ戻してあげたのですよ」。巡礼衣は消え失せ、夫人の前に立ったのは空色の長い僧服を纏い、肩に二枚の黄金の翼を生やした壮麗な天使の姿だった。そこで目が覚めた。で、エジプトの占シビュラい女シビュラはいなかったけれども、できるだけ上手に自分なりに夢解きを試してみた。天使ラファエルと王女メレクザーラには多くの似寄りがあふ、と思われたので、後者が前者の姿になって自分の夢に現れたことを疑わなかった。同時にまた夫人は、王女の手助けが無かったら、夫がいつか奴隷の境涯から逃げ出すなんてほとんどできっこなかったであろう、と思案。物を失くした場合、全部自分のものにしておけるのに正直に返し

てくれる人がいれば、この人とそれを折半するのは元の所有者にとって当然なことだから、彼女はためらうことなく、婚姻上の諸権利の半ばを気持ちよく譲渡することを決心、油断無い見張りぶりにたっぷり褒賞を受けた例の港湾警務長殿は、三つ葉の和蘭紫雲英クローヅァー「三人組」の結婚生活を完全なものにする伯爵夫人の夫に対する正式な承諾書を携えて、即刻イタリアへ戻るよう命じられた。

となると残るのは、ローマなる教皇グレゴリウスがかような婚姻上の変則事例に祝福を与え、伯爵のために鶴の一声を発し、婚姻の秘蹟の形式、本質、形態を改鑄する思し召しがあるかどうかの問題。かような次第でヴェネツィアからローマまで巡礼が行なわれた。この地でメレクザーラ姫はコーランを厳かに捨て、教会の懷に抱かれた。聖なる父はこうした宗教上の獲得物に並ならぬ悦びを表明、まるで反キリストの全王国が滅びたか、ローマの御座の前にひれ伏したかのよう。そして洗礼が執り行われ、これを機会に姫がサラセン名を正しき信仰名アンゲーリカアンティに替え、と、聖ペテロ教会で壮麗な感謝頌を挙げさせた。エルンスト伯爵は、教皇の上機嫌が消えないうちに、この優渥な御気色みけしきを自分のもくろみに利用しよう、と思い、時を移さず婚姻上の請願を当局に提出。ところがただちに門前払いを喰らった。聖ペテロの御座の持ち主の良心的なことといったら、三つ葉の和蘭紫雲英型結婚の申し出なんぞ、三神論トリイスマスを唱えるよりもひどい異端邪説と看做すほど高適こうたつだったのである。伯爵がいくら自分のために表向き理由を申し立てて、通常の婚姻の決まりに例外を認めてもらおうとしても、今度だけ大目に見るようご良心にお申し付けになり、特別免除を下しおかれませう、と世の人の亀鑑きかんたる教皇を説得することはできなかつた。そこで伯爵は大いに懊惱、心痛した。しかしながら、彼の老獪な顧問である手早のクルトは、どうすれば主君が、教皇あるいは全キリスト教社会に一言も文句を言わせること無く、美しい新回心者を娶めとることができるか、素晴らしい解決策を考え出していた。ただし、彼はあえてそれを公言しなかつたのである。伯爵の不興を蒙るのでは、と心配だったので。けれ

どもとうとう彼は折を見つけて、怯めず臆さずこう切り出した。曰く。「殿、教皇様の頑固なお頭つむなんざそうお気に病むことはありませんぜ。ある手であの御方をものにできないなら、別の手でやつつけようとなさらなけりや。森に入る路は一本以上あるもんで。聖なる父の良心があんまり繊細なんで、殿が奥様を二人もらうのを許せない、つてなら、殿だつて繊細な良心を持ったつて構わないわけださね。殿は俗人に過ぎませんけど。この良心でのほんな弱点でも覆ってくれる外套を別の側に被かぶせなくっちゃ。考えてもご覧なさいまし。オッテイーリア伯爵夫人とあなた様は禁じきが反対なら外套を別の側に被かぶせなくっちゃ。考えてもご覧なさいまし。オッテイーリア伯爵夫人とあなた様は禁じられてるほど近縁(26)じゃありませんか。そういうこつてすから、かたをつけるのはいとも簡単でござんす。殿が繊細な良心をお持ちなら、わしは殿を勝負に勝たせて差し上げますあ。離婚特許状をお求めなさいましよ。そうすりや、だれも姫との結婚に反対はできません」。伯爵は自分の賢い従士の話にずっと耳を傾けていたが、漸く意味が掴めると、二つの言葉で簡單明瞭に答えた。

「下司げすめ、黙れ」。同時にクルトは扉の外に長長と伸びており、この急速な移動の際失つた何本かの歯を捜し求めた。「ああ、あのすてきな歯の奴」と彼は外からわめいた。「わしが忠実にお仕えしようと思命になつたせいで犠牲になつちまつた」。この歯についての線言くわごんを聞いて、言うまでもないが伯爵はあの夢のことを回想した。彼は中から満腔まんかうの憤りを籠めてどなる。「ああ、私が夢で失くしたあの忌忌しい歯こそ、こうした一切の不幸の源だ」。彼の心は、いとしい奥方に犯した不貞への非難と、魅惑のアンゲリーカに対する禁じられた煩惱との間で、一度動かされると両側から音を立てる鐘のように揺れ動いた。燃



え上がる愛の炎よりも烈しく彼を苦しめ、責め苛むのは、王女との約束を守り、彼女と華燭の典を挙げることできかないのを目の当たりにしている憤懣かんまゑという腫物しゅぶつ。こうした数数の不快のせいでそうこうするうち彼が行き着いたのが、心の分割は別段願つても無い事柄とは申せず、こういう状況下にあつては二人の愛する女性に挟まれた男は、二つの干し草の束の間の驢馬のボードアンボドアンとほとんど同じ気持ちになるものだ、との真つ当な経験則だつた。

こういう憂鬱な状態におかれた彼はすっかり朗らかな様子を見せなくなり、陰陰滅滅とした日には周囲を鬱陶うとうとうしくしてしまふ、偏屈なあまり胸が張り裂けそうな厭世家をつくり。アンゲリーカ姫は、恋人の風貌ふうぼうが昨日、一昨日のようでなくなつたのに気づき、心底悲しくなり、本人自身で特免状交渉をやればもつとまう行くかも知れない、とあえて試みに踏み切る決心を固めた。彼女は、祖国の慣わしに従い顔を面紗ヴェールで深く隠し、良心的なグレゴリウスに目通りを要請した。ローマの人間で彼女の容姿を目にした者は、洗礼の聖務を執り行つた司祭のヨハネスを除いては一人もいなかつた。教皇は新たに誕生した教会の娘を応接するに当たつてあらゆるしかるべき敬意を払い、接吻くちづけのため差し出したのは香水を染ませた上履じゆんきではなく、右手の手の平パルメだつた。麗しい異国の女性にょしやうは、祝福の御手みでに接吻するためいくらか面紗ヴェールを揚げ、唇を開くと、心打たれる口説くせつで願いを言上。しかしこうした甘い言葉も、通過するのが教皇の耳となると、教会の首長の内的器官の中ではなんら意味を成さなかつたようだ。なぜなら、心臓へと向かわないで、もう一方の耳から外へ出てしまつたからである。教皇グレゴリウスは魅惑的な請願者を長いこと諄諄じゆんじゆんと論し、それから、愛する男ひとと合一ごいつしたいという相手の望みを、典礼に抵触せずに叶えてやるある種の便法を発見した、と思つた。斡旋したのは魂の花婿「イエス・キリスト」(20)。サラセンの面紗ヴェールを修道院の面紗ヴェールとちよいと取り替える決心をすればよい、というわけ。かかる提案を受けた王女は突然ひどい面紗恐怖症に襲われたので、たちどころに自分のをかなくり捨てるなり、絶望しきつて教皇の足台の前に叩き付けた。そして両手を上げ、目を涙で一杯にし、自分の心に

無体を働かないよう、他に嫁ぐよう無理強いしないよう、聖なる上履きに懸けて教皇陛下に哀願した。

目の当たりにした姫の美貌はその口よりも雄弁で、陪席者一同を驚倒させ、天使のような目から珠となって流れ出す涙は燃える石油の雫のように聖なる父の胸に滴り、内に秘められていた俗界の火口の僅かな残りに点火し、その心を熱して請願者に対する愛顧の情を生じさせた。「お立ちなされ、愛する娘よ」と彼は言った。「そして泣くでない。天で決められたことは、地においてもそなたに成就するはず。三日経てば、聖なる教会へのそなたの最初の願いがお慈悲深い聖母様に嘉納せられるやいなや、知らせて進ぜよう」。それからグレゴリウスは全てのローマの決疑論の徒カズイストの会議を招集、銘銘に小さなパンの塊を一つと一壇の葡萄酒を配らせ、この義いかにや、が全員一致の結論に達するまで、何人もそこから外へ出てはならぬ、と警告して、かの円形教会堂に閉じ込めた。葡萄酒とパンが保っている間は、諸聖人方が皆さんこの教会にいあわせたとしたって、まずまあこれほど喧喧囂囂けんけんしょうしょうと言いつてはなさらなかったであろう激しい論争が続いた。嵐のような南風が吹きすさぶ時のアドリア海みたいに、賛否両論の大浪がどうつと寄せては返す。しかし、胃袋が集会の発言者になり始めると、ただちにご一同はその主張に耳を貸した。幸いなことにこやつ、伯爵の肩を持った。伯爵はあらかじめ大饗宴の準備をしておいたのでね。教皇の封印が教会の扉から解かれたら、決疑論に携わった坊様方全員をおもてなしする、つてわけで。特免状は合法的な最善の形式で交付された。手数料と引き換えに。麗しのアンジェリカが、そりゃまあ喜んでではあるが、エジプトから持参した彼女の宝玉類をたっぷり一掴みこれに当てた。教皇グレゴリウスはこの高貴な男女に祝福を授け、相思相愛の二人に、結婚許可を申し渡した。彼らは伯爵の領地に赴き、そこで婚礼を執り行うため、即刻教皇領パトリモニウム・ペトリを後にした。

アルプスを越えて祖国の大気を呼吸すると、伯爵はほっと心安らぎ、晴れやかな気分になった。彼は愛馬のナポリ産の駒にひらりとまたがり、早駆けを始める。お供は意気揚揚と先導する石頭の乗馬兵だけ。姫君は手早のクルトに



護衛させて、ほんの数日遅れの旅程でゆっくり後から来るよう配慮。

遙か遠くにグライヒェンの三つの城が見えると、伯爵の心臓はときめいた。彼は、善良なオッティリア夫人を不意打ちしてびっくりさせよう、と思つたのだが、お帰りの噂は驚の翼に乗って先行。奥方は若君と姫御前たちを連れてお迎えに出、城から野道をいくらか行つたところ、とある楽しい草地で旦那様と落ち合った。そこはこの悦ばしい邂逅のゆかりで今日に至るまで歎ひの谷と呼ばれている。出会いは双方いとも優しく情細やかなものだった。分割協定なんて一度も念頭に浮かんだことが無かつたかのよう。なにしろオッティリア夫人は、妻の意思は夫の意思に従うべきである、との結婚の掟に注釈抜きで従う温順な妻の真正正銘の典型だったからである。確かに時折心中に小さな騷擾が起こりはしたが、彼女は慌てて警鐘を鳴らしたりしないで、戸も窓も閉ざしてしまつたので、死すべき定めの人の子の目が覗き込

んで、内部で何が進行しているのか見届けることはできなかった。それから彼女は激発した感情を理性の法廷に喚問、聡明という牢屋に閉じ込め、自発的に自らに贖罪を課したのである。

彼女は、その心が婚姻の地平線に輝くことになつた第二の太陽に文句を言うことを容赦できなかった。これを償うために、彼女はひそかに丈夫な樅の柱で三人用寝台を作らせ、希望の色で塗り、教会堂の穹窿形をした丸い天蓋をぶつくり頬つべが膨らんだ有翼天使の頭で飾つた。鳥の綿毛を詰めた褥の上に豪華に上げられた絹の敷布団には精巧



な刺繍で天使ラファエルの姿が描かれていた。これは夫人が夢で見た通り、巡礼衣を纏って伯爵の傍に立っている。先回りして示された、結婚生活についての妻の厚意を雄弁に物語るこの証あかしに、伯爵は心底感動。こうした準備を目の当たりにした時、彼はひしと奥方の頸を抱き締め、息を切らせて接吻、婚姻の喜びを完璧なものにした。「素晴らしい妻よ」と彼はうっとりして叫んだ。「この愛の神殿はそなたを何千ものそなたの属する性「女性」の上に高め、誉れの記念碑としてそなたの名を後世に告げ知らせ、この寝台の一部なりと残っている限り、夫たちはその伴侶らに

世の鑑かがみと言いうべきそなたの厚情を褒め讃たためることだろう」。何日も経たぬうちにアンゲリーカ姫もつつがなく到着、さながら王の花嫁のごとく、宮廷挙げての豪華な祝祭で伯爵に歓待された。オッティリア夫人は心も腕も拡げて彼女を出迎え、あらゆる権利を頒かち合う親友として居城に導き入れた。かれこれするうち、どちつかずの花婿はエアフルト（註）の司教補の許に赴き、婚礼の司式を依頼した。この敬虔な高位聖職者がかかる異端の申し出に少なからず仰天し、さような不祥事を当教会管区内で行なうことなど認めなかった。しかしエルンスト伯爵がかの漁夫の指環（註）の印璽いんじが捺おされた教皇の特免状を原本で提出すると、これは彼をすっかり黙らせた。しかしそのもの思わしげな容儀、しきりに頭を振る様子から、キリストを信じ奉る教会という小舟の梶取かじとりは、このように便宜を図ることによって、わざわざ船底に穴を穿うつたのであって、ために浸水、難破に及ぶことを危惧しなければならぬ、と考えていることは明らかだった。

華燭の典は善美を尽くして執り行われ、オッティリア夫人は花嫁の母の役を

代行、豊かに嫁入り支度を調えた。テューリンゲンの伯爵方と騎士輩ばうは悉く至るところから参集、この異例な婚儀に肩入れた。伯爵が美しい花嫁を祭壇に導く前に、彼女は、特免状入手に掛かった費用を差し引いた財宝ありったけを持参金として彼に奉呈、彼はそのお返しにエーレンシュタイン(18)の収入を終身年金として彼女に贈った。純潔な銀梅花ミルテが、婚礼の日、王スルタンの息女の頭飾りであり、高貴な生まれの徴の黄金の冠のぐるりに巻かれ、これが一生涯彼女に付き物となった。そのため彼女は領民から女王としか呼ばれず、廷臣たちはさながら女王のように彼女に仕え、畏敬したのである。

三人用寝台が、二人の愛妻の夫をその従者ともどもとだつて収容できるその柔軟な船腹を開いた時、グライヒェン伯爵エルンストが感じた恍惚は、ロンドンなるグレイアム博士の天上界の寝台で休むという高価な歓楽を五十ギニーで買った者にしか、夢想することはできない。懊悩に満ちた数夜の夜も今は昔、再び見つかった旦那様の脇でオッテリーア伯爵夫人はすぐ目を閉じてつつましかな眠りに入り、彼があえかなアンゲーリカとともに心行くまでムシルーミーの脚韻を探す無制限の自由を許した。婚礼の宴楽は七日間続き、伯爵は、これで大カイロの格子の嵌まった塔の中で過ごさなければならなかったあの憂愁の七年が十分償われた、と告白した。これは二人の貞節な妻に対する慇懃いんげんなお世辞ではなさそうだ。ただ一日の楽しい日は悲惨な一年の苦い恨み辛みくるしみを甘くしてくれる、という経験則がもし正しいとすれば。

伯爵に次いでかほど有頂天になっていたのは彼の忠義な従士、手早のクルトに他ならない。この御仁、仕込みたっぷりの厨房と酒蔵で愉快にやらかし、廷臣たちの間をせつせと廻る欲びの大杯をぐいっと飲み干し、それから胃袋が満足するやいなや、冒険譚を開陳し始めると、食卓中が耳を敬てるのだった。しかし伯爵家の家政が日常の儉しい軌道に立ち戻ると、彼はお暇いじやまを頂戴して、オールドウルフ(22)へ旅し、そこに女房殿を訪ね、帰ったよ、と思ひ掛けなく



喜ばせてやることにした。長い留守の間極めて良心的に貞節を守っていた彼は、こうした模範的品行に対する正当な報酬を、暖め直しの愛の享樂という形で受け取るう、と思ったわけ。想像力は彼の目の前に淑徳の誉れ高きレベッカの姿をこの上なく活き活きとした絵の具で描き出し、彼女を取り巻いている市壁に近づけば近づくほど、この色調は明るくなった。婚礼の日彼をうっとりさせたあらゆる魅惑を身に付けた彼女、彼が無事帰還したので感極まって動物精氣<sup>(2)</sup>を圧倒され、口も利けず耳も聞こえず、彼の腕にくずおれる彼女で頭が一杯。

こうしたぐるぐる回る美しい走馬灯を眺めていたので、クルトは故郷の町の市門に到着したが、それと気づいたのは、警衛の市民兵が遮断棒を下ろし、この余所者に、おぬしは何者か、この町にいかなる用事がある、して、やって来たのは平和な意図でか、と問い質した時。手早のクルトはそのどれにも雄弁に返答、さてそれから、駒の蹄の音が自分の到来を早まって伝えないう、ゆったり速歩で通りを上がって行った。馬の手綱を門の叩き金の環<sup>かみ</sup>に結ぶと、物音を立てずに自分の住まいの中庭に忍び入る。そこでまず嬉しそうに吠えて迎えてくれたのは鎖に繋がれた昔馴染みの飼犬。けれども、グライヒェンのお城にある寝台の天蓋の飾りとなっている天使たちみたいに丸丸とした頬の二人の元気な男の子が、玄関の間で飛び回っているのを目にした時には、なんともかともいぶかしい思い。まだとっくりこのことを思索する間もないうちに、この家の主婦が、はて、だれが来たのか見届けよう、とお淑やかに扉から出て来た。ああ、空想と実物のなんたる隔たり。時の齒は七年のうちに彼女の魅力の数を無慈悲に食い荒らしていた。が、人相の特色は、専門家の目だと元の刻印がまだまあ輝き褪<sup>あ</sup>せた貨幣から読み取れるほどには、保存されていた。再会の喜びが容姿の瑕疵<sup>かし</sup>を簡単に覆い隠してしまい、自分の不在を嘆き悲しんだので愛する妻の滑らかな顔をこんなに皺だらけにしてしまったんだ、と考えて善良な連れ合いはなんとも遣る瀬無い気分となり、相手を熱烈に抱き締めると、こう言った。「やあれ嬉しや、いとしい女房。心配事は何もかも忘れてくれ。ほうれ、わしはまだ生きて

るのだ。またおまえのものだて」。

温雅なレベッカはこうした情愛へのお返しとして相手のあばらをたたかいたたかに突いたので、手早のクルトはそのため壁際まできりきり舞い。それから彼女は、まるで無理無体に貞操を辱められたかのように大きな悲鳴を挙げ、下男下女たちを呼び立て、罵り、毒づき、冥界の復讐の女神のようにならふまふた。しかしながら優しい亭主はかかる手ひどい応対をこう解釈。その理由は、あつかましく歓迎の接吻をして、慎み深い妻の繊細さを傷つけたせい、と思つたのである。つまり、相手に自分が分からなかつた、と考え、声を限りにこの誤解らしき事態を正そうとした。しかし、何と言つても馬の耳に念仏で、すぐと知れたのは、思い違いなんぞありやしない、つてこと。「このろくでなしのうすらとんかち」と彼女は金切り声を張り上げた。「七年間も広い世間をのたくり回つて、余所の女どもといちやつきやがつてからに、あたしの操正しい寢床にまた潜り込もうつてのかい。あたしたちは離婚したんだよ。あたしはね、三つの教会の扉に公にあんたへの召喚状を貼り出してもらつたんだ。そして、あんたが命令に背いて出頭しなかつた廉により、完全に死んだ、つて申し渡しがあつたんだ。寡婦の椅子を動かしてもいい、つてお許しをその筋からもらつてさ、市長のヴィプレヒトと結婚したんだよ。あたしたちが夫婦になつて一緒に暮らし始めてからもう六年目になる。この二人の男の子はあたしらの結婚のお恵みさね。あんたがとつとずらからなきや、市参事会に頼んで足枷を嵌めて杭に括りつけ、晒し台に載つけて、悪い根性で女房をうちやるようなこういうとんちき野郎の見せしめにしてくれる」。手早のクルトにとつて元のいとしい伴侶のこうした歓迎ぶりは心臓への匕首の刺しで、胆汁「激怒」が牡羊のように血に流れ込む。「おお、この不貞な売女めが」と彼は応じて「きさまときさまの取替え子どもの頸を即刻捻つてやつてもいいんだぞ。それじゃきさま、きさまの『はい』つて返辞、それから、死んでもわしと別れない、と二人しつぽりの新床の中で何度も繰り返した誓いを思い出せ。きさま、こつちが頼みもしないのに、約束したんじ

やなかったか。きさまの魂が口からすぐに天国に上がって、わしが浄罪火の中で乾涸ひからびるようなことになったら、天国の戸口で引っ返し、わしのとこへ降りて来て、わしが煉獄の炎から救済されるまで、涼しい風を煽いで送ってあげるわ、なんて抜かしやがって。その嘘吐きの舌が真つ黒けになりますように。この絞首台の腐れ肉「くそあまつちよ」。

オールドウルフの筆頭ブリマ・ドンナ夫人は、怒り狂った亭主の罵詈はりぎんぼう謔にいくら応酬したって黒くならない達者な舌を授かってはいた。けれども、さすがこれ以上相手と論戦をやらかし続けるのはうまくないと見て取ったレベツカ奥様、召使たちに向かつて意味深長な合図。すると下男下女どもがどっと手早のクルトに襲い掛かり、ブレウイ・マヌタチドコロニ戸外へおっほり出す。こうした家庭裁判権の行使に当たり、彼女自身箒を振るって、離縁された連れ合いを戸口から煽ぎ飛ばしたのである。車裂きの刑②に掛けられたようになっていたらくで彼は再び馬にまたがり、ほんの数分前あんなに慎重に上がって来た通りを、大急ぎで下った。

帰途、血が冷え始めると、彼は損得を計算、得をしたんだ、と満足した。だって、失くしたのは結局、死後靈魂の身となった時、団扇で煽いでもらえるという慰めだけだ、と分かったからで。彼は二度とオールドウルフに足を向けることなく、生涯グライヒェン伯爵の城に留まり、二人の貴婦人が、悶着も起こさず焼き餅も焼かず、それどころか一つの寝台の天蓋の下で、一人の夫への愛を頰かち合うというまことにもって信じられないできごこの目撃者となった。美しいサラセン女性は子どもが得られぬままだっ



た。しかしながら親友の子どもたちを我が子として慈しみ、<sup>しづけ</sup> 寐の苦勞を頰かち合った。この幸福な結婚の三つ葉の和蘭紫雲英が人生の秋になって萎れることになる、一番先が彼女、オッテयीリア伯爵夫人がそれに続いた。そしてこうなると、城中でもがらんとした寝台の中でも、広過ぎ寂し過ぎる、と感じるようになった憂愁の寡夫も、ほんの数箇月後しんがりを務めた。生前は伯爵家の二人の夫人によって定められた夫婦生活の掟は、死後も改変を蒙ることは無かった。三人とも皆エアフルトの聖ペテロ教会の祭壇の前なる同じ奥津城に憩うている。かの地の山の上には彼らの墓碑がまだ見られるが、これはこの高貴な寝台仲間の姿を生きている時と同様刻んだ一基の石である。右側には賞賛すべき叡智の象徴として手に一枚の鏡を持つオッテयीリア伯爵夫人、左側には王冠で飾られたサラセン女性、そして中央にはその紋章——獅子に似た豹——付き盾に凭れた伯爵である(16)。かの名高い三人用寝台はまだ古城のいわゆる殿輩の部屋に遺品として保管されており、その一片の木切れを「鯨の鬚や鋼などといった」張り骨の代わりに締め付け胴着に入れておくと、ご婦人方の心に起きる嫉妬の衝動を悉く消滅させる効能があるそう。

## 原注

- (1) ガリア「ゴール＝フランス」の海の英雄 グラス伯爵 Graf von Grasse<sup>(註)</sup>。
- (2) オデュッセウス Odysseus。「ムゼーウスはuの代わりにラテン語流にわざわざで綴っている」こんな具合に子どもを正しい名で呼び、ギリシアの名をローマ風に訛って変えてこにしないのが当世の慣わしである。
- (3) 女性論理学 もっと荒っぽい物の言い方をすれば、女の理屈。
- (4) 天女たち die Hours。敬虔なイスラム教徒の男性にあの世でかすずいてくれる女性たち。
- (5) 異端の輩 Heide。グライヒエン伯爵の時代には、全ての非キリスト教徒、従ってマホメット教徒をも、異端の輩と呼ぶのが習いだった。
- (6) 後者は……暴露する「流行の雑誌」一七八六年六月。
- (7) 火繩喇叭 Zochzinken。風信子の本来の古いドイツ風の呼び名。

- (8) 海昼顔 うみひるがほ Meerwinde. ロンウォールウルス・マリヌス Convolutus marinus.  
 (9) カラフ Kahf 花から水が取れる灌木。この水はこちらの桜しのまや科木しのまの花の水に相応し、家の手入れにしばしば使用される。  
 (10) バオバブ Bahobab エジプト人が非常に好む果実。  
 (11) ムシエルン、シヤームベッケン、シエオメオン Muschern, Schambecken, Scheomneonen. いずれもナイル河のさまざまな舟の種類。  
 (12) ポスタンジ Bostangi 園丁長。  
 (13) ムシルーミー Muschiumi. ヒュアキントウス・ムスカリ Erycinthus Muscari. (訳注162で「肉豆蔻風信子」と表記)。  
 (14) 恋するアラビアの男は……愛の報酬ほどの意味となる。パレステイナへのハッセルクヴィストの旅行。  
 (15) 窮屈な葉草袋 袋入りの旅という発明は十字軍の時代に何回も使われた。マイセンのデイトリヒ困窮方伯ラントグーフはこのように身を躰かぶしてパレステイナから彼の封土に帰還し、豊かなフライベルクの鉱山に思し召しがあつた皇帝ハインリヒ六世の隠密の追跡から逃れた。  
 (16) 右側には……伯爵である。この墓碑の銅版画はフォン・ファルケンシュタインの『ノルドガウイエーンシプス選集』analectis nordgavensibusに入っている。

訳注

- (1) メレクザーラ Melechhara. ムゼーウスはこのエジプトスルクの麗しい姫君の名は、アラビア語で「世界の花」という意味である、と考えて用いているようだ。なるほど「花」はアラビア語で「ザール」なので、それにヨーロッパ語圏での女性語尾「ム」を付けての「ザーラ」はまあよろしかろう。しかし「世界」は「アーラム」あるいは「ドゥニヤール」である。そして「メレク」の音に近く、意味からしても相応しいと思われる「マレク」は「天使」(≡マライカ)の意。「メレクザーラ」はどうやら「天使の花」となるうか。  
 (2) グレゴリウス九世 Gregor der Neunte. 在位一二二七—一二四一年。一一四五年頃生、一二四一年没。俗名セグニ伯ウゴリノ。神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世の激烈な敵。一二二七年と一二三九年の両度に亘り破門を宣告した。もつとも、隠遁・清貧・自己否定に身を捧げたアッシジの聖フランチェスコ(一一八二—一二二六。フランシスコ修道会の創立者)の友たり後援者たる一面もあった。



- (3) ドイツの鷲 ドイツの紋章は鷲。
- (4) 風切羽 鳥の翼の下にある長大な羽で、これを切られると飛べなくなる。
- (5) ヴァテイクン宮殿 Vatikan. ローマ教皇の宮殿。教皇庁。
- (6) 祭服 二威儀 ツイカワツ ツイカワツ in pontificalibus. ラテン語。「愛の信実」などにも出る。
- (7) 皇帝シユヴァーベンラントのフリードリヒ Kaiser Friedrich von Schwabenland. ドイツ王 (在位一二二二—一二五〇)、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世 (在位一二三〇—一二五〇)。教会との闘争で結局敗れ去った不幸な皇帝である。シユヴァーベン公でホーエンシュタウフェン朝の系統。フリードリヒ赤髭王・帝 (バルバロッサ) の息子の皇帝ハインリヒ六世とナポリ王国のコンスタンツァの間に一一九四年アンコナ近郊で生まれた。ドイツ諸侯によりシチリア王でもあった父の後継者に選ばれ、その死 (一一九七) 後シチリアを相続。幼い彼は教皇イノケンティウス三世 (在位一一九八—一二二六) の後見の下に暗い子ども時代を過ごした。ザクセン公からドイツ王 (在位一一九八—一二二八)、神聖ローマ帝国皇帝 (在位一二〇九—一二二八) になっていったオットー四世が早くも教皇と不和になる (一二一〇年破門) と、教皇は一二一〇年若いフリードリヒをドイツ王に選挙しようドイツ諸侯に提案した。フリードリヒは一二二二年ドイツへ赴き、ドイツ諸侯の間に支持を獲得。オットーを追い落とし、一二二五年アーヘンでドイツ王として戴冠、一二二〇年ローマで神聖ローマ帝国皇帝として戴冠した。実は新たな十字軍 (第五回) 遠征は一二二一年に立案され、フリードリヒはこれに参戦することを誓っていたのだが、帰還したシチリアでの王権回復、ロンバルディア諸都市の蜂起制圧に時間を取られた。一二二七年にも彼は病気のため諦めざるを得なかった。グレゴリウスに破門され、漸く一二二八—一二二九年誓約を実行し、一二二九年三月エルサレムで自らエルサレム王国国王として戴冠。帰還後、ドイツでも対抗ドイツ王の選挙を画策していた教皇に奪われたナポリを奪還、一二三〇年グレゴリウスに強いて和約を結んだ。その後ロンバルディア都市同盟が再編され、フリードリヒ自身の長男ハインリヒと手を組み、一二三五年公然と叛旗を翻した。手勢も持たずドイツに現れたフリードリヒはそこで支持を受け、逆襲に転じる。ハインリヒは屈服せざるを得なくなった。以後一二四五年教皇イノケンティウス四世 (在位一二四三—一二四四) の主導の下に開かれたリヨンの公会議で破門されるまで、フリードリヒはその支配権を輝かしく確立した。次男コンラートはローマ王 (父の没後四年間ドイツ王として在位)、庶子エンツィオはサルデニア王 (一二三九年即位。後一二四九年ポローニア軍に捕らえられる) になっている。しかし教会の画策は結局成功、フリードリヒは征服されこそしなかったが、勝利の見込みもなく、一二五〇年没する。
- フリードリヒはアラビア語を完全に話し、読み、書くことができ、イスラム文明を尊重、西洋の野蛮さとローマ教皇に対して軽侮の念を抱いていた。当時アラブの先進的学問の中心の一つだったシチリアで多くの歳月を送ったからである。十字軍というこの不毛な宗教戦争に全く共感していなかったのは無理も無い。
- (8) ナポリ Neapel. 南イタリアの地中海側にあるこのギリシアの植民都市起源の古都は、この物語の時代、中部イタリアの教皇領と接するシ

チリア王国の首都だった。なお、北部イタリアは伝統的に神聖ローマ帝国領だった。

(9) 荨麻 [Zwerg] 荨麻科の多年生草本。葉は粗い鋸歯を持ち、茎は四稜で叢生。葉、茎ともに細かい棘があり、中に刺激性の蟻酸を含んでいるので、これに触れると痛みを感じる。茎皮から纖維を採取、糸や織物の原料とする。またスープなどの食材にもなる。

(10) サン・バルテルミーの夜 一五七二年八月二十四日(聖バルトロメウスの祝日)の夜、(新教徒である)ナヴァール王アンリ(後のアンリ四世、カトリック)とマルグリット・ド・ヴァロア(国王の妹)の婚礼(八月十八日挙式)を機縁にパリに参集していた新教徒は、国王シャルル九世とその母カトリクス・ド・メデイシス(カテリーナ・デ・メデイチ)の命令で虐殺された。パリではこの時三千人から四千人が、地方では三万人以上がこの陰謀の犠牲になった。二十二日に新教徒陣営の大立者コリニ提督が暗殺者に狙撃されて負傷、王家に対する新教徒側の反感が高まっていたことは確かだが、この虐殺はそれへの対抗措置としても容認できるものではない。

(11) アフリカ風 アフリカから地中海に向けて吹く熱風。

(12) エルサレムの娘たちがバビロンの柳の木に「堅琴を」掛け、座って泣いた 詩篇一三七篇にバビロンの虜囚とされたユダヤの娘たちの嘆きがある。「われらバビロンの河のほとりにすわり、シオンを思ひ出でて涙をながしぬ。われらそのあたりの柳にわが琴をかけたなり」。

(13) テューリンゲン方伯夫人聖女エリーザベト Elisabeth die Heilige, vermale Landgräfin in Thüringen 一〇〇七年ハンガリア王アンドラーシユ二世とその最初の妃ゲルトルト・フォン・アンデクスの息女としてハンガリア領のシヤロシユ・バタク城(ブレスブルク(現スロヴァキアの首都ブラティスラヴァ)にあった。スロヴァキアは一千年もの間ハンガリア領だった)に生まれ、四歳の折十二歳のテューリンゲン方伯ヘルマンの子息ルートヴィヒと婚約、アイゼナツハ近郊のヴァルトブルク城で一緒に教育された。彼女はやんちゃな、輝くように明るい児で、そのハンガリア気質は遊び仲間を熱狂させ、うっとりするような愛らしさは宮廷人を魅了した。しかし既に幼少時から運命の衝撃に次次に見舞われる。一二年母が殺害され、一五年この余所の土地で父親のごとき保護者役であった方伯ヘルマンが死ぬ。このため彼女は次第に眞摯になった。城での奢侈と浪費、城下の民衆の間にはびこっている貧困。こうした富と悲惨との対比への考察は生涯エリーザベトの念頭から離れなかつた。愛する夫ルートヴィヒがオトラントで熱病のため没すると、更に不幸に襲われた。ルートヴィヒの弟ハインリヒが方伯領を継ぐと、これまで隠されていた一部の者たちのエリーザベトへの反感が一気に爆発、敵党派はこの寄る辺無い女性から寡婦資産を奪い、彼女を冬の最中子どもたちもろとも城から追い出した。そうこうするうち彼女の叔父、バンベルクの司教エグベルトがその窮境を知って引き取り、敵どもから彼女を救うために、再縁を勧める。しかし、エリーザベトは修道尼となることを希望。彼女の懺悔聴聞僧マルブルクのコンラートとともにマルブルクへ赴き、そこで第三教団の尼僧となった。コンラートは苛酷な性格で、彼女に子どもたちや親戚と会うことも禁じた。エリーザベトは一二三一年マルブルクで二十四歳の生涯を終わるが、早くも死後四年で教皇レゴリウス九世は彼女を列聖した。マルブルクにはエリーザベト教会があり、そこには聖エリーザベトの遺骨を納めた有名な黄金の聖遺骨櫃がある。最も偉大なドイツの聖人の一人。「泉の水の精」訳注参照。

- (14) グライヒェン伯爵夫人オッティリア Ottilia vernähle Gräfin von Gleichen 伝未詳。伯爵同様、伯爵夫人の名前もこの伝承では入れ替えが利く。
- (15) ルートヴィヒ方伯 Landgraf Ludwig. テューリンゲン方伯ルートヴィヒ四世(一二〇〇—一二二七)。エリーザベトとは幼少の頃から許婚同士で同じ城で育ち、結婚して六年間で三人の子どもを授かった。政略結婚ではあったが、同時に恋愛結婚でもあったこの二人の幸福な生活はヴァルトブルク城で送られた。ルートヴィヒ方伯は一二二七年、イタリアのアブリアにおける十字軍の集合に加わるため出征したが、オトラントで急死。ドイツの一部では聖方伯の添え名で呼ばれた。
- (16) 足痛風シュツツに苦しんでいるのめれば、結石で我慢できぬ、と言う者 血液中に尿酸が異常に多くなり、それが尿酸結晶となって関節などに沈着すると、激しい痛みを惹き起こす。これが足指、足首に起こる場合が足痛風。尿に溶けていた塩類が砂状、石状になったものが結石で、尿路、すなわち腎臓、膀胱、尿管にさまざまな障害を惹き起こす。血尿、鈍痛、疝痛が起ることが多い。どちらでも肉食によって生じ易い病気である。イエズス会宣教師ルイス・フロイス(一五三二—一五九七) は日欧を対比した箇条書きの中で「われわれの間では癩癩、結石、足痛風およびペストがおこり易い。すべてこの種の病気は日本では稀である」(岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』第九章1、岩波文庫)と記している。
- (17) グライヒェン伯爵エルンスト Graf Ernst von Gleichen. グライヒェン伯爵家はテューリンゲンの豪族の家系。ゴータとアルンシュタットの間にある三つの、互いに近接している城山、ヴァンタースレーバー(あるいはヴァンタースレーバー)・グライヒェ、その南のミュールベルク、ミュールベルクの東のヴァクセンブルクを三グライヒェン城ドレイグライヒェン Die drei Gleichen と称するが、その一番目の城山に因んで名づけられた。この城がおそらく一〇八八年にその名が挙がっているグライヒェン城であり、トンナ伯爵家の分家がこの城主となつて、グライヒェン伯爵と名乗つたのである。一五三九年には既に完成していた二人の妻を持った伯爵の伝説で有名になった。この伝説はエアフルトの大聖堂にある墓石と結び付いている。もっとも、史実のどの伯爵が「重婚」したのか、伝説は示していない。グライヒェン伯爵エルンストは三人いる。一世は一五二二年、二世は一七〇年に没している。三世は二世の甥にして後継者であり、一二四六年以降グライヒェンシュタイン伯爵家と言われるようになった分家をも創始した。在世の時期を考えると、ムゼーウスはこの人を考えているようだ。なお、エルンストでなくルートヴィヒとする伝説もある。
- (18) 情念学的「情念学」Pathognomie とは、人相学の、情念の作用を扱う分野のこと。「愛の信実」訳注参照。
- (19) 最近ドイツの戦士たちが遠い西の国に十字軍として出掛けた アメリカ独立戦争の際、陸兵不足に悩む英国にハノーファー王国、ヘッセン＝ダルムシュタット方伯国(のちのヘッセン侯国)などがその徴募兵を傭兵として売り、多くのドイツ人兵士が英国海外派遣軍としてアメリカ植民地で大陸会議の軍隊と戦つたことを指す。訳注154、「リプツァ」訳注参照。
- (20) 罪コルプス・デリクティ corpus delicti. ラテン語。法律用語。犯行を証明する物件。殺人事件の場合は死体、あるいはその一部。「リユーベツァールの物語」にも出る。



- (21) 丸パン *Semmel* プレートヒエン。丸くて皮の堅い小型の白パン。
- (22) 直腸詰め腸詰 *Schlackwurst* 牛肉、豚肉、それに脂身を加えて直腸に詰めたソーセージ。
- (23) 指尺 *Index* 親指と小指とを張った長さ。約二〇—二五センチ。
- (24) ヒュドウルントウム *Hidumt* 現在のオトラント。イタリア半島最東部オトラント岬の北方五キロにある町。ギリシア人によって建設された。ヒュドウルントウムはラテン語名。大司教座が置かれ、司教座聖堂（一〇八八年建立）がある。また、サン・ピエトロ教会は八世紀のビザンティウム様式。往時のイタリアからコンスタンティノポリスへの旅の出発点。この物語の背景の時代、コンスタンティノポリスを首都とする東ローマ帝国は第四回十字軍に占領（一二〇四年）され、ラテン帝国（一二〇四—一二六二）となっていた。従ってオトラントやその近くのプリンデイジは十字軍がバレスティナに至る経由地の一つだった。
- (25) サラセン人 *Sarazenen*。語源は未詳。ローマ時代の歴史家で、アンテリオキア（シリア）出身のギリシア人アミアヌス・マルケリヌス（三三〇頃—四〇〇）が幸福なアラビア（アラビア半島南東部）の北部に居住する遊牧民族をこう称している。この名称は中世初期キリスト教徒の著作家たちにより誤まって全てのアラビア人に対して用いられ、後にはイスラム教徒全体をも指すようになった。
- (26) プトレマイオス *Ptolemais*。バレスティナの要衝で古代からの港湾都市アッカ *Akka*（アクレ *Akre*、アッコ *Akko*、アッコン *Akkon*）はプトレマイオス王朝支配下ではプトレマイオスと呼ばれた。六三八年頃イスラム教徒のアラビア人に、一一〇四年エルサレム王国（第一回十字軍建国）第二代国王ボードアン一世に占領される。一二三七年アイユーブ朝の王サラーフ・アッディーン（サラディン）の略取するところとなる。一一九一年以降サン・ジャン・ダクル *Saint Jean d'Acre* として再び十字軍国家の首都となり、これは一二九一年奴隸兵朝の王エル・アシュラーフ・アリアルに征服されるまで続く。
- (27) 夢魔 *Alp*、「リブツァ」訳注参照。
- (28) 英雄アケレウス *Held Achilles*。半神の英雄。武勇・脚力ともにギリシア軍随一。叙事詩『イリアス』の冒頭、彼が捕虜とした乙女クリュゼイス（トロヤのアポロンの神官クリュゼスの娘）をギリシア軍の総帥アガメムノンが奪ったことから、彼ら二人の間に不和が始まる。「遊女」うんぬんはこれを示唆しているのだろうか。
- (29) 鬼火 *Irlicht*。ドイツ語圏の妖怪変化のうちでは最も小物。夜出没する青い小さな火で、財宝が埋められている場所に現れたり、沼地や森を彷徨う人を惑わしたりする。
- (30) 第三夜警時。夏季には午前零時から二時。夜警時とは日没から夜明けまでを四等分した軍隊用語。ローマ時代から用いられている。
- (31) 魔王の軍勢 *das wilde Heer*。ドイツの冬、嵐の夜天空に轟轟とざわめきが渡って行く時、人人は魔王、あるいは、荒れ狂う猟師 *der wilde Jäger* に率いられた死霊の群が通過する、と信じた。これを「魔王の軍勢」とか「荒れ狂う猟師」とか称する。

- (32) ヒツボグリフ Hippogriff. 下半身はライオン、有翼で、上半身は鷲の形をした空想上の動物。「三姉妹物語」訳注参照。
- (33) フリースラント産 Friesländer. フリースラントはドイツ北東部からオランダ北西部にかけてのフリース人の住んだ地方。この地方はオルデンブルク種、ハノーファー種など、重くて、馬格の長大な馬を産する。重い甲冑に身を固め、盾、槍、剣で武装した中世ヨーロッパの騎士を乗せ、更に馬鎧にも耐えるためにはこうした馬でなければならなかった。軽武装のアラビヤ人騎兵を乗せるアラブ種の馬はこれに較べると砂漠の陽炎ひかりのようだった、とか。
- (34) 騎士聖ゲオルギウス der Ritter St. Georg. 十四救難聖者の一人で、キリスト教古代、中世を通じ、全ての殉教者のうちで最も崇敬された。彼はどの聖画でも馬上豊かに龍を突き殺している誇り高い騎士として描かれている。ミュンヒェンの王宮宝物庫にある彼の小立像は有名で、これはバイエルン公ヴィルヘルム四世（一四九三—一五五〇）がミュンヒェンの黄金細工師たちに注文したものが、二二九一個のダイヤモンドと四〇六個のルビーと二〇九個の真珠が鑲められている。ゲオルギウスは二八〇年頃カッパドキアに生まれ、皇帝ディオクレティアヌスに仕えて高位の軍人となったが、皇帝のキリスト教迫害に敢然と抗議して、逮捕され、殉教した。聖ゲオルギウスは十字軍の旗印（龍、すなわち不信の輩を退治する者）、英国の守護聖人、聖ジョージ騎士団の守護聖人である。
- 彼の龍退治伝説。ベイルートの近くの湖に恐ろしい龍が棲んでいて、しばしば都の城門まで来ては大気を汚染するのだった。初め人人は一日に二頭の羊を生贄にしていたが、やがて羊は尽きた。どうすればよいか神託を伺うと、人身御供を捧げよ、犠牲者は籤くじで選べ、とのこと。ある日、王女真珠姫パールプリンセスが籤に当たった。彼女が涙を流して生贄の場の岩に凭よれていると、聖ゲオルギウスが来て、事情を聴き、その傍らに留まった。龍が湖中から出現すると、彼は馬にまたがり、神に身を委ねて、まっしぐらに怪物目掛けて突進、槍で深い手傷を負わせたので、龍は彼の足元にうずくまった。「さあ」とゲオルギウスは乙女に言った。「そなたの帯を取り、この獣の頭に結びなさい」。こうして王女は怪物を都に連れて行った。王と民衆は歓呼して二人を迎えた。ゲオルギウスは彼らに向かってこう告げた。神を信じるなら、龍は完全に死ぬだろう、と。王は洗礼を受け、二万の人人も王とともに入信した。
- (35) 馬上槍試合場 中世の騎士に大層好まれた、甲冑に身を鎧い、盾を携えて馬に乗り、槍を構えて突き合う競技が行われる試合場。この競技のことは「リヒルデ」にも「奪われた面紗ヴェール」にも、またこの物語にも出る。
- (36) 牡のアフリカ水牛 Kafferbüffel. 直訳「カフィル族の牡牛」。カフィル族は南アフリカ東海岸に住む南バントゥー人。
- (37) ライン河の鼠の塔 der Mäuseturm im Rhein. マインツのすぐ北の町ビンゲンの近く、ライン河の中洲に建っている黄色い小さな塔。後に述べる伝説と結び付けられて「鼠の塔」と呼ばれるが、実は商品を積載した河船から関税を徴収する税関吏が駐在した塔で、これが訛まがったもの。二十日鼠マウスとは関係無い。

しかし有名な伝説はこう述べている。マインツの大司教ハットー二世（在位九六八—九七〇）は飢饉の折、彼に施しを求めに来た貧民たちを、

食物を与えるとの口実で、一つの納屋に閉じ込め、これに火を点けた。悲鳴が聞こえると、彼は、周りに待る者たちに向かい、わしの穀物蔵に巣食う鼠どもがちゅうちゅう啼いているのが聞こえるか、と訊ねた。ところがその後、無数の<sup>マウス</sup>二十日鼠や家鼠が城にいる大司教の許へ押し寄せ、何もかも喰い、鬻り、彼の体をも攻撃したので、彼はライン河のこの塔へ逃げ込んだが、鼠たちも後を追って塔に入り、大司教を喰い尽くした。証人としてムゼーウスが名を挙げているのはハンブルクの通俗作家ヨハン・ヒュブナー（一六六八—一七三二）で、彼はたかさんの地理や歴史関係の著作を出版した。

(38) 戦鎧<sup>せんかい</sup> Streithammer: たとえば「ルツェルン・ハンマー」とか「鷹<sup>ファルケン</sup>の<sup>クローネ</sup>嘴<sup>ナベ</sup>」などと通称される十五世紀末の乗馬兵用の小型の戦鎧は、突った先端の近くで、これと直角に鈍い鎧状の背を持った鋭い嘴が突き出しており、鎧の方で打撃を与えることも、また嘴で小さいが深い傷を負わせることもできるようになっていた。

(39) 戦棍<sup>せんこん</sup> Streitkolben: 戦闘用棍棒。十六世紀まで多くは乗馬兵によって使用された。

(40) アレクサンドリア Alexandria: アレクサンドロス大王によりナイル川三角洲に築かれた一大港湾都市。この物語の時代には衰退していた。「屈背のウルリヒ」訳注参照。

(41) アシドドの領主 der Bey von Asdod: ベイは太守と殿<sup>パシャ</sup>との間の高官。トルコ語。パレステイナの都市名アシドド、あるいはアシドドは現在のエズドゥド。旧約聖書サムエル前五章によれば、ベリシテ人の五つの城塞都市の筆頭で、彼らの主神ダゴン信仰の中心地だった。

(42) エジプトの王<sup>スルタン</sup> der Sultan von Ägypten: この物語の時代とその前後のエジプトの支配者はざっとこのようなものだった。北アフリカの三つの小王国を統合して九〇九年チュニジアに成立したシーア派（イスマイル派）のファティマ朝（九一〇—一二七二）四代の教主ムイッズが派遣した將軍ジャウハルが、九六九年イフシード朝（九三五—九六九）を滅ぼしてエジプトを征服、カイロ（エル・カーヒラ）を建設して首都とした。ファティマ朝は一一六九年、シリアの支配者ザンギー朝のヌル・アッディーンに派遣されて宰相となったサラーフ・アッディーン（サラディン）に実権を握られ、一一七一年西のアッバース朝に対抗して教主を称していたアッダードの死とともに滅亡。サラディン（一一三八—一一九三）とともにスナナ派のアイユーブ朝（一一七一—一二五〇）が始まる。クルド人の英傑サラディンはザンギー朝の主君ヌル・アッディーンが没すると、ダマスクスを支配下に置き、ザンギー朝勢力の一掃と自身の権力確立を求め、これに成功、インド洋と地中海を結ぶ国際交易に極めて有利な立場を得る。それから十字軍国家の包囲網を完成、十字軍に占領されていたエルサレムを略取、十字軍からシリアの大部分を奪回、メソポタミアの幾つかの地方も版図に加えた。彼はアッバース朝教主の宗主権を認めて自らは王と称した。第三回十字軍、とりわけこれを指揮した英国のリチャード一世（獅子心王）の好敵手でもあり、勇敢で寛大な武將と謳われた。サラディンの死後アイユーブ朝領は一族に分割される。息子の一人アル・アージュズ（在位一一九三—一二九八）はエジプトを、アル・アフダールはダマスカスを、他はアレppoを、という具合。しかし、結局アイユーブ王国を纏め直したのはサラディンの弟の一人アル・アードイルで二二〇二年以降である。アル・アージュズの

死後エジプトを支配下に置いていたアル・アーデルの息子で、父にエジプト副王に任じられ、やがて父の後継者を目指した王のエル・カーミル（在位二二八一—二二三八）はダマスカスを治める弟アル・ムアッザムと対立、ラテン王国の王位を得た十字軍の統率者神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世と協定を結び、その援助と引き換えに二二二九年エルサレムの大部分を引き渡す。故にこの第五回十字軍は「無血十字軍」と呼ばれた。一方王の親衛兵であるトルコ・タタール系およびカフカズ（コーカサス）系の奴隸兵が勢力を伸張し始める。二二五〇年二月奴隸兵たちは、既に二二四九年ナイル河三角洲の港湾都市、地中海に開けるメンザレエ湖を東方に控えるダミエッタ（ダミアート）を占領していたフランス王ルイ九世率いる第六回十字軍とマンズラに戦い、大勝利を収め、ルイ九世（後の聖王）をも捕虜とする（後高額の身代金と引き換えに釈放）。更に同年五月奴隸兵の首長アイバクはクー・デタを起こし、アイユーブ朝の王を殺害して自ら王の称号を唱え、かくしてエジプトには奴隸兵朝（二二五〇—二二五七）が開かれる。一五二七年オスマン・トルコの皇帝セリム一世がエジプトに侵攻、ライダニーヤの会戦で新王トゥーマーン・ベイ率いる奴隸兵軍団を撃破して、以後エジプトは長くトルコの支配下に置かれる。もともと、一七九八年フランス共和国の將軍ナポレオン・ボナパルトが輸送船二百余隻に乗せた三万数千の歩兵・騎兵・砲兵とともに侵攻した時、トルコの支配権は名ばかりで、トルコ皇帝の任命したエジプト副王アブ・ベキル・パシヤは二十三人の奴隸兵の長官（いずれも大土地所有者）から構成される執政府——その首長はイブラヒム・ベイとムラド・ベイの二人——の傀儡に過ぎなかった。なるほどトルコ政庁は一七八六年主権を回復すべく遠征隊を派遣、兩人を一度追放したのだが、代って権力を委ねられたイスマイル・ベイは無為無策の裡に一七九一年黒死病で死亡。結局トルコ政庁はイブラヒムとムラドの政治的聡明さと非情ぶりを評価、彼らを呼び戻したのである。

なお「王」は十一世紀以降、主としてスンナ派イスラム王朝の君主が用いた称号。イスラム世界の首長としては「教主」が存在するので、「王」の称号を用いた支配者の多くは教主からこの称号を受けられる形式を取った。

- (43) 大いなるカイロ Goshkairo. アラビア語「マスル・エル・カーヒラ」（勝利の首都）。短くは「エル・カーヒラ」。エジプト・アラブ共和国の首都。現在人口六百八十万。ナイル河扇状地の要に位し、温和な気候に恵まれる。ファアティマ朝の教主ムイッズの命により建設された古いエル・カーヒラに、サラディンが城塞を築き、市壁を設けた。奴隸兵朝の第五代王バイバルスが二二六一年、チングス・カーンの孫フラクに滅ぼされていたバグダードなるアッバース朝の教主の後裔をこの地に招き、教主として擁立。以来一五二七年エジプトがオスマン・トルコに征服されるまで、エル・カーヒラは教主のいます都としてイスラム教徒に崇敬された。

- (44) ゴグとマゴグ Gog und Magog. 神の国のあらゆる敵を総括する表現。新約聖書ヨハネ黙示録二十章七—八節によれば「千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ、出でて地の四方の国の民、ゴグとマゴグとを惑わし戦闘のために之を集めん、その数は海の砂のごとし」とある。旧約聖書創世記十章二節によれば、ノアの息子セム、ハム、ヤベテのうちヤベテの子孫はゴメル、マゴグ、マデア、ヤワン、トバル、メセク、テラスである。旧約聖書エゼキエル書三十八章以下によれば、「ロシメセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王ゴグ」がイスラエルの民に襲

- い掛かるが、神はゴグ王とその率いる大軍を全てイスラエルの山岳で打ち滅ぼす、とある。つまり、マゴグとはある民族の名であり、ゴグはその王で、他の諸民族と連合してバレストテナを脅かすのである。
- (45) 彼の敬虔さも「自殺の」誘惑という暗礁に乗り上げそうだったキリスト教では自殺は固く禁じられている。
- (46) ハインリヒディテレーザ子公 Heinrich der Löwe。「愛の信実」まこと 訳注参照。
- (47) アスケレビオス Askulap。ギリシア神話の医神。「屈背のウルリヒ」くぐせ 訳注参照。
- (48) 角鹿 Hirsch。牡は見事な枝角を生やした大型の鹿。猟獣として好まれ、中世では王侯貴族のみが狩れるよう、一般人がこれを得ることは牝牡ともに固く禁じられた。
- (49) 周知の、こうした荒地ではこやつに付き物の厚顔無恥な態度。二七〇年頃エジプトの砂漠に独り住まいしてひたすら神に祈ったキリスト教の隠棲者として名高い聖アントニウスがさまざまな悪魔の誘惑に耐え、これを追い払った話は有名。西アジアでは太古から荒地は悪魔の保有するところと認められていたようで、悪魔としてもこうした侵入者には快からぬものがあつたのだろう。
- (50) 黒猩猩 Orang Utang。マレー語で「オラン(人)」「ウータン(森)」。つまり「森の人」。ボルネオ・スマトラ産の類人猿。
- (51) サタン Satanas。ヘブライ語「シャタン(敵対者)」から。
- (52) ブラウンシュヴァイク Braunschweig。「沈黙の恋」、「宝物探し」たからあはれ 訳注参照。
- (53) 悪魔 Beuzehul。「ベルゼブル」は数ある悪魔の異名の一つ。新約聖書マタイ伝十二章二十四節など。ヘブライ語「バールゼブ(蠅の王)」から。
- (54) 沢鷲 Weh。猛禽。「屈背のウルリヒ」、「リブツサ」くぐせ 訳注参照。
- (55) 怪鳥グリフィン Vogel Grif。ギリシア神話に出る頭は鷲、胴体はライオンで、鷲の翼を生やした怪物。黄金の財宝を守護する。
- (56) ツェラーフェルトの見霊者の嘘八百の予言「リュエッパールの物語」リュエッパール 訳注参照。ツェラーフェルトの主席牧師だつたツイーエン(一七二七—一七八〇)の死後公刊された文書(一七八〇)によれば、一七八六年までの数年にドイツを由由しい地震が襲い、ハルツ山地のプロツケン山は噴火して溶岩がボヘミアへまで流れる、とされた。これが大層な恐慌を起こしたであろうことは想像に難くない。
- (57) 円錐管楽器 ツィンケン。昔の管楽器。コルネットに似ている。
- (58) 喇叭 トロンボーン、トランペット。
- (59) 千ものペリシテ人。旧約聖書士師記十五章十五節によれば、マノアの息子サムソンは、縛られた縄を解き、新しい驢馬の頸骨を武器として近くペリシテ人千人を打ち殺した、と。
- (60) 昔むかし賢いオデュッセウスが……施したのと全く同様。トロイア攻囲が終わってから十年後、オデュッセウスは自分が王であるイタケの島

へ漸く帰還すると、妻に求婚していた者たちを邸で策略に掛け、ことごとく殺した。

(61) プロテウス Proteus. ホメロスによれば、自由自在に変身する力を持つ海神。とは言え、高貴なオリュンポスの神神の系列には属さぬ庶民的な存在。「海の老人」とも呼ばれる。

(62) アバドン先生 Meister Abaddon. アバドンは新約聖書ヨハネ黙示録九章十一節によれば、終末の時に底知れぬ穴から出て来る恐ろしい蝗の群の王の名。ヘブライ語。ギリシア語ではアポロン（アポリオン）。

(63) 有翼龍 Drache. ずんぐりむっくりした爬虫類あるいは両棲類の体に蝙蝠のような翼と長い尻尾が付いている。足は四本あるいは二本。残忍で火炎や毒気を吹き出す。

(64) 無翼龍 Lindwurm. 蛇の仲間に入るのだろうが、足がある点が異なる。残忍で毒気を吹き出す。  
死去(シモノ) Pro mortuo. ラテン語。

(66) 方舟から飛び出した鴉 旧約聖書創世記によれば、大洪水の末期にノアは方舟から先ず鴉を偵察に出した。これは水しか見ないで帰還。橄欖の葉つば 鴉の次に様子を見に出された鳩は、二度目に陸地を発見した証拠としてオリヴの枝を嘴にくわえて戻って来る。三度目にはもう戻らない。

(68) 泣き叫び Wehklage. 凶事を告げるザクセン・テューリンゲンの民間信仰的存在。「愛の信実」訳注参照。

(69) まっしろ白鳥 Vogeln Kreideweiß. 凶事を告げる民間信仰的存在。「泉の水の精」訳注参照。

(70) アリストテレス爺さんの『オルガン』 Vater Aristoteles Organon. ギリシアの哲学者アリストテレス（紀元前?—三二二）の論理学書の書名。ギリシア語で「機関」の意。

(71) 水の都ヴェネツィア Wasserstadt Venedig. 五世紀半ばアッティラ王率いるフン族に滅ぼされないようアドリア海の潟に浮かぶ島島に避難した人人は、八世紀には海軍国を形成、十一世紀には東ローマ帝国の羈絆を脱して独立共和国となった。十字軍の遠征はヴェネツィアの海運と海軍力を強大にした。一一〇三年、一一〇四年には十字軍とともに東ローマ帝国の首府コンスタンティノポリスを征服、やがて帝国領を分割所有させている。いくつかのヴェネツィアの名家はエーゲ海のギリシアの島島を占有し、諸侯となった（『奪われた面紗』訳注参照）。これがこの物語の時代のヴェネツィアの国勢である。

(72) ローマの地下墓地 天井の高いトンネル状の地下道の壁に納骨用の穴が多数掘られている地下埋葬所。初期キリスト教迫害時代にはキリスト教徒の避難所ともなった。

(73) 七人の眠れる聖者 die heiligen Siebenschläfer. 「三姉妹年代記」、「宝物探し」などの訳注参照。この七人が眠って皇帝デキウスの迫害から逃れたのはローマの地下墓地ではなく、小アジアの都市エフェソス近郊の洞窟。

- (74) 跳ね上げ戸 扉に付いている上げ蓋付きの小さな開口部。食事・飲み水はここから供給され、空になった容器はまたここから返却された。便器の両便もここから外へ出され、空けられた便器はここから中へ戻されたわけ。
- (75) フランクリンの口風琴 （ハレモニカ） Franklins Harmonika. アメリカの英領植民地時代から合衆国独立に至るまで、その勤勉力行、文才、公共心、外交手腕等等で敬愛されたベンジャミン・フランクリン（一七〇六一—一七九〇）は、理學上の研究でも優れていたし、また夥しい工學的發明をも行ったが、ハーモニカの技術的改良もその中に数えられる。
- (76) フランク人 （Frank） 中近東におけるヨーロッパ人の呼称。
- (77) ニュルンベルク （Nürnberg） 現在のバイエルン州北部、豊饒な中フランケンを中心都市。この物語の時代にはすでに歴代ドイツ王の滞在地となっている。東西・南北の交易路の交点として大いに繁栄し、逸早く外来文化も移入された。「宝物探し」（ツツル） 訳注参照。
- (78) 九柱戯 （キウチウジ） ポウリングあるいはその前身。
- (79) ローマ蒿莖 （アローロエ） der römische Kopfsalat. 結球しないレタス。レタスは結球する品種も含めて古代世界で広く知られていた。
- (80) 蘆薈 （アロエ） Aloe. 百合科の常緑多年生草本。アフリカ喜望峰原産。肉厚の葉の液汁は苦く、健胃剤・緩下剤となる。日本では暖地の海岸に自生する。
- (81) 金盞花 （キンセンカ） Ringelblume. 菊科の一年生または多年生草本。杯型の赤黄色の花を咲かせる。南ヨーロッパ原産で觀賞用。
- (82) 足の裏に棒打ちの刑を喰らって 特にイスラム教国で行われた刑罰。「リヒルデ」、「屈背のウルリヒ」（ウルリヒ） 訳注参照。
- (83) アブドロンニュムス （Abdolyemus） アブタロンニュムス （Abdalonymus） とも。フェニキアの都市シドンの王族の血を引きながらも零落し、菜園を耕して生計を立てていた。アレクサンドロス大王がシドンを制圧したあと、見つけ出されて王に任命された。
- (84) 長老 （シネラ） Scheik. アラブ諸国での首長、族長、家長。また、特定の指導的地位にある人物の称号。シャイフとも。
- (85) 公設市場 （バザール） Bazar. 原文 Bazaar. 「バザール」（Bazar） Bazar. Bazar の誤記として訂正した。「バザール」は元來ベルシア語。東洋諸都市の公設市場のこと。しばしば植樹されており、また、いくつもの柱廊がしつらえられ、麦藁か亜麻布の屋根で覆われていることもある。これが置かれている都市のあらゆる商取り引きの中心。
- (86) 迷迭香 （マンティン） Rosmarin. 「愛の信実」（マニ） 訳注参照。
- (87) 細草 （ハルツ） Baldrian. 根茎 （ハルツ） を鎮静剤として用いる。
- (88) 葉鶏頭 （アムランツ） Amaranth. 莧科の觀賞用一年生草本。葉は鶏頭に似て美しい。
- (89) 千手菊 （サムネ） Samneblume. Samblume. スカビオーサ。西洋松虫草。
- (90) 黄楊の樹 （ブッシュ） Buchsbaum. 黄楊科の常緑小喬木。高さ約二メートル。

- (91) 朽葉風 アキハヤカゼ a feuille mourante. フランス語。「萎れた葉つばのような」の意。当時そんな名で呼ばれた襟飾りがあったのだろう。
- (92) 有名な博愛主義的教育。博愛主義的教育は当時ヨハン・ベルンハルト・パーゼドウ（一七三三—一七九〇）が提唱した教育学の一派で、自然と博愛を教育理念とする。一七七四年パーゼドウは汎愛学塾という教育機関を創設した。パーゼドウについては「泉の水の精」訳注をも参照。
- (93) 深溝 フカヅミ Rejoren. Rigjelen. テューリンゲンの方言。
- (94) 二輪箱車 フタリンコクルマ Radebergen. 原文 Radeberron.
- (95) 天女たち アマノメノコ die Houris. これは「千一夜物語」に類出する言葉で、ムゼーウスがこれに関する知識をいくらか、あるいは少なからず持っている例証になろう。天国の処女。「コーラン」では一般に「楽園」と呼ばれる天国で、善行に励んで天国入りを許された人々にかしづく美しい乙女たち。肉体的にも性格上でも非の打ちどころの無い永えに清浄な処女である、とされる。ただし、「フル」とは古代アラム語で「白い葡萄」薄緑色や黄緑色の葡萄（を指す略語としてしばしば用いられたので、これだ、とする新説もあるそう。それではいくらか美味しくても、そしてたつぷり供給されても、楽園入りもさして報いられない、と考える向きもあるか。もつとも敬虔なイスラム教徒の女性には、こちらでよし、とするのでは。だつてねえ……。
- (96) 親王 オウキミ Satrape. 「サトラペ」は古代ペルシアの地方太守のこと。
- (97) 棗椰子 ナツメヤシ Dattel. 椰子科の常緑喬木。北アフリカ原産。高さ二〇メートルに達する。頂ぎに生える葉は長さ約一メートル半にもなる長大な羽状複葉で、涼しい陰を落とす。中国の重要な果実の一つ、棗に似た漿果を結ぶ。これは栄養豊富で、乾せば保存に耐え、干し柿をより濃厚にしたような甘味を持つ。幹は建築用材。樹液を煮詰めれば甘味料となるし、また同じく樹液から、アルコール度の低い酒様の飲料（預言者ムハンマドも嗜んだと言われる）や、強烈な酒（アラビア語でアラク。トルコ語でラク。アルコール度四十五度前後の蒸留酒）を醸すことができる。このように大層有用な樹木をあっさり伐り倒された長老キアメルの胸の裡は察するに余りある。
- (98) タマリンド タマリンド Tamarinde. 熱帯地方の豆科の常緑喬木。実は清涼飲料。緩下剤の原料となる。
- (99) シルカシア シルカシア Zirkasien. カフカズ地方（黒海とカスピ海に囲まれた地方）のチエルケス人の住む地域。トルコ皇帝の閨房の女性たちの多くはシルカシア人だった、と言われる。その美貌には定評があったため、極めて高い価格で売買された。
- (100) 忍冬 オウゴン Galblatt. 忍冬科の半常緑藤本。山野に自生。
- (101) 木鳥 キトリ Efeu. 五加科の常緑蔓性木本。多数の付着根を茎から出し、木石に絡んで高く登る。
- (102) 緋衣草 ベニクサ Salbei. セージ。紫蘇科の多年生草本。夏紫色の唇の形をした花を咲かせる。葉は薬用。また香草としても用いる。南ヨーロッパ原産。



(103) 柳薄荷 <sup>ヒソツツブ</sup> [sop. 葉草。「リユーベツアールの物語」訳注参照。

(104) メッカ Mecca. マッカ。イスラムの教えを説いた預言者ムハンマド（五七〇頃―六三二）の誕生地で、イスラム教の聖都。サウジアラビアのヘジャズ地方の宗教上の首都。

(105) 香膏の樹 Balsam. パルサムは芳香を放ち、鎮静効果を有する樹脂。「愛の信美」<sup>まこと</sup> 訳注参照。

(106) サラディン Saladin. サラーフ・アッディーン（一一三八―一一九三）。エジプト・シリアの大部分を支配するアイユーブ朝初代。詳しくは訳注42「エジプトの王」参照。「サラディン」はヨーロッパ訛り。

(107) アル・アージズ・オトマン王 <sup>スルタン</sup> Malek al Aziz Othman. サラディンはエジプトに主権を確立した後、アッバース朝 <sup>カリフ</sup> 宗主権を認めて、自らは王の称号を取った。アル・アージズは実存し、サラディンの息子の子であり、父の死後エジプトを領有した。しかし、一一九八年十一月にピラミッドの近くで狩猟中、落馬して死亡。この物語の時代にはまことに遺憾ながらこの世にはいなかった。当時カイロに君臨していたのは、サラディンの弟アル・アーディルの息子アル・カミル（在位一一二八―一一三八）である。以上、訳注35「エジプトの王」をも参照させて、「オトマン」だが、英語でも Ottoman なる綴りが「オスマン」Othman, Osman とともに使用される。アラビア語の音では「ウトマン」が近似値だからであろう。ただし、クルド人の英雄であるサラディンの息子との設定になっているこのエジプトの王の名の一部としては似つかわしくない。オスマン一世（一二五九―一三二六。在位一二九九―一三二四）はトルコにオスマン朝を創設して、初代君主となったトルコ系遊牧民の首長。もともと「ウスマン」<sup>エミル</sup> なら第三代正統教主の名でもあり、エジプトの王が名乗って不思議は無いが。

(108) 閨房 <sup>ハレム</sup> ムゼーウスは、ヨーロッパ人が長いこと抱いて来た、そしておそらくいまだに抱いているイメージでこの言葉を用いている。すなわち東洋の一人の専制君主の意のままになる数百人の美女が割拠する淫蕩で、頹廢した、けだるい宮殿の一面である。オスマン帝国の衰微が始まったあたりからは、こうした印象もあるいは止むを得ない状況があったようだが。本来アラビア語の「ハラーム」（禁じられた）に由来する「ハラム」はイスラム教徒の家屋の女性たちの住む区画、すなわち、「神聖な場所」である。君主の宮殿であれば、妻妾、子ども、侍女たちの居住部分となる。

(109) 枢密院 <sup>ディワーン</sup> Divan. トルコ語。「長椅子」の意もあるこのペルシア語はトルコに移入され、「政府・内閣」の意となった。それゆえ本来はトルコ帝国枢密院、帝国政庁。

(110) パルバリア海岸 <sup>Barbarei</sup> Barberei と云ふ。北アフリカの西半分、モロッコ、アルジェリア、テュニス、トリポリの古い名称。ここに居住するベルベル族に因んで付けられた。モロッコを除く三つの国家は、中世から近世にかけて海賊国家として恐れられた。もともと十九世紀初頭に入ってからなお、地中海を航行する船舶のかなりは襲われないようにあらかじめこの地方の領主に貢納金を支払っていたし、シチリア、サルディニア、コルシカの沿岸部、イタリア半島の地中海に面した沿岸部、および南フランスの辺鄙な海岸地帯はパルバリア海岸から襲来する海

賊船の劫略に怯えた。海賊行為が根絶されたのは漸く一八三〇年フランス軍がアルジェを征服してからである。もともと、一五三〇年ロードス島から撤退、以後マルタ島に根拠地を持っていた救護騎士修道会Ⅱ聖ヨハネ騎士修道会(マルタ騎士団)はトルコ帝国に代表されるイスラム教徒撲滅の誓願を立てていたから、一七九八年ナポレオン・ボナパルトに同島が占領されるまで、こちらも帝国領土沿岸で(先方にしてみればやはり)海賊行為を働いていた。

- (11) 「マルブルが戦に行った」 Marlborough's ten years' guerre. 有名なフランスの軍歌。十六世紀半ばには既に知られていた。従って英国元首相ウインストン・チャーチルの祖先で、イスパニア王位継承戦争の帰趨を決めたドナウ河畔なるブレンハイムの戦い(一七〇四)における勝将の一人、初代モールバラ公爵ジョン・チャーチル John Churchill, Duke of Marlborough を歌ったものではない。ムゼーウスは(ここでは固有名詞を Marlborough と綴っている[ただし訳者が用いた底本では「Malborough's ten years' guerre」とある。vaten の t が落ちているのは明らかに校正の誤りだから、固有名詞も同様ムゼーウスの意図ではないかも知れない。一八四〇年の版を参照して校訂した]ので、どうやらそう考えていたようだが)「愛の信実」訳注参照。

- (12) ガリア「ゴール」フランス」の王位継承者の乳人殿 フランス王ルイ十六世の妃マリー・アントアネットは一七八一年王太子を生んだ。ルイ・ジョゼフ・グザヴィエ Louis Joseph Xavier と名づけられたこの児は健康に恵まれます、一七八九年大革命直前に死ぬ。乳人殿うんぬんはムゼーウスが当時の新聞などで読んだのであろう。「おっぱい夫人」すなわち乳人殿の名は未詳。お乳の良く出る一級の乳母だった、このことであるが。

- (13) 『千一夜物語』の美女シェヘラザード die schöne Scheherazade in der Tausend und einen Nacht. この記述は他の幾つもの証左と併せて、ムゼーウスが『千一夜物語』に親しんでいたことを示す。「シェヘラザード」はムゼーウスの使用したドイツ語綴り(ドイツ語発音の約束に従えば「シェヘラツァーデ」が近似値)にかなり近づけた片仮名表記だが、バートン版、マルドリユス版のそれぞれの邦訳で採用された「シャアラザッド」、「シャアラザード」も加味した折衷。言うまでもなく千一夜の問答の王に物語を語り続けた王の大臣の長女の名。「都市の娘」の意。

- (14) 後宮 Serail. 本来は「サライ」(宮殿)の意。ペルシア語の「サライ」(建物、宮殿)が語源だが、(トルコ人と最初に緊密な関係を持ったヨーロッパ人である)イタリア人がこれを奇妙にイタリア語化した「セラリオ」がヨーロッパ人に使われるようになった。フランス語の「セラリュ」もここから。これは宮殿、庭園その他の宮殿内外の土地、キオスク(小さいながら豪華な独立した建物)などを総括している。しかしムゼーウスは「セライル」を宮殿内の婦人だけの居場所と考えていたようだ。ただし彼なりに「ハレム」と区別して、「ハレム」こそ実は妻妾、子ども、侍女たちの住居部分なのだ。そこで「後宮」を訳語とした。

- (15) 『コーラン』 Koran. 『クルアーン』。預言者ムハンマドの教えを記した書物。イスラム教の聖典。

- (16) 矢車仙翁 chalcedonische Lychnis. 学名リクニス・カルケドニア Lychnis chalcedonia. ドイツ語 Feuernelke (炎石竹)。灼熱の恋

- Brennende Liebe ともいう。蝦夷仙翁。石竹科の多年生草本。高さ約五〇センチ。八月頃中形の美しい花を開く。
- (117) 天鷲絨毛蕊花 *Königskeuze*。毛蕊花は胡麻の葉草科の越年生草本。高さ一メートル以上。黄花と白花がある。
- (118) 秋牡丹 *Anemoneselein*。金鳳花科二輪草属の多年草。「リップッサ」訳注参照。
- (119) 徒心花 *Faltersee*。未詳。直訳すれば「徒心（気紛れ）薔薇」。
- (120) 罌粟 *Mohn*。罌粟科の越年生草本。高さ約一メートル。五月頃、四弁で白・紅・紅紫・紫などの花を開く。種子は食用。未熟の果実の乳液から阿片を製する。
- (121) 鈴蘭 *Glockchen*、*Maisglockchen*。百合科の多年生草本。晩春白色六弁の壺状の小花を総状に付ける。芳香があり、美しい。全草を強心剤、利尿剤とし、また香水の原料とする。
- (122) 大泊夫藍 *Nailose*。百合科の多年生草本。ヨーロッパ原産で、觀賞用または薬用に栽培。秋、地下の球根から葉よりも先に淡紫色の花を咲かせる。有毒植物。
- (123) 朝鮮朝顔 *Stechapel*。茄子科の一年生草本。熱帯アジア原産。高さ約一メートル。秋、葉腋に淡紫色または白色の朝顔型の五弁の花を開き、楕円形の果実を結ぶ。種子は黒く、数多い。全体、特に種子には猛毒がある。乾した葉は鎮痙剤・喘息煙草の原料。マンダラゲ、マンドラゴラとも。
- (124) 神聖文字 ヒエログリフ。本来は古代エジプトで用いられた象形文字。ムゼーウスは「解釈がすこぶる難解な表現」くらいに用いている。「沈黙の恋」訳注参照。
- (125) 異国的な *exotisch*、*exotisch* は「外面的な」の意。「異国的な」は *exotisch* である。前者では前後が通じないので、ムゼーウスの誤記と考え、訂正した。ただし、手元にある最も古い版（一八四〇）でも *exotisch* となっている。
- (126) ナイル河 *Nil*。アフリカ東部ヴィクトリア湖から北流して地中海に注ぐアフリカ大陸最大の河川。アメリカ大陸最大のミシシッピ河に次いで世界第二位。長さ五七六〇キロ。スーダンのハルトウムでエチオピアのタナ湖から発する青ナイル（本流であるヴィクトリア湖からハルトウムまでの一九〇〇キロを白ナイルと呼ぶ）を合わせる。古代エジプト人は「イエテル＝オ（大いなる河）」と呼び、コプト語でイエロ、イアロ、ヘブライ語ではこれによって「イエオル」となった。古代ギリシア人には「ネイロス」とされた。古代エジプト語の「ヌウイ」（水、河）に因る。ギリシア語からラテン語の「ニールス」に転訛。アラビア語ニール。エジプト人、ギリシア人、ローマ人はナイル河を神として尊崇した。上流から運ばれる沃土は古代から豊かな穀物の収穫を齎し、水運は国土を活性化させ、沿岸諸都市の井戸は新鮮な水を供給され、豊富な水産資源は食生活を潤沢にしたからである。
- (127) 金字塔群 ピラミッド。エジプト古王国時代に国王の墓として建てられた三角塔。カイロからはそのうち最も巨大なギザのピラミッド群三基（第四王朝の

クフ、カフラー、メンカラーの王墓とされる)が遠望できる。

- (128) 一連の青い山脈 しかしこの時代でも、あちら、つまり、カイロ辺りのナイル河左岸には広大なリビア砂漠が広がっていただけのはずだが……。

(129) 導師 *Tham*. ムゼーウスはこう綴っているが、一般には *Tham* である。イスラム教の聖職者。「イマーン」は信仰の内的・精神的側面を指す。

(130) 托鉢僧 ベルシア語のダルヴィーシユ(物乞い)から。熱狂派修行者、苦行修道僧。神秘主義から発した。十二世紀頃から神と神秘的に強く結びつく宗教上の指導者の下に、一団の修行僧が集まり、宗教的恍惚状態に入り、一部のイスラム教徒を惹き付けた。中世においては宗教的にも政治的にも少なからぬ役割を果たしたが、今日でも正統派イスラム教徒からは必ずしも承認されないながら、根強く存続している。継ぎはぎだらけの衣を纏う。

(131) 長上着 ベルシア語のカフタン(鎧下)から。アラビア語、トルコ語、スラヴ語(東欧ユダヤ人の衣装として)にも。ゆつたりとして丈と袖の長い、帯で結ぶ衣装。

(132) アスベル銀貨 十八世紀当時のトルコの最も小額の銀貨。三アスベルで一パラに相当。四〇パラで一クルシ。ただし、十六世紀のヨーロッパ人の記事によれば、オスマン・トルコの大王宮であるトプカプ宮殿の料理長は日給四十アスベル、その五十人の部下たちは四、五アスベルまたは八アスベルを、食膳長は八十アスベルを、その百人の部下たちは三アスベルから七十(七カ)アスベルを、十人の水運び人は三ないし五アスベルを支給されたそう。 (N・M・ベンザー著/岩永博訳『トプカプ宮殿の光と影』、法政大学出版局、一九九二年、に拠る)。

(133) 太陽が磨羯宮に入った頃 太陽が黄道十二宮の磨羯宮、すなわち山羊座の辺りに来るのは十二月二十日から一月二十日。

(134) 至福の野 *Dysium*. ラテン語。「姉妹物語」その他訳注参照。

(135) 典雅の女神 *Grazie*. ローマ神話。「屈背のウルリヒ」その他訳注参照。

(136) バイラームの祭 トルコ語で「クルバン・バイラーム」(アラビア語イド・アル・アドハ)と「シケケル・バイラーム」(イド・アル・フイトル)がイスラム教の重要な二つのバイラームの祭である。前者は生贄祭。ズール・ル・ヒッジャ月(ヒジュラ暦Ⅱイスラム暦十二月)の十日、アブラハムによるイサクの生贄(旧約聖書創世記二十二章)を記念して、羊か、仔牛か、駱駝を殺す。後者は断食終了の祭。シヤウワール月(ヒジュラ暦十月)の一日、断食月(ヒジュラ暦九月)終了直後に祝われる。

(137) 蘭草 *Bimse*. 灯心草科の多年生草本。湿地に自生。茎は細長く、地上二メートルに達する。筵(日本では畳表にも)に編む。白色の髄は灯心とされた。

(138) 理想郷 *Tempe*. 「沈黙の恋」。「屈背のウルリヒ」訳注参照。

(139) コロカシア *Colocassia*. 普通 *Colocasia* と綴る。里芋科コロカシア属。莖長で、ハート型の葉が莖から四方に広がる観葉植物。

- (140) ピラストル・ド・ロジエ殿 Herr Plastre de Rozier. 「ロジエ」の綴りは Rozier が正しい。フランスの気球乗り。一七八三年人類史上初の気球発進に成功。一七八五年失敗して墜死。「奪われた面紗」<sup>ウツゲイ</sup> 訳注参照。
- (141) ヴェルトツブルク Würzburg. 現在バイエルン州に属す。下フランケン<sup>ウツゲイ</sup>の首邑。マイン河に臨む。町の主要部分はその右岸にある。いわゆる「ロマンティック街道」の起点で、中世に創建された建造物の多い静かな美しい町である。七〇四年に既にその名が言及されているが、重要になったのは七四一年司教座がここに置かれてから。領主でもある司教の支配から逃れて都市としての主権を確立しようとしたが成功せず、一五二五年には蜂起した農民と同盟して司教と戦ったほど。
- (142) 馬上槍試合 訳注35参照。
- (143) 験甲 ヨーロッパの騎士の兜の上げ下げができる顔隠し。「愛の信実」<sup>まこと</sup> 訳注参照。
- (144) エンデュミオン Endymion. 優れて美しい容姿の青年で、月の女神セレネが一目ぼれし、ある山中の洞窟に眠らせて、夜な夜なそこを訪れて逢引きしたとか。「愛神になった精霊」<sup>アモル</sup> 訳注参照。
- (145) 歳の市 地方の主要な町村で一年に一回あるいは数回立った市。元来は教会の祭（教会堂開基祭など）に人が集まるのを当て込んだものだったが、後にはこれと関係無く開催された。ここでは一時的に専売権や同業組合の特権<sup>ツェンツト</sup>が廃止されたので「楽市」<sup>フレイマクト</sup>（自由市）とも呼ばれた。多くの小商人が店を開き、近在からたくさんの人々が行楽を兼ねて買い物に訪れた。
- (146) ユダヤのいかさま医者 中世のユダヤ人医師の名譽のために一言すると、暗黒時代に學術の伝統が中断された西欧の医師たちとは異なり、ギリシア・ローマの医学上の業績に加えて、ベルシアの哲学者にして医学者イブン・シーナー（西欧訛でアヴィセンナ。その著『医学典範』は有名）に代表されるイスラム世界の学問をも吸収し得た彼らは、当時としては優れた治療者であった。イスラム教の敵で、ユダヤ人をも快く思っていなかった救護騎士修道会（聖ヨハネ騎士団）の重要な施設である病院でも、医師たちはユダヤ人だった。また、サラーフ・アッディーン（サラディン）とその息子イマード・アッディーン<sup>アムル</sup>の侍医モーシェ・ベン・マイモン（モーゼス・マイモニデス。一一三五―一二〇四）はイスパニアのコルドバ生まれのユダヤ人。宗教迫害を恐れ、フェズ（モロッコ）を経てカイロに移住。医学の他哲学、神学、占星学にも通じていた。彼の哲学の著述はヨーロッパにも大きな影響を与えている。
- (147) 糸杉 Zypresse. 哀悼、喪の象徴。兎手<sup>こて</sup> 柏の変種。
- (148) 迷迭香 Rosmarin. 愛、誠実、死の象徴。「愛の信実」<sup>まこと</sup> 訳注参照。
- (149) ガレノスの弟子たるユダヤ人 der jüdische Zögling des Galens. ガレノス（一三二―二〇一）は古代ローマのギリシア人名医。一五八年、小アジア南西部の古代都市ベルガモンの剣闘士の医師となり、一六四年以降ローマで数教の成功した治療と公開講演によって名声を博した。一六七年再び故郷に戻ったが、皇帝マルクス・アウレリウスによりアクタニアへ、後にアウレリウスの息子、皇帝コンモドゥスによりローマへ

待医として招聘された。その著作はルネッサンス期を過ぎてまで医学の基盤となった。中世、主としてアラビアの医師たちによって広められた彼の学説は医療のあらゆる分野から集められた膨大な観察材料に基づいている。この権威が揺らいだのは漸く十六世紀、バラケルズスなどの登場によってである。「ガレノスの弟子」とは医師のこと。前述のユダヤ人医師を指す。

- (150) 『諸侯家並びに公家傳育官への助言』 *Winkler für Fürsten und Prinzenzieher*. ヴィーラントの指摘によれば、同じ題名の同時代の著述を示唆している、とのこと。

(151) 瑠璃草「男の真心」 *Mannstreu*. 瑠璃草。紫の多年生草本。山地に自生する。高さ約三〇センチ。晩春初夏、花冠が五裂した鮮やかな碧玉の色をした小さい花を開く。 薺草とも。

(152) 当帰リゾフィラ「愛の根株」 *Liebstockel*. 当帰。芹科の多年生草本。高さ約六〇センチ。夏秋、茎の上に多数の白い五弁の香り高い花を付ける。乾した根を煎じて鎮静薬、通経薬として用いる。

(153) 戦士 馬上稽試合（訳注35および142参照）の競技者。

(154) 内気な羊飼ツェヒツい フランスの文人オノレ・デュルフェの牧歌小説『アストレ』の主人公である羊飼いセラドンは、誠実ではあるが、まことに内気で、いとしい乙女アストレと相思相愛なのに、なかなか愛を告白できない。「リブッサ」訳注参照。

(155) 原動力 *purimum mobile*. ラテン語。最初の動因。原動力。コペルニクス以前の天文学における、地球の廻りを回転する全天体の二十四時間続く運動の最初のもの。

(156) あの名高い木製の将棋指し人形 エドガー・アラン・ポーの「メルツェルの将棋指し」*Edgar Allan Poe: Maetzel's Chess-Player*（一八三六年）によれば、この機械はこのようなものだった。一七六九年ハンガリア王国のプレスブルク（現スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァ）の貴族ケンブレン男爵は一体の自動人形を發明した、と称した。これはプレスブルク、パリ、ウィーンなどで興行された。初めは男爵自らにより、その後メルツェルなる男の手に渡って。人形はトルコ風の衣装を纏い、水煙管ウヰヤンを右手（将棋を指すのは左手）に、盤を載せた大きな箱に固定された椅子の上に足を組んで座っている。見物人のうち希望者が対局する。大抵は人形が勝つが、負けることもあった。制限時間内に勝負がつかないことも。興業する者は箱の中や、人形の内部をあらかじめ開いて見せる。中には機械がぎっしり詰まっているように見えた、とのこと。メルツェルは一七八三、四年、これを携えてロンドンに渡り、十九世紀初頭からアメリカ各地を巡業した。ポーは前掲の小論文で、中間が潜んでいることを仄めかしている。

(157) 肉叉フレイシ この時代ヨーロッパでもイスラム圏でも、梵語圏と同様、右手指食文化であった。フォークは厨房での調理用具としては古くから各地で用いられていたが、食卓での小さなフォークの使用は高度の文化を誇った東ローマ（ビザンチン）帝国で十世紀あたりに始まる。ここからギリシア、イタリアへと伝わるが、イタリアでも使用したのは少数の変り者の貴頭に限られていたらしい。カテリーナ・デ・メディチ（カトリ

ルス・ド・メデイシス) がフランス皇太子(後のアンリ二世)と結婚するため、一五三三年フランスへ持参した嫁入り道具に食卓用フォークがあった、というのは俗説、とのこと。

(158) 内膳頭 *Dapifer* 中世宮廷の司厨長。

(159) ヒエラ *Chier* キクラデス諸島中最南の島サントリニ島の属島の一つ。サントリニ島はとろりと甘い極上のワインを産出。「奪われた面紗」<sup>ツヴェイル</sup> 訳注参照。

(160) イツケルニー *Yskeruni* この片仮名表記がどこまで現地発音に近いことやら。どなたかご高教ください。

(161) 恋文 *billet doux* フランス語。

(162) 肉豆蔻風信子 *Muskatshyzynthe* ムスカリ *Muscari*。百合科百合属。丈の低い鱗茎植物。地中海地域にはほぼ四〇種ある。

(163) 北アメリカ向けの怪しげな思惑貿易 英国は慢性的陸兵不足(水兵と異なり志願制だったため。各教区から籤で選ばれる男たちから成る国民軍には充分兵員がいたが、これは法律で海外派遣を禁じられていた)を解決するため、アメリカ独立戦争でも、ナポレオン・ボナパルトとの大陸での戦争(特にイベリア半島での戦い)でも、ドイツの領邦君主から軍隊を賃借した。ドイツの貧しい君主たち——取り分け悪名高いのはヘッセン＝ダルムシュタット方、<sup>ラント・グラーフ</sup>伯ルートヴィヒ九世(一七一九—一七九〇)——は徴兵で得た多くの兵士を北米へ「輸出」した。ムゼーウスはこのことを仄めかしている。「リブッサ」訳注をも参照。

(164) アスクレピオス *Asklap*。ギリシア神話の医神。「屈背のウルリヒ」<sup>ククセ</sup> 訳注参照。

(165) 蹟きの石 旧約聖書イザヤ書八章一四節。

(166) 花鶏 *Handing* 燕雀目雀科の小鳥。頬白に似る。大体栗色か黒褐色。喉は黄色、胸は白。食用。

(167) 森鳩 *Ringeltaube* *Kohltaube* *Waldtaube* *große Holztaube* とも。鳩鴿目鳩科の小鳥。体長四三センチ、青色。頭と胸は赤みがかった青。頸は緑と紫の玉虫色。北緯六五度までのヨーロッパ、南西アジア、北アフリカに棲息。ドイツでは三月から十月まで滞留。食用。

(168) 妖精 *Fel* ムゼーウスは「屈背のウルリヒ」では *Fel* と表記している。フランス語の *fé* から。英国の *Elf* に当たる。ドイツ語圏には存在しない超自然的存在。詳しくは「屈背のウルリヒ」<sup>ククセ</sup> 訳注参照。

(169) 麝香葡萄の実 *Bisangfrucht* *Bisang* は *Bisam* (「ビザム」はヘブライ語の「芳香」から。「麝香」・「麝香の匂いの植物」の意) であろう。そこで「麝香葡萄の実」とした。

(170) 夜菫 *Nachviole* 黄花の旗笄。スウィート・ロケット。花が夜匂う。

(171) サテュロス *Satyr*。ギリシャ神話で酒神ディオニュソスの取り巻きとしてよく出て来る山羊の角、耳、長い尾、蹄の付いた脚を持ち、毛深く、低い鼻、大きな口の成年男性の姿をした精霊。生成繁殖を司るので、しばしば怒張した男性器をも添えて描かれる。

- (172) 地の精 Erdgnom. Erdgeist. またはただ Gnom と言うのが普通。大地の中に住み、金銀、寶石を掘り出したり、これを守護したりする小人の形をした精霊。
- (173) 愛神 Amor. 「愛神になった精霊」訳注参照。
- (174) ウェスタ Vesta. ローマ神話の重要な地の女神。ローマのその神殿には常に聖火が燃えていた。「肩背のウルリヒ」訳注参照。
- (175) メガイラ Megale. ギリシア神話の復讐の女神たち(複数形エリニユエス。単数形エリニユス)の二柱で「嫉妬する女」の意。後の二柱はアレクト(止めない女)、ティシポネ(殺戮を復讐する女)。
- (176) ロトの女房 Lots Weib. 旧約聖書創世記十九章二十六節「ロトの妻は後を回顧したれば塩の柱となりぬ」。悪徳の町ソドムとゴモラを滅ぼそうするヤハヴェに許された義人ロトは、妻と未婚の二人の娘とともにソドムの町から逃げ出したが、途中後ろを振り返ったロトの妻は、塩の柱と化した。
- (177) 巫女 Pythia. デルフォイのアポロンの神殿の巫女たち。憑依状態になってアポロン神の神託を下した。
- (178) 動物磁気 人間、あるいは高等動物の体内に生じる、とされる不可視の流体で、生命固有の機能、精神的機能などの説明のために用いられた。動物精気、動物電気、エーテルなどもそうした概念。動物磁気の主唱者はフランツ・アントン・メスマー Franz Anton Mesmer (一七三四—一八一五)で、皮膚を摩擦することにより、物理学的な磁気的作用を持つさまざまな力が発生する、と説いた。
- (179) 虹の女神 Iris. 神神の使者としてホメロスの叙事詩にしばしば登場するこの女神は、虹の橋を架け渡して目的地に急行する。市門で阻む遮断棒 この当時ドイツの都市の門では踏み切り遮断機のような遮断棒がおせんぼして、税関吏が、物品を市内に搬入する人々から市税を徴取したのである。また、乗合馬車で都市に到着した旅行者たちは、これを前にして延延と待たされることが常だったようだ。「宝物探し」にも登場。
- (181) 教理学習者 カトリック教理問答を学習し堅信札の準備をする者。
- (182) カナン Kanaan. ヘブライ語で「低地」。パレスティナ西部地方の古い名称。創世記十二章一—十節によれば、ヤハヴェは、アブラハムとその子孫にこの土地を与える、と約束した。
- (183) エジプトから出るイスラエルの子ら 旧約聖書出エジプト記。ヤハヴェの啓示を受けたモーセに率いられるエジプト在住のユダヤ人は、乳と蜜の流れる約束の地カナンを目指してエジプトを出た。
- (184) Wierzer Mäuseusの同時代人、物語作家にして戯曲家だったヨーハン・カール・ヴェンツェル Johann Karl Wenzel (一七四七—一八一九)を指す。彼は一七八六年精神病になる前に幾つかの物語を発表したが、その一つが「カーケルラク、あるいは、前世紀のある薔薇十字会員の物語」(二七八四)である。「沈黙の恋」訳注参照。



- (185) カーケルラク Kakerlak 普通名詞では「くさびり」、「油虫」。
- (186) 諺で言えば——留め針みたいに捜し「留め針みたいに捜す」wie eine Stecknadel suchen は慣用句であつて諺では無いが、そのままにしておいた。
- (187) 奴隸兵<sup>マムルーク</sup>「マムルーク」は本来はアラビア語で「被支配者の男性」、すなわち「男性奴隸」の意味だが、やがてトルコ・タタール系およびカフカース系の白人奴隸兵を指すようになった。エジプトではファアティマ朝以降<sup>スルタン</sup>王の親衛兵として重用された。訳注42「エジプトの王」では、その実権掌握ぶりについて詳しく説明した。
- (188) ヘルメス Hermes オリュンポスの十二神のうちで最も若いこの神は、ゼウスが巨人アトラスの長女マイアと契つてもうけた子だ、と言われる。生まれつき狡猾で、盗癖があり、襦袢も取れないうちにアポロンの牛を五十頭も盗んだのが最初の所業。足に羽根の生えたサンダルを履き、手に黄金の伝令杖を持ち、日除けの罌<sup>ベクトルス</sup>帽を被つて、神神のお使い役を務める。彼は熟練、機敏を必要とする稼業を司る、とされる。俗説では商人と盗人の守り神。ムゼーウスが医師をもこの神の庇護下においたのは、医師が熟練を要するからだろうが、勿論一般には医師が尊崇するのは医神アスクレピオス。
- (189) メルクリウス Merkur. ローマ神話でヘルメスに当たる存在。
- (190) 密輸出<sup>コントランド</sup> Konterband. フランス語 faire la contrebande (密輸する) から。
- (191) 検疫隔離 船舶に伝染性疫病が起こった場合、入港した港で課される隔離。陸上との交通が厳しく制限される。かつては四十日間だった。
- (192) 日の出 実際「アジア」という言葉は古代アッシリア語で「日の出」、「東方」を意味する「アスー」に由来しているそう。『ヨーロッパ』も同じくアッシリア語で「日の入り」、「西方」を意味する「エレブ」から、とのこと。
- (193) 野原へ飛び込む<sup>シュプリング・フェルト</sup> Spring ins Feld. この奇妙な名前は三十年戦争を背景としたグリーンメルスハウゼンの作品『大女詐欺師にして放浪者なるクラージュ』Die Erzbisgerin und Landstörzein Curwische (一六七〇年) (邦訳に中田美喜訳『放浪の女ベテン師クラージュ』、現代思潮社、一九六七年)、『奇人シュプリング・インス・フェルト』Der seltsame Springsfeld (一六七二年) に登場する。ムゼーウスがこれらを読んでいたことはまず間違いないから、ここから思いついた彼が、次々と滑稽な呼称を案出したものか。
- (194) 「どつやらあんたはちよくな」[気軽な]衆だの「わしは職人衆なんぞじゃねえ。手仕事はやつとらんで」原文。Du scheinst mir ein loser Gesell zu sein. "Ich bin kein Gesell, denn ich treibe kein Handwerk." Gesell(e)には「男」の他に「親方の許で徒弟としての年季奉公を終えた者」の意がある。
- (195) ハーナウの通信者<sup>シヤンタグラフ</sup> Syntematograph von Hanau. シュンテマトグラフとはあらかじめ決められた暗号で通信する人または装置。見通しの利く高い台を連ね、大きな鏡を用いて光を送ったり、ナポレオン・ボナパルト支配下およびその後のフランスで行なわれたように、開閉でき

る多数の窓を持った塔を連ねて、窓の開閉によりアルファベットを送ったりした。ハーナウは現ヘッセン州の中都市。「ハーナウの通信者」そのものについては未詳。

- (196) 分割協定 *Partageraktat* ラテン語起源の難解な表現をわざわざ用いているのはムゼーウスのおふざけであろう。
- (197) 目深頭巾 *Nebekappe* 伝説や民話では小人が被る隠れ頭巾。つまり人間の目に見えなくなる道具。しかし、ここでは被っている人の顔が見えない目深な頭巾。
- (198) 天使ラファエル *der Engel Raphael* 大天使。旧約聖書外典トビト記三章十七節に義人トビトの息子トビアの忠実な旅の道連れとして登場。「リュューベツァールの物語」「愛の信実」訳注参照。
- (199) 占い女 *Sibyle* シビュラはバビロニア、エジプト、ギリシア、ローマなど古代の国で神託を伝えた巫女。ここでは女子言者。「屈背のウリビ」訳注参照。
- (200) 婚嫁上の変則事例 *Matrimonialnomalie* ラテン語起源の難解な表現をわざわざ用いているのはムゼーウスのおふざけであろう。
- (201) 反キリスト *Antichrist* キリストが再臨し、世界が末日を迎える前に出現するとされる悪魔。あるいは単に、悪魔。
- (202) アンゲリカ *Angelika* もとよりラテン語 *Angelus* (天使) に由来する女性名。
- (203) 感謝頌 *Te Deum* ラテン語「神よ、そなたを〔我ら讃えん〕」*Te deum* で始まる讚美歌。感謝の聖歌。
- (204) 婚嫁上の請願 *Matrimonialpetitum* ラテン語起源の難解な表現をわざわざ用いているのはムゼーウスのおふざけであろう。
- (205) 三神論 父なる神と子なる神(贖罪者キリスト)と精霊なる神とが唯一の神の三つのベルソナである、とするキリスト教の三位一体説に対する異説。三位異体論。中世のキリスト教会では聖なる三位一体という概念について激しい論争があった。西欧教会は父と子と精霊の三位一体を支持した。
- (206) 禁じられてるほど(近縁) たえば従兄妹とか義兄義妹の間柄の場合、一旦結婚しておきながら何か都合が悪くなると、近親結婚を理由に、カトリック教では本来許されない離婚の特別許可を、高位の聖職者から——勿論多額の金を払ってだが——入手することは可能だった。「リビルデ」参照。
- (207) 驢馬のボードアン *der Esel Baldewein* 二つの干し草の束の間で、どちらを食べたらよいか決心できず、飢え死にしなければならなかった動物寓話の驢馬。フランスの神学者ジャン・ビュリタン *Jean Buridan* (一三〇〇—一三五八頃) が書いた。
- (208) 接吻のため差し出したのは香水を染ませた上履き 教皇に謁見が叶った信徒は、足台に載せられた教皇の上履きに接吻して表敬する。
- (209) 手の平 *Palme* ラテン語「パルム」*palma* (掌)。
- (210) 魂の花婿「イエス・キリスト」イエス・キリストを花婿とする、とは、修道院に入って修道尼となる、ということ。

- (211) ローマの決疑論の徒 極めて瑣末な事柄にも拘泥する傾向があったので、諺にもなっているローマの教皇裁判所の法学者。彼らは道義上、法律上の原則に疑念が生じた場合、これを決定しなければならなかった。
- (212) かの円形教会堂 聖母マリア円形教会堂（古代ローマの万神殿の転用）を指すか。
- (213) 教皇領 Patrimonium Petri. ラテン語。「使徒」ペトルスの遺産。ローマ教皇支配下の領土。ローマを中心として中部イタリアが版図だった。
- (214) 欵びの谷 Prudential. 未詳。
- (215) 樞 Fohre. 南ドイツの「フェーレ」は普通「松」Kieferのこととされる。しかしキーファーは北ドイツでは樞Tanne、東プロイセンでは柏だそう。日本では松は堅木とは言えない。そこで「樞」としておいた。
- (216) エアフルト Erfurt. テューリンゲンの経済的に最も重要、かつ最大の都市。現在テューリンゲン州州都。エアフ河（ゲラ河の旧名）の畔に位する（エアフの渡し場）。七四二―七五五年司教座が置かれたが、次いでマインツ司教区に所屬。八〇二年国王領として言及される。八〇五年以降近隣のヴェンド人（ドイツ東北部に居住するスラヴ人に対するドイツ人の呼称）との主要通商地となり、経済的に発展。強大な独立性を保持、広い領土を獲得したが、法的にはマインツの司教の支配下にあり、この司教が代々の城伯（支配的市民階層の天敵）を任命、一二五〇年以降は君主となった。ここでは繰り返して（九三六、一一八一、一二八九年）神聖ローマ帝国議会が開催されたし、一四〇〇年頃には経済的にも政治的にも強力だったが、帝国直屬都市にはなれず、一四八三年には遠隔のマインツへの帰属はそのまま、ザクセンの宗主権の下に置かれた。一五二一年新教に改宗。一六三一年マインツへの服屬を拒み、破門宣告を受ける。一六六四年マインツに降伏、信教の自由は認められたが、この時からマインツの司教の実効支配下に入る。一八〇二年プロイセン王国に割讓。一時ナポレオン一世の直接統治を体験したが、一八一四年再びプロイセンに。
- (217) 漁夫の指環 使徒ペテロはガリラヤの湖で魚を獲る漁夫だった。
- (218) エーレンシュタイン Ehrenstein. テューリンゲンの小都市レムダの西方に、同名の村を見下ろす山城の廢墟がある。これはシユヴァルツブルク・ケーフェルンブルク伯爵領、トンナッゲライヒェン伯爵領、ヴァイマル・オルラミュンデ伯爵領の接点にあった。
- (219) 銀梅花 Myrthe. 桃金娘、天人花とも。純潔の象徴。花嫁はその花冠を被る。「沈黙の恋」、「リブッサ」訳注参照。
- (220) グレイアム博士 Doktor Graham. 博士号も疑わしい英国のいかさま医師シユイムズ・グレイアム（一七四五―一七九五）は、その名聲が絶頂にあった一七八〇年代、温泉地バスの洒落た自邸にいわゆる「天上界の寝台」というものをしつらえ、これで眠ると不妊治療に効果がある、と称した。
- (221) ギニー Guinea. 英国の金貨。英語の綴りは guinea. 最初はアフリカのギニア産の黄金で作られた、二十一シリング（二十シリング）一ポ

- ンド)に相当する金貨。最後の発行は一八一三年。
- (222) オールドウルフ Oruluf. 現代では Ohruf と綴る。テューリンゲンの小都市。七七七年古文書にその名が現れ、一三七五年市が立つ場となり、一三九九年都市の権利を獲得。初めグライヒェン伯爵領、一六三一年以降ローエンローエ伯爵領、次いで一九二〇年までザクセン・ゴータ公国に属す。ヨーハン・ゼバステイアン・バッハ(一六八五—一七五〇)が最初の音楽修行をしたのは、この町の教会オルガニストであった彼の長兄ヨーハン・クリストフ(一六七二—一七二二)の許において。(ちなみに、ナチス・ドイツはこの町の近郊で一九四五年三月三日原爆の実験を行なった)。
- (223) 動物精気 哲学用語。人体の中を循環し、微妙な生命機能を営む、と考えられた液体。「ローラントの従士たち」、「奪われた面紗」にも出る。また、訳注178をも参照。
- (224) 復讐の女神 Fure. ローマ神話の復讐の女神。
- (225) 晒し台 町の中心である市の立つ広場などに立てられ、軽罪を犯した者を、数時間、あるいは数日人目に晒して刑罰とする台。
- (226) 牡羊のように wie ein Wehr. 中性名詞の Wehr は「堤防」、「堰」、あるいはその類縁語である。これでは意味が通じない。男性名詞の Wehr には「牡羊」Widder、あるいは「三歳馬」(「嘶く」wiehern からか)の意味がある。どちらも勢いが好い。
- (227) 取替え子 Wechselsbub. 小人や妖精が生まれたばかりの人間の子を自分たちの眷属の一人と取り替えて寝床に置くことがある。こういう子ともは頭でっかちで、歩けず、大食で、言葉も話さない。これを「取替え子」と言う。
- (228) タチドコロ Brevi manu. ラテン語。
- (229) 車裂きの刑 ゲルマン古代から十八世紀まで行なわれた極刑。大の字に縛り付けた罪人の、両脛、両腕、背骨を車で折って、ぐにやぐにやの四肢をその車の輻に編み込み、台上に晒す。「沈黙の恋」訳注参照。
- (230) 聖ペテロ教会 エアフルト旧市街西側の小高いペテロの御山は数世紀に亘り修道院であり、城塞だった。その塁壁内にかつての聖ペテロ教会がある。
- (231) ガリア「ゴール」フランス」の海の英雄 der gallische Seheld. フランス王国の提督グラス伯爵・グラスティリ侯爵フランス・ジョゼフ・ポール(一七二一—一七八八)のこと。彼は独立戦争中アメリカ、すなわち大陸会議側と同盟したフランスの艦隊司令長官として英国艦隊と戦い、一七八一年チェサピーク湾口の艦隊決戦で勝利を収め、やがてこれがヨークタウンにおけるコーンウォリス將軍麾下の英軍の降伏(独立戦争の帰趨を決定)に繋がる。一七八二年英国の捕虜となった。しかしロンドンに到着すると、敵側から英雄として歓呼された。ただし一七八二年四月十二日というのは、彼の率いる三十三隻の軍艦が、ロードニー提督とフッド提督の英国艦隊三十六隻とカリブ海においてセント・キッツ島沖の海戦を行い、フランス艦隊が三分されて旗艦ヴィル・ド・パリを含む五隻の戦列艦が拿捕され、彼も捕虜となった日であって、グラス伯爵

がロンドンへ護送された日ではない。グラス伯爵は六箇月後フランスへ戻り、一七八四年軍法会議で無罪放免となる。

(232) こんな具合に……ギリシアの名をローマ風に訛って変えてこにしない『オデュッセイア（オデュッセウスの詩）』がリウイウス・アンドロニクス（二三八には在世）によってラテン語に翻訳された時、主人公の名オデュッセウス *Odyseus*（民間語源説では「憎む」の意）もウリクセス *Ulixes* に変えられた。更にこの古典ラテン語の表記・発音は、中世通俗ラテン語ではウリッセス *Ulysses* となったようである。「リブッサ」訳注参照。

(233) イスラム教徒の男性 *Muslimaner*。「ムスリム」はイスラム教徒の男性を意味するアラビア語（女性形ムスリマ）。けれどもこのドイツ語は訛った形。ヨーロッパには「啓」という複数語尾を伴ったペルシア語形 *Musliman* として伝えられたので、ムゼーウスはそれを基に綴ったのである。

(234) マホメット教徒 *Muhamedaner*。これは正しい呼称ではない。しかし、ムゼーウスは「ムスリム」、あるいはその訛った形は知っていたのであって、原注（4）ではこれを用いている。

(235) 「流行の雑誌」 *Journal der Moden*。一七八六年以降フリードリヒ・ユステイン・ベルトウーフ（一七四七—一八二三）とゲオルク・メルヒオール・クラウス（一七三二—一八〇六）によって発行された「贅沢と流行の雑誌」 *Journal des Luxus und der Moden* を指す。

(236) 風信子 *Hyacinth*。ヒュアキントス。ギリシア神話によれば太陽神アポロンが愛した美少年。西風も思いを寄せたが、色好い返辞をもらえなかったので怒り、二人が円盤投げ遊びをしている時、アポロンが投げた重い円盤を少年の額に真っ向から落ち掛からせた。真心籠めてその死を悼んだ神の力で、少年の傷口から大地に滴り落ちた血から百合に似た、しかし花弁は赤紫の花が茎をもたげた。これがヒアシンス。百合科の多年生草本。初夏、青・紫・紅・黄・白などの花を総状に付ける。地中海沿岸地方原産。

(237) コンウォルウルス・マリヌス *Convulvulus marinus*。ソルダネラ。桜草科の多年生草本。数種の属がある。白、紅、紫、絞<sup>しぼり</sup>などの美しい花を開く。

(238) カラフ *Kalat*。未詳。

(239) 科木 *Lindenbaum*。リンデン菩提樹。これまでただ菩提樹と邦訳されることが多かった。科木科の落葉喬木。高さ十メートルに達する。花や果実は薬用になる。

(240) バオバブ *Bahobab*。普通 *Baobab* と綴る。アフリカの少雨大草原に生えるバンヤ科の巨木。時には直径八—九メートルに及ぶ。瓢箪型の食用果実を生じる。エジプト人が嗜好するかどうかは不明。いずれにせよ、エジプトの地から少雨大草原<sup>サハラ</sup>までは遠い。

(241) ムシェルン、シャームベッケン、シエオメオン *Muschernen, Schanbecken, Schommeonen*。いずれもナイル河のさまざまな舟の種類。ドイツ語は複数三格のまま記し、単数一格と思われる形を片仮名表記した。「ムシェルン」は三角帆の舟か。「シャームベッケン」はドイツ語風

- で「室内便器」の意とも取れる。そんな形の小舟かも知れない。「シエオメオン」は原語であらうか。
- (242) ボスタンジ *Postang*. トルコ語ボスタンジ、アラビア語プスターニーは「園丁、庭師」の意。「園丁長」ではない。園丁長は「ボスタンジ・バシユ」で、イスタンブル(コンスタンティノープル)なるトルコ皇帝の御座所トプカプ宮殿では極めて責任ある地位で、従って大層権勢を振るっていたであろう。(スンザー著『岩永博訳』トプカプ宮殿の光と影)。
- (243) パレステイナへのハッセルクヴィストの旅行 *Hasselquists Reise nach Palästina*. フリードリク・ハッセルクヴィスト *Fredric Hasselquist* (一七二一—一七五二)はスウェーデンの旅行家にして博物学者。エステルイェーランド、*Ostergötland* 地方のテッネヴァツラ *Tornevalla* 生まれ。ウプサラ大学で植物分類学の泰斗カール・リンネについて学ぶ。パレステイナの博物学史に関する情報が欠乏している、とリンネがしきりに嘆いているので、この地方への旅行を決意。一七四九年の末頃スミルナ(トルコ語イズミル。エーゲ海に面する大都市。古代から名高い)に到達した。彼は小アジア、エジプト、キプロス島、スミルナの諸地方を訪れ、膨大な博物学史上の蒐集をした。しかし体質が天性虚弱だった上、旅行の疲労も重なり、帰国の途中スミルナ近郊で没した。彼の蒐集品は無事故国に戻り、死の五年後彼のノートがリンネによって『ばれすていな旅行——一七四九年から一七五二年に掛けて行われし聖地への旅』*Her Palestina, Eller Resa til Heliga Landet, Forfättad Ufvan år 1749 til 1752* なる表題で出版された。これは一七六二年フランス語とドイツ語に、一七六六年『一七四九、五〇、五一、五二年における近東での航海と旅』*Voyages and Travels in the Levant, in the Years 1749, 50, 51, 52* なる表題で英語に翻訳された。
- (244) マイセンのネイトリヒ困窮方伯 *Dietrich der Bedrängte Markgraf zu Meissen*. マイセン方伯困窮者ネイトリヒ *Dietrich der Bedrängte Markgraf von Meissen*. (一六二一—一七二二)。父の遺領を廻り兄弟のアルブレヒトと争い、一七九四年これを破るが、神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ六世が空位の帝国封土として没収したため、暫くの間方伯領を失う。ドイツ王位をハインリヒと争ったフィリップに加担。その後ドイツ王位・神聖ローマ帝国皇位を繞るオットー四世とハインリヒ六世の争いでは首鼠両端を持した。自領内の領邦支配権を一掃、究極的にライプツィヒを制圧、領土の文化を促進。フライベルクのアルテンツェレ修道院に葬られた。
- (245) フライベルク *Freiberg*. フライベルク・イン・ザクセン。ザクセン最古の鉱山都市かつエルツゲビルゲ最大の都市。アルテンツェレ修道院の地所に銀鉱が発見されて発展。一二五〇年から一五五六年まで貨幣鑄造所だった。
- (246) 皇帝ハインリヒ六世 *Kaiser Heinrich der Sechste*. フリードリヒ赤髭王・帝アドリアン (バルバロッサ)の息子。父の死後神聖ローマ帝国皇帝(在位一九一一—一九七)。この物語の時代の神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世の父。
- (247) フォン・ファルケンシュタイン *von Falkenstein*. 姓。おそらくは貴族の。ただし未詳。ザクセンにファルケンシュタイン男爵家がある。
- (248) 『ノルドガウイェンシムス選集』*analectis nordgavensibus*. ラテン語。未詳。後半は「ノルトガウイェンジーブ」*Nordgavensie(b)* とびつう姓をラテン語化したのである。

解題

ムゼーウスが素材に用いたのは、彼の故郷であるテューリンゲンの言い伝えで、ドイツ語圏ばかりかフランスなどでも人口に膾炙かいはしており、数数の小説・戯曲ともなっているグライヒェン伯爵の物語、テューリンゲンの名高い聖女エリーザベトに纏わる、これもヨーロッパに広く知られている伝説、それからザクセン公ハインリヒ獅子公デア・レーウエを主題にした民衆本フォルクスブーといったあんばい。

もとより最初のものが基幹として用いられているが、これについて解題を記すとごく簡略に扱っても小論文程度にはなる。紙数の関係で今回は翻訳・訳注に付して発表するのは諦めた。来年中に出版を予定しているムゼーウスの『ドイツ人の民話』第三卷『メレクザーラ ドイツ人の民話』（仮題）では必ず補うつもりである。とりあえず、グリム兄弟編・桜沢正勝／鍛冶哲郎訳『ドイツ伝説集』（上下。人文書院、一九八七年）五八一番（下卷三三四ページ）を参照されたい。

第二、第三の素材は本文と訳注で述べ尽くしているから、ここで煩瑣な繰り返しはしない。

近東関係の参考文献では、スウェーデンの植物学者フレードリック・ハッセルクヴィストの旅行記（訳注243参照）レヴァント

の他に、フランスの植物学者・旅行家ジョゼフ・ピットン・ド・トゥルヌフォール Joseph Pitton de Tournefort  
〔二六五八一七〇八〕の「王命により行なわれた近東旅行見聞録」Relation d'un voyage du Levant fait par  
ordre du Roy（一七二七）も用いられたか。これは一七七六年ドイツ語に翻訳された。「奪われた面紗」ヴェールの原注で後  
者の著者に言及されている。